
カオスポット ~ chaosing pot ~

barth

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カオスポット \ chaosing pot\

【Nコード】

N1675L

【作者名】

barth

【あらすじ】

【このところ世間を騒がせている連続殺人。

禍鏡と呼ばれる異形と、それと対立する能力者達。

これは非日常に生きる彼等の、非日常の物語。

ただしご注意をば一つ。

この世界は、常に非日常に満ちている。

それは彼らにとっても、また同じこと。】

人妖神魔入り乱れのごった煮現代ファンタジー只今開幕！！

感想や評価など下さると、作者が踊り狂います（笑）

プロローグ（前書き）

久々の作品です。

や、ほんと久しぶりで、なんだかまだ勘が全然戻っておりません（笑
さて、今回始まった小説ですが、暇つぶしにでも覗いてやってくだ
さいな。

感想などいただければ、作者のやる気にダイレクトに繋がります（

^^）

（毎週土曜更新）

プロローグ

「なんなのよ、あんた……」

思わず、呟きが口からこぼれた。

言おうとして言ったのではない。本当に、ただ純粹に、動揺から起こった反射のような動作だった。

こんなものは、知らない。

どれだけ記憶を遡っても、どれだけ知識を脳内にぶちまけて掻き出してみても。

今、自分たちの眼前に在るようなモノは、この場にいる誰一人の理解の範疇にも収まらない。

なぜ、自分たちはこんなものと対峙している？

なぜ、こんなものが目の前にいる？

なぜ、存在することが許される？

楽な仕事のはずだった。

仲間内からの評判は決して良いとは言えないが、それでも最も有効な手段だと思っていた。

相手の力量、経験、センス、その全てを推し量るのに丁度良い試練のつもりだった。

新しい同胞を迎えるための、性質の悪い茶番。

(なんのに、なんで、こんな)

息を呑む。

自分達を見つめているその赤い目に、月光を纏いなびくその髪に、その、おぞましい程の殺意の奔流に、当てられて。

それは未知との遭遇の興奮か、絶大な存在への畏怖か。 否、断じて否。これはそんな生易しいものではない。

人はこの感覚を、戦慄と、そう呼ぶ。

ありえない。

唯の人ならまだしも、自分たちが覚えるのはお門違いもいいところだ。

目の前のこれは、人だ。

目も耳も口も体も、普段相手にしているそれとは比べ物にならないくらい人間で、どこに戦慄を覚えることがあるだろうか。

理性が叫ぶ。間違えようも無いことだと理解もしている。

だと言うのに、本能だけが、今なお死に物狂いで警告していた。

これは、違つと。自分たちの知りえる何よりも、決定的に、壊滅的に、馬鹿げているほどに、違つと。

汗が吹き出る。喉がからからに渴いて、今すぐこの場を逃げ出したい筈なのに、どうやっても視線がそれから外せない。指一本動かすことさえ恐ろしい。

不意に、ソレと相對している彼女の脳内に、ここ最近の記憶が湧き出てきた。

まるで走馬灯のように……

デイトハカイ } first contact } 「1・1・1」(前書き)

短くなが〜く、続いていきます m () m

この世界に人間以外の知的生物はいない。

そんな常識が説かれたのはいつからだろうか。

十年前か？ 百年前か？ それとも、人類が生まれたその時から深層意識に刻み込まれてもいたのか？

いずれにせよ、それは誤りだ。

この世界に、それはいる。 数え切れないほどに。

空に、海に、陸に、彼等はひしめいて溢れかえっている。

ただ、人が知覚できていないだけだ。

だが少なくとも、今ここにいる人間達は、世に知られていない種族の存在を知っていた。

「これで七件目、か」

木製の枠と家具に囲まれた、ともすれば歴史ある武家屋敷の一室とも思われる場所で、トーンの低い女性の声が畳に敷いてある新聞に落とされた。

ポニーテールに結った黒髪に、すらりとした身体。 美人というよりは可愛いと評されるような顔も相まって、まさに美少女と呼ばれるに相応しい容姿の女性が、そこに居た。

苦虫を噛み潰した表情で発せられたその一言に、部屋に居る他の人影からも苦々しい雰囲気が漂っていた。

現在、この部屋にいるのは彼女を含め総勢四人。

外見からして全員大学生か、それに近い年齢であろう男女が、新聞を囲むような形で座っている。

彼らの視線全てが、同じ記事へと向けられていた。

『通り魔の恐怖！ 相次ぐ犠牲者は警察の怠慢か！？』

新聞の一面に大きく印刷された物騒なタイトル。 それは、今月の初めから始まった通り魔事件だった。

被害者に統一性は無く、現金を奪うわけでもない。

こういつた事件はこの辺りでは別段珍しいものではないが、ならばなぜここまで注目されるのか。それは他のそれとは違う奇妙な点、言うなれば、世間で注目されるようなイロがあるからだ。

今回の場合においては、殺害の方法だった。

被害者達の死亡原因は、皆一様に、全身骨折と内臓破裂。それも、まるで巨大な手に握りつぶされたような跡を残して。

目撃者も、悲鳴を聞いたものもない。夜とは言え、それなりに大きなこの街中でこんな派手な殺害方法をして誰にも気付かれずにいられるものだろうか。そもそも、凶器はいったい何か。

余りの情報の少なさに、警察は未だ有力な情報は愚か、殺害方法さえ分からない状態だった。

最初の犯行が起こってから、既に十日あまり。たったそれだけの間なのに被害者はもう七人にもものぼっている。

手段不明、手掛かり無しの連続猟奇殺人。世間を騒がせるのに十分過ぎる事件であった。

「ここまで派手なのは久しぶりだね。この前なんかはしよぼい行方不明事件で記事にもならなかったのにさ」

始めに呟いた女の隣で方膝を立てて座っていた男が、立てた膝に置いた腕で口元を隠しながら、皮肉を込めた口調で言った。

明るく染めたブラウンの髪に、それなりに整った容姿とそれを彩るアクセサリー。見るからに軽薄そうな印象を与える男だったが、今は多少真面目な表情を浮かべていた。

それに合わせて、彼の向かいに座っていた一番年の若そうな女性が苦い顔で口を開く。

「そうですね。最近は大人数しかかったのに、何で急にこんな……」
畳に下ろした手を握りながら、その目には動揺と被害者への同情が浮かんでいた。

長い黒髪に低い背丈、やや気弱そうな、ともすれば少女といったも過言ではないような顔で言う様子は、ただでさえ苦々しい事実の

雰囲気を一回り程濃くしているように感じられる。

一瞬。その場に居る誰もが押し黙り、嫌な沈黙が流れたが、幸いにもすぐにそれは破られたが。

「まあ、やられちまったもんをどうこう言っても、もうどうにもならんだろ。俺たちはただ、次に誰かがやられないようにするしかないさ」

沈んだ場に区切りをつけるような言葉を放ったのは、この場にいらる最後の一人。

第一印象を聞けば十人が十人ともが格闘家と言いそうな、短髪で引き締まった体つきの男が、太い両腕を組んで胡坐をかいてそこにいた。

その外見に似合った野太い声は、未だ若年とは言えどもそれなりの風格を伴っている。

「……そうね。とりあえず、虎さんの言つとおり。私たちにできる事をやりましょ」

「はい」
「だね」

ともすれば無情とも取れる男の言葉だったが、それに異を唱えるもの居なかつたのは、彼の人徳ゆえだろうか。

本来成すべき事を思い出した三人が、自身の感情を切り替える言葉と共に、ゆっくりと互いに頷き合う。

死者を哀れむにはまだ早い。

少なくとも、彼らにとつては。

「さて、それじゃあ作戦会議といきましょうか」

一転して、気合の入った声でポニーテールの女性の宣言に、他の三人の同意の声が重なった。

どうやら集まっていたメンバー全員が今この場に揃っているらしい。

噴出しの連続でも言葉になっっていない様子だったのは、茶髪にごてごてしたアクセサリーの軽薄そうな印象の男。高原と呼ばれた彼は、自分に向けられる殺意のような激情などまるで意に介さない様子で今も近くの街頭に何度も手を叩きながら笑い転げている。そして、そんな彼に向かって直進しようとしている筋肉に覆われた拳と言う凶器をわたわたとした様子で横から抑えているのは、御国と呼ばれた深遠のお嬢様を思わせるストレートロングの黒髪を持つ少女だった。

「ぬ、があ！ 放せ御国！！ 奴の捻じ曲がった根性を体ごと吹き飛ばしてくれる！」

「だーめーですってば」

御国の容姿ゆえか、轟は叫んではいるものの、肉体にあまり馬力をかけられないどかしさに身悶えている。

それからまごつくこと数分。

「もう、三人ともいつまで遊んでんのよ」

「なっ！？ 元はと言えばお前のせいだろ那凧！」

いい加減、と言うか、かなり呆れた様子で那凧と呼ばれたポニールポニールの女性が本題に移らんと三人の動作に釘を刺した。

もう飽きたのか、先ほどの笑みの代わりに設けられた白けた半眼と相手を非難するような口元は、向けられた相手からすればいかにも小憎らしいものであった。

それにより、高原に全く届かなかった轟の矛先が今度は那凧に向けられる事となる。いや、それともこの場合、ようやく元凶に向けられた、と言うべきか。

どちらにせよ、轟は歯をむき出しにしながら那凧に向かって声を張り上げたことに変わりはない。

「そもそも！ なんで！！ 俺が！！！ こんなことをせねばならんのだああ！！！！！！」

人通りのない夜の街角に、絶叫と言ってもおつりが来るような声
が大きく大気を震わせた。

もしこの辺りに暇な人間でも居れば、その声から滲み出る様々な
感情に好奇心をくすぐられ一目見に来るかもしれない。 そうなっ
た時、果たして後悔するのは、わざわざ注目されるようなことをし
てしまった轟か、それとも、見に来てしまった暇人か。

おそらく見物人の目にはこんな光景が映る筈だ。

街頭を豪快に叩きながら、恥も外聞もなく大笑いする美男子に、
丸太のような太い腕にぶら下がるような格好で待ったをかけている
深窓のご令嬢と、一步離れた所から半眼でそれを咎めている美少女。
そして最後に、ただでさえいかつい顔を更に歪めて吼える、熊の
ような猛々しい体格を持った……お姫様が。

押さえている少女のそれと比べて、実に三倍はあるつかという豪
腕を彩る鮮やかなピンクのレース。 筋肉しか無いのではなからう
かで見紛うほどに逞しい足の上半分を隠す、明らかにサイズの合っ
ていないフリル付きスカート。 漢と呼ばれるにふさわしい強面の
顔つきに添えられた白いヘッドドレスを見たとき、意識を保てるの
は恐らく勇者だけだろう。

素手で竜の首をへし折りそうなお姫さまの詰問は、二重の意味で
相手の心を打ち砕く破壊力を持っていると言える。 だというのに、
当的那風はまったくくひるむ様子を見せずにしれつと言いのけたもの
だった。

「何言ってるの。 じゃんけんで負けたんだから仕方ないじゃない。

自己責任よ、じ・こ・せ・き・に・ん」

右手の指を轟に向け、最後の言葉を指を動かすリズムに合わせて
わざとらしく区切る那風。 言い返しようなない所を突かれ、思わ
ず轟が口ごもった。

「ぬぐつ、だ、だがなあ」

先ほどまでの威勢はどうしたのか、自分の非難があっさり言い返
された拳句ばっさりと切り捨てられ、たじたじとなった轟は、それ

でもとばかりに情けない口調で食い下がる。

ここまでできて状況は変わらないだろうというのは彼自身分かってはいたが、それでも人間やすやすと割り切れない事もある。 少なくともこの雄々しき熊姫スタイルは彼にとってそうらしい。

「そもそも、こんな格好をしていては俺が不審者みたいじゃないか」
「何をいまさら、だね」

「ぬぐっ」

どうにか一矢を報おうとする轟だが、彼なりの精一杯の正論は今度は別方向の援護射撃で脆くも砕け散った。

撃つたのはいつの間にか笑うことをやめたのか、あからさまに呆れるようなポーズをとってシニカルな笑みを浮かべている高原である。 先刻のじゃれ合いを見たら分かるように、この二人の仲はあまりよろしくない。 まあ、轟が高原のスタンスを一方的に嫌っているだけなのだが。

「ま、まあまあ」

バチバチと物騒な火花を散らさんとする二人の間に、御国が割り込んで待ったをかけるが、あまり効果は期待できそうもない。

まるでどこかの三流漫画のようなワンシーンに、那凧はため息一つ、再び話を戻そうと口を開く。

「っ！？」

瞬間、彼女の意識が何かを捕らえた。

まるで脊髄反射のごとき勢いでその方向へと顔を向ける那凧だったが、その視線の先には、一見して何も異変は見られなただの町並みが広がっている。

だと言うのに、那凧の視線は先ほどとは比べ物にならないほどの苛烈さを宿し、瞳はケモノのように細く引き絞られていた。 全身にも、ただならぬ緊張感が駆け巡っているのが見て取れる。

突然の彼女の変貌ぶりに、那凧以外のメンバーは疑問の声を上げるどころか、何故か皆一様に同様の表情で同じ方向を向いているではないか。

その先には、ただただ凡庸な建築物がそそり立っている光景しか広がっているだけだと言うのに。

「来た」

「まさか、こんな馬鹿騒ぎしてる集団に突っ込んでくるとはな。随分調子に乗ってるようだ」

「さてね。もう一人ずつじゃ我慢できなくなったんじゃないかい？ どちらにせよ良かったじゃないか、そんな格好で歩きまわる必要がなくなったんだからね」

「はっ、全くだ」

「いったい彼等には何が見えているというのか。」

那凧の声を皮切りに、体に力を込めたメンバー達が緊張感そのままに軽口を叩く。

ただ一人。

両目を閉じ、何かを探るような表情を浮かべている御国を除いて。

「これ……待ってください！ 違います！」

突然、それまで黙っていた彼女から通常らしからぬ叫びが上がった。

「思わずメンバー全員の意識が彼女に集まる。」

「どうしたの早苗ちゃん？」

とりあえず何が起こったのか確認しようと高原が尋ねてみれば、御国が焦りの色濃く早口で捲し立てる。

「映世うつしよの方向と範囲の広がり方が直線的過ぎるんですよ！ まるで

「

「お、おい那凧!？」

御国が言い切る前に、それまで待ちの姿勢で構えていたはずの那凧が弾丸の如く駆け出していた。

引き止める轟の声などまるで聞こえていないかのように視界から消えていった那凧を御国までもが追うように走り出すが、その腕を轟が掴んで引き止める。

「放してください轟さん！」

「何なんだお前まで！ 一体どうしたんだよ！？」

必死に腕を振り払わんとする御国の叫びに、未だ状況の理解できていない轟の言葉が重なった。

「とりあえず落ち着いて早苗ちゃん。 僕等にも分かるように説明してくれないかい」

そこへ、とにかく熱を冷まし情報を得んとする高原の、幾分か柔らかな声が落とされる。

「襲われてるんですよ誰かが！！」
「なっ！？」

返ってきた答えに轟が思わず言葉を無くす。

同時に、動揺で彼の力が緩んだ瞬間、一気に腕を振り払った御国が那凧と同じ方向に駆けていった。

「くそっ！ 行くぞ高原っ」

「わかってる！」

御国から遅れること数秒。 ようやく今起こっている現実の重さに理解の追いついた二人が、表情をより一層険しくさせながら前の二人の後を追って走り出す。

轟の脱ぎ捨てた間の抜けた衣裳だけが、静かにその場に舞い落ちていた。

さて、男性陣が動き始めた頃。

那凧の方はというと、走った時間から考えれば驚くほど離れた場所まで来ていた。しかも、両手と両足に金属製の装備まで施しているではないか。

今もなお、陸ではなく建物の屋根伝いを凡そ人間とはかけ離れた速さで疾走する彼女は、相当な運動量をこなしているにもかかわらず、どういっわけかその表情からは微塵の疲れも見受けられない。

「こっちね」

呟いて、顔を向けると同時にターン。

自動車と同等か、或いはそれ以上の速度を出しながらも、たった一足踏み込んだだけで瞬時に進行方向を九十度変えてしまう彼女。

一体その一歩にどれほどの力と勢いが込められていたというのか、踏み抜いたコンクリートがけたたましい音と共にあっけなく砕け散り道路へ降り注ぐ。

だが、不思議とそれに反応するものはいなかった。

いや、反応しないのではない。

反応するものが居ないのだ。

どういっ訳かしばらく前から、生き物の存在自体が風景に全く存在しなくなっているのである。道、民家、明かりのついたコンビニにさえ、ただの一人も人影が見られない事など、果たして有り得るのだろうか。

しかし、那凧はまるでそんな事など意にも介さない様子で、目に見えない対象に向かって疾風の如く駆け抜けてゆく。

まるでこの景色が当たり前のように。

「……見つけたっ！」

呟きと共に、それまでのスピードが嘘のように消える。

五階建てのマンションの屋上の端から、乗り出すような前傾姿勢

のまま足だけを止め、凝らすように目を細く引き絞って正面を窺う彼女。そこには、眼下を走る道路の遙か向こうから自分の方へと向かってくる、小さな点が映っていた。

ふわりと、那凧の髪が揺れる。

それが屋上から身を投げたのだと理解した頃には、既に何事もなかったかのように地面へと着地する彼女の姿があった。

僅かに開いた唇から、浅い深呼吸が漏れる。

一見すれば静かに佇んでいるようにしか見えない彼女に、それは衰える様子を見せずどんどん近づいて来ていた。

八十……六十……五十……三十。

近づくにつれて、動いているものが何なのか、徐々に鮮明になっていく。

青年。

見たところ那凧と同じ位の年齢だろうか。割合整った顔に眼鏡を掛けた、知的な印象を受ける男だった。

無論、じつとしていれば、の話ではあるが。

今の彼の顔には濃い疲労が浮かび、息も絶え絶え。周りの障害物を気にする素振りも見せず、時に当たりそうになりながらも走り続ける様子は、知的というよりもむしろ、何かから必死に逃げ回る逃亡者のようだ。

また、怪我でもしているのか服の左腕部分が薄く汚れ、身体の動きもそこを庇っている様に見えた。

そんな男は、走りながら一瞬だけ後ろを振り返ると、何かに怯えるように顔を歪ませて速度を一層上げたのだ。走りながらも小刻みに震え今にも倒れそうになっている足が、彼が限界を超えて体を酷使しているであろうことを如実に表している。

那凧との距離が残り十メートルほどになると、男はようやく、前方に人がいる事に気がついたらしい。

彼女を見てはつとした表情を浮かべると、
「逃げる!!」

有らん限りの声で彼女に向かって叫びだした。
しかし、彼の意に反して、当的那凧は微塵も聞き入れる様子を見
せず、ただじつとそこに立ち尽くしたまま。

まるで何かを待っているかのように。

「聞こえなかったのか! さっさと逃げろ! 逃げろって!!」
それでも、那凧は動かない。

十……五……一。

なおも二人の距離は縮む。

男は諦めたのか、もはや叫ぶことを止めていた。

そして、

「っ」

刹那の邂逅。

すれ違う瞬間、男の目に映った見ず知らずの女の表情は。 寂し

げな、しかしどこか諦めたような、小さな微笑。

「っの!」

コンクリートが何かと擦れて悲鳴を上げる。

那凧は一センチたりとも動いていない。 ならば、男の足が遂に
限界を迎えて転倒でもしたのだろうか。 いや、それにしても響い
た音に打撃音が伴っていない。

では、何が。

「はあ。 ったく、自殺志願者かよあんた」

那凧の斜め後ろから、思いもよらず、呆れるような声が掛けられ
た。

彼女が思わず目だけを音源へ向けると、両手を膝に置いた前かが
みの姿勢のまま、顔だけを正面に、今まで逃げていたであろうモノ
に向けている男の姿が、視界の端に写される。

一度息を吐いただけだと言うのに、どうしたわけか彼の顔は、既に逃亡者のそれではなくなっていた。それどころか、妙に落ち着いているような印象さえ受けるではないか。

「え……？」

ありえないことだ。

人間とは言え、突き詰めれば動物だ。

つい先程まで絶対的な恐怖を覚え、肉体を限界まで酷使して逃げていた者が、見ず知らずの他人のためにどうして足を止めよう。どうして極限状況で本能を理性が押し留められようか。

出来るはずが無いのだ。たとえ誰であろうと、自分の命は見ず知らずの他人よりも重いからだ。

だが、男はあろうことか背筋を起こし那凧よりも更に前へ歩み出ると、顔を少しだけ彼女に向けて言った。

「いいか、アレが来たら、死ぬ気で走れ。……ま、見たら嫌でも体が勝手に反応するだろうけどな」

「あんたは？ 逃げないの？」

男の思わせぶりな言葉を流し、那凧が尋ねる。

彼女がこういう場面に出くわした回数は、一度や二度ではない。それこそ四肢の指を全て足しても足りない程だが、どの記憶を掘り替えしても、これほどの行動に移った人間は見たことがなかった。今の彼の行動がどれほど不自然で、どれほど本能を噛み殺しているか、それが判れば判るほど、那凧は聞かずにいられなかったのだ。なぜ、こんな行動をとるのか、と。

「逃げるさ。あんたと一緒にな」

強張った顔の主から返ってきたのは、馬鹿げていると、そう誰もが思うであろう回答。

つまりそれは、死ぬ程の状況から逃げることで、他人を死なせないという思いが釣り合っている事に他ならない。

自身の死と他人の死が同等の価値を持つなど、恐らく彼は余程の馬鹿か偽善者のどちらかに違いない。

そう那凧は確信した。

それでも、いや、だからこそか、

「ぷっ、変な奴」

頬が緩んだ。

「あんたもな」

笑われたことに若干嫌な顔をしつつ言い返す男。

よくある恋愛物の小説か何かだったならなら、ここで気の聞いた冗談の一つでも出てくるだろう。そんな、緊張感とはまるで無縁の思考さえ那凧の脳裏に浮かんだ。

初対面の相手に対してこういう感覚を覚えるのは随分と久しぶりだと、胸が躍るのを感じるも、生憎彼女にはそれを噛み締める暇も冗談を言い出す暇もありはしない。

「来るぞ！ 走る準備しとけ！」

両手を握って、男が緊張の走った声を張り上げた。

最初にしたのは、音。

唸りとも、声とも取れるそれは、一体何から発せられているかまるで判別がつかない。

しかし、ただ一つだけ確実なことがあった。

それは、追ってきているのは機械の類ではなく、明らかに生物だということ。生々しく、不気味で、聴く者の精神を削り取るような不快音。

一体どのような進化を遂げれば、このような音が出せるようになるのかは判らないが、それでも間違いなく、生在るもののそれである。

どれほどその騒音を聞き続けていただろうか、徐々に二人の目に、何かが映りだした。

夜の帳に隠された何か、人というよりは、ケモノじみたシルエツトが次第に輪郭から露わになっていく。

「…………ごめん」

不意に、呟きにも等しい那凧の声が、男の耳に届いた。

急に出た謝罪の言葉に男は何事かと振り向こうとするが、時既に遅く、既に那凧の掌が彼の首筋を捉えた後だった。

完全なる不意打ちに、男は全く反応できずに見事に意識を刈り取られたようだ。全身から力が抜け、そのまま崩れ落ちそうになる彼の体を、辛うじて那凧が抱きとめる。

「ほんと、ごめんね。ちよつとだけ寝てて」
申し訳なさを含んだ口調と表情で、ゆっくりと男を地面に寝かす。

那凧が顔を上げたとき、眼前には、細部まで鮮明に判別できるほどにまで近づいた例の追跡者の姿があった。

それは、質の悪い冗談のような光景。

彼女の認識にまず飛び込んだできたのは、アンバランスの極みとも言えるその異常な造形だ。

手足や胴は平均的な人間のそれとほぼ同じようなサイズの癖に、その先だけがひどく肥大化している。一人の頭から足までを握れるような掌が、どうして意識を惹かずに居られよう。一踏みで自転車をそっくり地面に縫い付けてしまう足が、どうして二の次に認識することができよう。顎の位置が股下まで至る顔を、どうして、見逃せよう。

闇に馴染んだ鉄色の肌も、瞼もない白一色の目も、口の端から突き出た草食動物のような巨大な歯も、髪の変わりに無造作に生える何本もの突起でさえも、この出鱈目な造詣ほどの恐怖を与えはしない。

化け物。

他にどんな言葉も必要ない。ただ只管にそれは化け物だった。なぜ現実にこんなものが居るのか、そもそもこれは何なのか、どうして、誰もこんな存在が居ることに気づかないのか、そんなことはどうでも良い。重要なのは、これが世間を騒がしている殺人事件の犯人であるということと、今、新たな獲物を見つけてしまったと言っ事だ。

那凧の顔と同じ大きさの目が間違えようもなく彼女自身を映していた。

今夜の、殺戮の主役を。

「こんばんわ、ご機嫌いかが？」

あまりの狂気じみた光景に本当に気でも狂ってしまったのか、彼女の口から出たのは、まるで知り合いにでも会ったかのような、気軽な挨拶の言葉。

いつの間にか、化け物は止まっていた。

奇怪な異音もいつの間にか鳴りを潜め、那凧達から二メートルほど離れた場所で前のめりにだらりとした様子で足を止めたそれは、じつと彼女を、彼女だけを見つめている。

化け物の、見ているだけで理性を溶かしてしまいそうな狂気の具現の視線をその身に受けながら、那凧はなお、笑う。

「これからあんたを殺すけど、いい？」

「……………」
にたり、と。

粘着質な音が聞こえそうな程に生々しく、化け物の口が、裂けた。こちらも笑っているらしい。それとも、嗤っているのか。取るに足らない小娘の、幾度も殺してきた人間風情からの、死の宣告を。その脆弱さを。

「……………」

僅かな笑みの交錯の後、化け物はその無駄に巨大な掌をその場で握り閉めた。

それだけだ。

たったそれだけで、風が唸り彼女の体が後方へと弾け飛んだ。

仰向けのまま空中を道路と平行に猛スピードで滑空する那凧の体が、三メートルほど飛んだ辺りで突然丸まる。後方宙返り、いわゆるバク転の要領で彼女が地面に着地した。しかし、一人を高速で飛ばすほどの力は足を地に叩きつける程度で留まるものではない。尚もその衝撃は靴底と地面に激しい摩擦の悲鳴を上げさせて彼女の体を後方へ吹き飛ばし続ける。

時間にして数瞬、距離にすれば十数メートルの後に、ようやく彼女の体は停止する。

道路に付いた黒い軌跡と白煙の先。片手の指先を地面につけるような前傾姿勢をとっていた那凧が、ゆったりと上体を起こした。

おかしな事に、あれだけの衝撃を受けたはずの彼女には、傷はおろか衣服にも破れ目一つ付いていない。

それも当然。

なぜなら、彼女は自分から後ろに飛んだのだから。

彼女の元居た場所にある砕けたコンクリートが、それを証明していた。

「あつぶないわね」。女の子にそういうもの使う、普通？」

短い溜息の後に吐かれたその言葉は、一体何に向けられているのか。

誰が見ても、彼女が相對している相手は攻撃的な行動を何一つしていない。もし化け物に言っているのだとしたら、彼女の言葉は常識から考えれば言いがかり以外の何物でもなかった。

だが、それはあくまで常識から考えれば、の話だ。

日常にありふれる温い常識など、果たしてどれだけこの場に通用するだろう。

何かがあつたのだ。あの一瞬の間に。

「……………」
化け物の、動きの全く読み取れない眼が僅かに細められる。

じりじりと肌を焼くようなその気配が、ここへ来て濃度を増した。

一挙手一投足でさえ命取りになるような異常な雰囲気。

殺気。そう呼ばれるものに全身を浸して、那凧の表情に初めて笑み以外のものが浮かんだ。

緩んだ口元を引き結び、眼光には高揚が宿る。

頬が高潮し、額に流れるは一筋の汗。

「来なさい。バケモノ」

咆哮。

那凧の挑発とほぼ同時に、化け物の口から夥しい殺気と不協和音が彼女に直撃した。

暴虐なそれは音の領域を逸脱し、物理的な衝撃にも近い圧を那凧

に与える。

刹那、彼女の瞳が耐え切れなくなったように瞼に隠れた。

まるでその瞬間を待っていたかのように、化け物は容姿とはまるでかけ離れた素早さで巨大な二つの掌を那凧へと向ける。そして、片方だけがその場で握られた。

「っの！！」

予想だにしない牽制攻撃だったのだろう。再び開けた目に映った握る瞬間の掌を見て、那凧は苦い表情と吐き捨てるような言葉と共に今度は横っ飛びに吹き飛んだ。

それまで那凧の居た空間が、彼女が居なくなった途端、いくつもの凹凸レンズを重ねたような歪みを見せる。

恐らく最初に跳び退った時も原因はこれだったのだろう。起こったのは、そう認識させるのに十分な説得力を持つ異常現象だった。辛うじてその場を逃れた那凧は、そのまま勢いを殺さずに体を反転させてコンクリートの塀に対し垂直に着地する。

間髪居れず放たれる二撃目が、那凧が重力によって地面へと縫い付けられる前に彼女を襲った。

「ふっ！」

裂帛の気合と共に超人めいた反射速度で那凧の体が上空へと跳ね上がる。途端、彼女のそれまで居た平らなコンクリートがまるで削岩機で抉られたような醜い五つの傷跡に変わった。

「……………」

化け物が、嗤う。

確かに那凧の反応速度と身体能力はその能力を持ってしても容易に潰せるものではなかった。だが、それは全て地と呼べる物体に足を着いてのことだ。

何かに爆発的な衝撃を与えることで起きる反則的な加速。それのみが、一重に彼女の命を救っていた要因に他ならない。

ならば、それが無くなってしまうえば、彼女に化け物の攻撃を妨げられる道理は無い。

跳ねる媒体の存在しない空中では、彼女はまさしく死に体だ。

あとは、化け物がゆっくりとその手を握るだけ。それだけで、彼女は今までの犠牲者と同じように哀れな肉塊へと変わるだろう。

化け物が、ゆっくりとその手を彼女へ向けた。

空間に生じた歪みの視覚化の違いを考えるに、恐らく対象に手を向けた方が出力が高いのだろう。つまりそれは、持ちうる破壊能力を十二分に発揮して那凧を圧壊させようとしていることに他ならない。

回避する術は無かった。

化け物の手が標準を合わせ、その手の直線状に那凧の姿が重なる。文字通り遙か高みから見下ろす相手と、これまで潰した中で最高の好敵手といえるその存在と、化け物との視線が重なった。

那凧の顔に恐怖は無い。だがそれは、決して諦観している訳でもなかった。

一瞬前の緊迫感は何処へ姿を消したのか、おどけるような表情をして、彼女は言った。片手の親指と人差し指を立て、ピストルに見立てたその銃口を、相手に向けて。

「ぱーん」

「っ!?!?!」

爆裂。

突然、化け物の腕が破裂した。その時何が起こったのかを言葉で形容するとしたなら、それが一番適切だろう。

那凧の声と同時に起きたそれは、一瞬にして互いの優位を入れ替えた。

どう取り繕っても人間に見えない化け物でも、その血は赤いらしい。

破裂し、未だその破片と紅い体液を先の無くなった腕から噴き出させ垂れ流す化け物は、恐慌そのままに金切り声を辺りに轟かせた。何が起こったのか理解できない。溢れる感情そのままに、化け物は砕けた手を押さえてのた打ち回る。

「言ったでしょ？ あんたを、殺すって」

人間のような動作で見上げた化け物の目に移った彼女の顔。それは、笑顔。

那凧の顔は何処からどう見ても笑顔と呼ばれるものを形作っていた。しかしそれは、何かが決定的に違った微笑み。

恐らくこの顔を見て、笑顔だと評せる人間はいまい。

彼女の目が宿す輝きは、一瞬前のおどけた様子など無い。喜を表すものとは似ても似つかない。

冷酷、残忍、狂気、瘴気。これはそういった類のものだ。決して陽の感情に結びつくものではないものだ。

その、恐ろしい程に冷めた笑い顔は、一体化け物に何を与えたのか。

尚も甲高い声を上げ続ける化け物。その眉間に次の瞬間、人間の、ただの人間の指先が、触れる。

狼狽しているうちに那凧は既に手の届く所まで来ていたのだが、恐れるべきはそこではない。

まるで粘土細工のように硬さを感じさせない様子でそこにあっただろう皮膚を破り骨を砕きその奥にあるものを貫き通すその破壊力こそ、最も恐れるべきものだったのだ。

化け物は、最後の最後で理解した。

獲物ではない。目の前のソレは、敵だったのだと。自身の存在を潰すに足る化け物。

音が、止んだ。

静寂の中、既に物言わぬ骸と化した化け物から、内臓をひり出すような不快な生々しさを伴った音と赤黒い鮮血を溢れさせて那凧が中ほどまで埋めた腕を引き抜く。

紅に塗れた腕が抜き切られるのを、何処からか鳴り響く軽快な拍手の音が迎えた。

「さっすが、店長」

店長、とは恐らく那凧のことなのだろう。

突然のことにも微塵も驚く様子は見せず、彼女は目だけを拍手の発生源の方へと向けた。

「なにがさっすが、よ。出て来もしなかったくせに」

那凧の言葉を受けて暗がりから出てきたのは、高原。そして、御国に轟だった。

「いや、あはは。アレの能力からして、標的が絞りやすいほうがやり易いかなって。でもでも！ちゃんとサポートはしましたよ！」

「そうそう、結果オーライ」

御国と高原の弁明に、那凧が納得の行かないような溜息を吐く。

「あのねえ、さなちゃんはともかく、大の男が二人も揃ってこんなか弱い乙女を囷にするなんてどーいうことよ」

ジト目で睨む那凧の視線に、高原は飄々と、轟はすまなさそうに言葉を返した。

「適材適所ってね、店長のチカラなら問題ないでしょ」

「すまん那凧。出ると逆に邪魔になると二人に言われて、つい」

「……まあ、虎さんのだと結構厳しかったかもね。相性悪すぎ」

それぞれの言い訳を聞いて、轟にだけ不可抗力だったでもと言いたげな優しさの混じった台詞を投げると、彼女はさっさと三人の先を歩いて行ってしまふ。

「あ、ちよつと店長！どこ行くんですか？」

予想外の行動に困惑した御国の呼びかけにも反応しないまま歩を進めていく彼女の先には、数分前となんら変わっていない体制で寝転がる男の姿が在った。

最後まで那凧を見捨てなかった、あの変人である。

先程の苛烈なやりとりの中で彼に被害が行っていないであろう事は判っていたが、実際に間近で見て何処も怪我をしていないことを確認すると、思わず那凧の口から安堵の息が漏れた。

「その人が今回の被害者ですか？」

とことごと那凧の後を走って追いついてきた御国が、彼女の後ろから顔をひよいと覗かせて問いかける。その様子に気遣いの色が無い所を見ると、恐らく那凧の表情から彼が凶行を免れた事を悟ったのだろう。

御国の質問に答えるより早く、御国より尚も後ろのほうで無駄話をしている二人に彼の運搬を命じると、那凧はまたさっさと御国を追い抜いて先に行ってしまう。

途中、彼女は御国を振り返って悪戯っぽい口調で言った。

「うん、そう。もしかしたら長い付き合いになるかもね」

「……はい？」

言葉の意味が判らずに御国が疑問の声を上げるが、那凧はもう次の話題に移っていた。

「さて！ やることもやったし、飲みにも行きましようか！ も

ちろん、高原の奢りでね」

「はいはい、判りましたよ」

「よしっ、派手にやるか！！」

したり顔でそんなことをたまう那凧に、高原はあきらめたように男を支えていない方の手で降参のポーズをとり、轟は喜色満面に笑顔を浮かべる。

何を食べるかで盛り上がりながら去ってゆく三人を、御国だけが意味深な台詞に捕われたまま思案顔でその場に立ち尽くしていた。

静止することしばらく、

「って、皆さんちょっと待ってくださいよ〜！」

誰も居ない静寂の中、御国がまた駆け足で三人の後をパタパタと追いかけて行った。

それから、どのくらい時間が経っただろうか。

男がようやく目を開けた時、視界には見慣れない景色が広がっていた。

「……やれやれ」

いつまでも寝ているわけにも行かず、とりあえず彼は立ちあがることにしたようだ。

あんな目に会った後とは思えないほど軽快に立ち上がった男は、まず最初にずれた眼鏡を直し、次に頭をぼりぼりと指先で搔くと、最後に辺りをぐるりと見回した。

草木以外のものを見て、ようやく男は今自分が何処にいるかを把握する。

そこは、公園の茂みの中。彼が倒された道からさほど離れておらず、この町に住む者にとっては見馴れた場所でもあった。また、この辺りは警察の巡回ルートにも組み込まれているため、夜でも比較的安全な場所でもある。

恐らくこれが、非日常に生きる那風達なりの精一杯だったのだろう。まあ、そんなことは男には知る由も無いだろうが。

「帰るか」

あれ程の目にあつたにも関わらず、彼は特に急ぐでも考え事に耽るでもなく、なんとも普通の足取りで帰路につき始めた。

おかしな事に、まるで困惑の色も、動揺の色さえも見せずに……

デイトハカイ } f i r s t c o n t a c t } 「 1 . 1 . 4 」 (後書き)

さてさて、これにて第一章は終了でございます。

というか、初日に奮発しすぎてもはやストック切れという始末……

o r z

これからは、ちょとのんびり更新となりますです。はい(苦笑)

感想など頂けたら、作者が大層喜びますm(^| ^)m

さてさて第二章開幕。

今回からは「あの人」中心に話が進められていきますよ〜(笑)

「お会計、八百四十六円になります。……………丁度お預かりします。ありがとうございます」

午前中最後の客を見送り、店員の男が一息付くと、店の奥から年配の女性が顔だけ出して声を掛けた。

「お疲れ様、緋膏くん。休憩、入っていいわよ」

人のよさそうなふくよかな顔に笑みを浮かべる様子は、気の言いおばさんという言葉が良く似合う。

「お疲れ様です。じゃあお言葉に甘えて、後はよろしく」

朗らかな劳いの台詞に小さく会釈して、緋膏と呼ばれた男は手近にあったタバコの棚から一箱摘まんで店の奥に向かう。

割合整った顔に眼鏡を掛けた、知的な印象を受ける男。紛れも無くあの時追われていた男に他ならない。

あれから一日、正確には十三時間と少ししか経っていなかったが、彼は平静そのままにバイトに出勤し、労働に勤しんでいた。

その様子には微塵の違和感も見られない。

今もいつも通り、休憩になると店から一箱取って吸うと言う行為に至る最中だった。

足早にロッカー室を抜けた緋膏は、丁度店の裏側に位置する場所に出ると、おもむろに手の中の煙草を開封する。

この店では店長が煙草の臭いをあまり好まないため、煙草は裏で吸う事が従業員達の暗黙の了解になっているが故の行動だ。

銀の包装紙を解き、真新しいその中の一本をやや時間を掛けて啜えると、オレンジ色の制服の胸ポケットから覗いている百円ライターで点火する。

肺一杯に有毒物質を吸い込み、周りには吸った以上に有害な煙を撒き散らす。

いつもと同じ光景。ここまでは。

どうも昨日から彼には何かの縁があるらしい。普段ならここで時間一杯まで煙草を吸っているか、ロッカー室に戻り昼寝でもしているのだが、今日はそのどちらでもなかった。

「サボってて良いの？ 店員さん」

人通りが少ないどころか皆無の裏道で、緋嵩の後ろから友人に話しかけるかのような軽い調子の言葉が掛けられた。知り合いといえは知り合いの、名も知らぬ女の声。

それに対し、彼はまるで驚いた様子も無く、平然と返したものだ。つた。

「良いんじゃないか。店長の許可は貰ってるからな」

振り向きもせずそれだけ言って、再び喫煙に没頭する緋嵩。

彼の背後からまだ退く気配が見られない所を見ると、彼女はもつと何か言いたい事があるらしい。

対して、緋嵩の方はそんなことお構い無しに煙草を吸い潰していた。

煙草の長さが最初に話しかけられてから半分ほどになった時、ようやく背後から非難めいた声が緋嵩に投げられる。

「ねえ、せめてこっち向くぐらいしたら？ 一応私、話しかけたんだけど」

「……何か用か？」

いかにも気だるそうな溜息を一つついて、面倒くさそうな雰囲気垂れ流しながら振り返った緋嵩の視線の先には、頭一つ分低いポニーテールの女の姿。

言うまでも無く、昨日会ったばかりの女。緋嵩曰く、自殺志願者もどきの那凧である。

「昨日のこと、覚えてる？」

緋嵩が振り向くと同時に投げかけられた那凧の質問に、一瞬、二人の間に沈黙が流れた。

那凧が存在するということは、昨日起こったことがまぎれも無い事実であるという証明に他ならない。

もしも緋嵩のこれまでの反応が夢や幻覚でも見たのだと自己完結している故のものであるならば、通常なら沈黙の後起こりうる事態は二種類に絞られる。動揺の一つも見せて現実逃避に走るか、根掘り葉掘り問いただすかのどちらかだ。

当然那凧も、そのどちらかを予想していた。

だが、緋嵩から返ってきたのは憎らしいくらい普段どおりの口調でただ一言。

「ああ、とりあえずいきなり後ろから襲い掛かるのはどうかと思う」言葉のわりには攻める様子は無く、むしろあっけらかんとしたその反応に那凧は訝しむ様な表情をして呟いた。

「やっぱり、記憶は残ってるみたいね」

「で、それがどうかしたのか？」

携帯灰皿にぐりぐりと煙草を押し付けながら呟く様子は、傍目にはどう見ても平静を崩していない。そんな緋嵩の様子に、那凧の顔が困惑や懐疑を通り越してもはや呆れるようなものに変わる。

「どうかした、じゃないわよ。あんた、あんな目に会って平気なわけ？」

「生きていれば不思議なことの一つや二つはあるもんだろ。そもそも、実際出会った後にそんな筈は無いなんて現実を否定できるほど夢見がちでも無いんでね」

そこまで言って、緋嵩はふと、忘れ物でも思い出した表情をして言葉の最後に付け加えた。

「そつえば、一応助けてもらったことになるんだつたな。ありがとう、助かった」

「呆れた……あんた、相当な変人ね」

言っていることは尤もだが、人間としては激しく型を外れたその思考に、那凧が額に手を当てて溜息を吐くように言った。

つまり、簡単に言ってしまうえば緋嵩は化け物に会った事も、その後助かって公園に放置された事も全て理解した上でこう考えていたのだ。不思議な事もあるものだ、と。

昨晚、なんとしても那風を死なせまいとしていた粘り強さとはまるで反対の切り捨てた物の考え方に、那風は一瞬本当に同一人物なのかと疑ってしまう。とは言っても、容姿も声も記憶も全てにおいて合致しているのだから疑いようが無いのだが。

「よく言われる。それで？ 記憶が残ってるのに問題でもあるのか？」

脱線しかけた話を戻した緋嵩は、そう言って探るような目を那風に向ける。

警戒心をむき出しにしない辺り、彼が上辺だけでなく、少なくとも思考の部分でも平静なのだということを物語っていた。

対して、那風の方には脅迫する気も、危害を加える気も無いように、パタパタと手を振ってその気が無いことをアピールする。

「あ、そこは全然良いの。ただの確認だから。それよりさ、聞きたいことがあるんだけど」

「確認、ね。で、一体何が聞きたいんだ？」

相手は、方法は分からないが自分を襲ってきた化け物から、少なくとも自分も込みで逃げ切るだけの実力は備えている人物だ。下手に煙に巻くのは得策ではないだろうし、曲がりなりにも助けられた義理はある。総合して鑑みるに、ある程度のことば答えても良い、というよりも答えざるを得ないだろう。

表面上はなんでも無いように言っているが、恐らくはこういう風に色々と納得した上での返答だったに違いない。

彼の返答に満足したのか、那風は「そうねえ……」と言って、腕を組んで壁に寄りかかる。

少々長くなりそうな予感に、緋嵩は早くも脳内で昨晚の出来事のトレースを始めていた。

「じゃあ、まず、どうやって出会ったの？」

「昨日のバイト帰り、いつも通っている道を歩いていたら背後から寒気がしてな。で、振り返ってみたらそこにあいつが居た」

淀み無い緋嵩の反応に、那風は今までの彼の言葉が偽りでないこ

とを改めて実感する。

恐怖心や日常への依存が明らかに欠如しているとしか思えない彼の反応にどこか自分と似たような空気を感じながら、那凧は質問を続けた。

「で、襲つて来たから慌てて逃げたと」

「そう言う事だ」

淡々と答える緋嵩に、那凧が少し感心の色を滲ませて言う。

「にしても、よく逃げられたわね。　今まであれに七人も殺されてたのよ」

「あの程度の速さなら、何とかなつたんでね」

緋嵩には誇つたような様子は無い。　ただ、当たり前前の事を語っているようにしか見えなかった。

「ふーん。　ああ、そう言えば、そのときの怪我……は、もう良いみたいね」

煙草を持つ彼の左腕を那凧がちらりと見る。

「大したものじゃ無かったからな」

腕をまくりこそしなかったが、軽く動かす様子は微塵の躊躇も、不自然さも見られないものだった。

問題の無いことに安心でおしたのか、それを見ていた彼女の目が僅かに細められる。

「そっか。　聞きたいのはこれで全部。　ありがとう」

思ったよりも短い問答の終了宣言に、緋嵩の声が重なった。

「で、結局これからどうするんだ？」

口調や表情からは見受けられないが、あまり重要とは思えない質問の連続にまるで取調べでも受けたようで、彼としてはどうにも話の核が掴めずに困惑しているのだろう。

それも当然だ。昨夜出会ったばかりの、付け加えれば、見るべきでないものを見てしまった相手に対し、どうでもいい事をただ話す為だけに來ることなどありえないのだから。

最悪、昨日の二の舞に近い出来事が起こる事を想像し、相手に気付かれない程度の僅かな緊張が緋膏に走る。

彼の微妙な感情に気付いたのか、彼女はそれまで話していた内容を、気にするな、の一言であっさりと区切り、ようやく話の本題を切り出した。

「実はさ、昨日のアレ、ちょっと物騒なもの持ってるのよ」

「物騒、と言うと、世間に未発表のウイルスか何かとか？」

突然聞き手の興味を煽るような誘い口調に変わった那風の様子に少々作為めいたものを感じつつも、話題が話題だけに、加えて本題への興味も手伝ってか、緋膏は素直に話に乗った。

「そう、それぞれ。あんたも知っての通り、私達はいつらと戦える。でも、そんな情報は、あいつらの情報だって世間に流れてなんかいない。この意味、あんたなら分かるでしょ？」

至極単純な内容をわざと試すような口調で語りかける彼女に対し、その意図を読んだ緋膏は、これ以上まどろっこしいのはごめんだとばかりに一気にその核まで話を詰める。

「つまり、体を調べるから秘密基地的などこに來い。そういうことか？」

「あー、まあ、簡単に言えばそうね。今日の夜10時に、この場所に來てほしいの」

これからゆっくりと納得させながら持っていくはずだったところに一足飛びで来られた事に少し気まずそうにしながらも、那凧ははっきりと肯定する。

那凧の差し出した名刺ほどのサイズのメモを微塵の躊躇も見せずあっさり受け取った緋嵩は、何を言うでもなくただじつとそれを見つめていた。

見てはいけないものを見てしまった人間の場合、こういった誘いにはまず疑心から入るのが大多数だ。少なくとも、彼女が出会ってきた人間はそうだった。

だからこそ那凧はゆっくり納得させながら誘うように仕向けたのだが、緋嵩はそれを自ら省いた。

果たして上手く乗ってくれるかどうか。那凧はなんとも無いような表情を繕いながら緋嵩を観察するような目で見るが、彼の表情は相変わらず著しく感情の読み取りにくい冷静さが浮かんでいるばかり。

たった数秒の短い沈黙が流れる。だと言うのに、いつの間にか那凧の方が話の主導権を奪われ、居心地悪そうにしていた。

今の那凧にとって、どうやら緋嵩はあまり得意な相手ではないらしい。

緋嵩は知らないが、実はこの誘いは那凧としては是非とも乗って欲しいものだったのだ。そのような状態の彼女にとって、内面が読みにくく非常識への動揺が皆無な緋嵩は、やり辛くこちらの動揺を誘うばかりで、不安を煽ってしまう要因としては十分過ぎる。

そんな状態が続いていれば、主導権など言うまでも無い。一方の緋嵩のほうも、思うところがあったのか神妙な顔で懸念事項を探っている最中だった。

那凧には悟られては居ないが、今彼の中ではめまぐるしく情報と現実の照らし合わせが行われている。彼にしても、ただ主導権を握るような溜めを作っている暇も、そんなことに傾ける思考の余裕も無い。まあ、目的第一の彼のことだから、話の主導権などどう

でもいいと考えていただけなのかもしれないが。

沈黙が始まって約一分。 たった六十秒なのだが、この言いようも無い雰囲気在那風の我慢は限界に達したらしく、何でも良いとばかりに彼女の口が開く。

が、幸か不幸か彼女から声が出る前に、緋嵩の方から出た言葉が先に沈黙を破った。

「分かった」

「はえっ!？」

「……なんだよいきなり？」

適当なことを言うつもりだった那風だが、その瞬間耳に入った了解の意に意識を奪われ、出すはずだった言葉は素っ頓狂な泣き声に変わってしまう。

ここに来いと持ちかけたのは那風の癖に、了承した途端に奇声を上げたものだから緋嵩の目は変なものでも見るかのようにだった。

「あ、あはは。 なんでもない、なんでもない」

自らの失敗に加え、白けた緋嵩の目に若干頬を赤くしながら那風が手なんかをパタパタと仰いで誤魔化す。 場を取り付くろうように咳払いなどをひとつとして見せるが、どうにも胡散臭さが増すだけの結果に終わったようだ。

「……」

「おっけ、じゃあ今日の十時にね。 忘れないでよ」

あまりにあからさまな那風の様子を生温かい視線で眺める緋嵩に対し、本人だけはすっかり場を取り繕った気分で彼に片手を振りながらして颯爽と去って行ってしまった。

振り返った口元に、うつすらと笑みまで浮かべて。

那風の後姿が粒ほどになり、声も届かなくなった頃になるまで見つめていた緋嵩。 その表情はいつの間にか、また何を考えているのか掴めない冷静沈着なものに戻っていた。

緋嵩は片手で煙草を出して啜えると、火をつけてまた肺いっぱい煙を吸い込む。

そのまま、ゆっくりと煙を吐き出した彼は、誰に言つてもない、誰にも届かない声量でぼつりと呟いた。

「はあ。白か、黒か」

真昼の路地裏の静寂に、彼の言葉が落とされ消える。

どうでもよさそうに、ほとんど吸っていない煙草を投げ捨てて緋嵩も店へと帰って行った。

残されたのは、火の消えそこなった煙草だけ。

もう誰も居なくなったその場所で、それはゆらゆらといつまでも煙を上げ続けていた。まるで何かを暗示するかのようだ。ゆらゆら、ゆらゆらと。

ハイイロノサソイ } second contact }

「1・2・2」

(後書

今回はちょっと短いですが……っ、次こそはっ (汗

皆さんこんにちは。

更新をしそこねた大ばか者です。

来週こそはちゃんと上げるぞっ!!

「ここだな」

渡されたメモに書いてある地図と今現在周りに存在する建造物とを見比べて、緋嵩が呟いた。

住宅街とは言えず、かと言って高層ビルが立ち並ぶほど産業が発達しているわけでもない場所。少し寂れた都会、とでも言えばしっくりくるような景色の中に、それはあった。

色あせた木の外壁、今の時代稀少とされる瓦敷きの屋根、門は無く、開放たれた入り口には大小様々な壺や置物、本といった如何にも古臭い品々が並んでいる。

『那凧骨董店』

時代を感じさせる造りの看板に書いてある文字を見て、緋嵩は小さくため息を吐いた。

「胡散臭いとは思っていたが、まさか場所までとは」

決して大きいとは言えないその店を見て、緋嵩の脳裏に浮かんだ光景は二つ。一つは、古い骨董屋の地下に最先端の技術がひしめいて玩具めいた近未来兵器に囲まれる那凧。もう一つは、呪術的な文様の浮かぶ部屋一杯に敷き詰められる古文書と、そこで魔方陣を描き怪しげな呪文を唱える那凧。

どちらにしる、ろくでもない想像にげんなりしていると、突然彼に後ろから声が掛けられた。

「胡散臭くて悪かったわね」

怒っている訳ではないが、それなりに棘のある言い方をする声の主は、当然。

「あんたか、どうも後ろから話し掛けるのが好きみたいだな」

振り返った緋嵩の目に、つい先ほどまで脳内で胡散臭さを最大限に放出していた女の姿が映る。

想像に出てきた時の怪しげな笑みとは違い、現実の方は半眼で緋

嵩を責めるような表情をしていた。

「あのね、人を変人みたいに言わないでくれる」

「そんなことより。 約束通り来たが、このまま中に入れば良いのか？」

昼の時と同じようなその辺りに居る若者と同じ格好をした妙齡の女が化け物と夜な夜な夜な相対していると言った時点で少なくとも普通とは言えないだろうと思つた緋嵩だったが、そこを言うと余計に棘が鋭くなりそうだったので、敢えてこの話題は流すことにしたようだ。

メモを片手に早速本題へと移つた緋嵩への返答はしかし、彼の予想とは少しばかり違つていた。

「ああ、中に入る必要は無いわ。 あそこじゃ何にもできないし」「は？ それじゃあなんで呼んだんだ？」

ばつさりと今自分の居る場所が目的地であることを否定された緋嵩は、怪訝そうに聞き返すが、

「まあまあ、詳しい話は向こうで話すから、付いて来て」

一方的那凧はそれだけ言い残してスタスタと別方向に歩いていつてしまう。

訳が分からないという様子で緋嵩はしばらく那凧の後姿を眺めていたが、このままここに居ても仕方ないと強引に割り切り、とりあえず彼は彼女の後を追いつ始めた。

「……………」

「……………」

互いに無言で歩を進めていく二人。

何度か那凧に目的地やウィルスについて話しかける緋嵩だったが、その都度「来れば分かる」、「専門家は別に居るから」と言つた拒絶の言葉を返されるばかりだったため、いつの間にか言葉から情報を得ることを止めた。

どうやら、今は黙つて付いていくという選択肢しか彼には用意されてないようだ。

緋嵩が質問を止めてから、一体どれだけ歩いただろうか。周りの景色はもはや、彼の見知ったものを欠片ほども残していない。

見たことも無い風景を目に映しながら、これからどうなるかは想像もつかないが、とりあえず今ここで那凧が居なくなれば迷子になる事だけは確実だろうと、緋嵩はそんなことを考えていた。同時に、もし追われるような状況に追い込まれた場合には致命的だ、とも。

なぜそんなことを考えていたかというところ、彼は歩き始めて少し経ってから、あることが気に掛かっていたからだ。

デジャヴ、とでも言うのだろうか。前にもこんな雰囲気を感じたような感覚に囚われていたのである。何かは分からないが、ただ何となく良くないもののような、そんな感覚を。

一体何なのか。彼の思考は、それが全く無くなってから、ようやく原因に気付いた。

音。

どうしてもっと早く気がつかなかったのか。

歩き始めた頃に比べ、今の状況には音が無いのだ。人のざわめき、車の駆動音、虫の声すらも。自分達以外に生き物の気配が感じられない。

緋嵩はそれを知っていた。つい最近、命を落としそうになったその状態を。初めてあれと対峙したときの、その世界を。

「おい、気づいてるか？」

さすがにこれ以上黙っている訳にも行かず、緋嵩は黙々と前を歩いている那凧に声をかける。

彼から滲む剣呑さに彼女も気付いたのか、今までのように切り捨てずに、初めて足を止めて振り返った。

「ええ、わた」

爆発。

「っ!？」

突然の轟音と、襲い掛かる衝撃波に緋嵩の全身が反射的に身を屈め頭を守る姿勢をとる。

何が起こったのか、緋嵩にはまるで理解ができなかった。目の前でいきなり起こった爆発が、一時的に彼の目と耳、そして思考を滅茶苦茶に食い荒らしていた。

うずくまって必死に感覚と平静を取り戻していた彼が、はっとして顔を跳ね起こす。

「おい！ おい無事か!？」

取り戻した視界に、緋嵩は自分の状態の全てを二の次にして駆け出した。

うう、もうまともな時間には上げることができないのでしょうか……
次はちゃんと土曜日に更新できたらいいなあ(泣)

彼の目に入ったのは、恐らく最初の衝撃波と、今尚辺りをうつつら覆い尽くす煙の原因であろう塀の残骸と、瓦礫に紛れて倒れる那風の姿。

未だ全速力とはいえないまでも、精一杯の体で駆け寄った緋嵩は、声に全く反応を示さない那風を抱き起こす。

狭いとは言えなくも、せいぜい普通の路地で起きた爆発だ。何の身構えも無くいきなり近距離で爆発する衝撃は、一人の命を危ぶめるのに十分な破壊力を持っている。

薄ら寒い考えを振り払い、緋嵩は那風の様子をよく観察しながら首筋に手を当てた。

「……まだ脈はあるな。おい、生きてるか？」

所々汚れてはいるが外傷も無く、脈も安定しているのを確かめると、緋嵩の表情に若干の安堵が覗く。内臓系の損傷も否定しきれないため、緋嵩はできるだけやさしく彼女の頬を叩いて呼びかけを続けた。

何度目かの呼びかけの後、閉じていた那風の埃だらけの瞼が、ゆつくりと開かれる。

「つつ、良かった。あんたは、無事みたいね。けほっ！ けほっ！」

かすれるような声に加え、苦しい表情を見せる那風だったが、とりあえず意識は取り戻したようだ。

まだ安全とはいえないが、このまま担いで病院に行けば何とかなるだろう。そう考えると同時に、緋嵩は那風を両手で抱えて立ち上がった。今自分が歩いてきた方向に向き直り、抱える相手に衝撃を与えないようゆつくりと足を踏み出そうとして、止まる。

突然の爆発に負傷者。間違っても運が良いとは言えないその状況の中で、尚も彼の災厄は続くらしい。

「……………」

土煙の中に、何かが居た。

揺れ動くそれは、ゆっくり、しかし確実に、緋嵩たちの方へ近づいてきている。

「チツ」

とりあえず那風を後ろに隠そうと反対に向き直るも、そこにもまた、こちらに向かってくる影の姿が。

もとより逃げれるとは緋嵩自信思っておらず、反射的に思わず振り返っただけなのだが、そうして得られた予想外の情報に彼の口から溜息が漏れた。

「今度は二体か。 つくづくついてないな、俺は」

言って、爆発した塀の奥、見知らぬ誰かの家の庭に那風を横たえる。

「に、げ、なさい。 あんた一人じゃ、死ぬだけよ」

「良いから、お前は寝てろ」

途切れ途切れに逃げると警告する那風に向かってそれだけ言うと、緋嵩は塀の外へと出て、向かってくる二つの影と対峙した。

一縷の望みをかけて、ポケットにしまった携帯電話を取り出してみる。 市街地の真っ只中に居るも関わらず、何故か圏外を示しているそれ。

緋嵩の思った通りだった。 昨晚あれに襲われた時と、同じ。

自分たち以外に誰も居ない、外界と遮断された世界に放り込まれたような感覚。

「やっぱりか。 ……それで？ 今日とは一体どんな化け物がでるんだ？」

呟いた言葉に重なるように、ゆっくりと煙の中から足が踏み出される。

「……………へえ、驚いたな」

徐々に見えるその姿に、緋嵩に素直な感情を口から漏らした。

二つの足、二つの手、顔は一つ。

緋嵩のそれとサイズは多少違うが、それでも十分に許容範囲。現れたのは、ただの人間だったのだから。

いや、ここは人間にとっても近いものだった、と言い直した方が良さだろう。なぜならその顔は、古臭い面によって隠されており、その下に必ずしも人の顔があるとは限らないからだ。

全体像を見れば、比較的細身の白い仮面と、大きめな凶体の黒い仮面の二人組。二人を交互にしばらく観察していた緋嵩の口から、硬質的な口調の言葉が吐き出される。

「あんたら、本当に人間か？」

半ば本気での問いかけだったが、当然というべきか、答えが返されることは無い。代わりに、

「……っ」

白仮面が足元に在った小さめの瓦礫をいくつか手に取ると、小さな気合と共に一つを鳩尾に向かって的確な投擲をして見せた。

「くっ！」

咄嗟に横に逸れて躲す緋嵩が、睨むように白仮面に鋭い視線を向けると、

「っう！？」

足首に走る激しい痛み、動揺の言葉が漏れる。

見れば、その横に転がる瓦礫の破片と、青く変色した肌。

いかに白仮面に注意を向けていたとは言え、黒仮面のほうにも意識は向けていた筈だった。視線の端に捉えていた黒仮面に動いた様子は全く無い。

確かめるように改めて今一度視線を向けて、緋嵩は愕然とした。

注目すべきは、黒仮面ではなく、その横。

なんてことは無い、ただの道路標識がそこにあった。

そう、白仮面の正面。自分を挟むような位置づけで。

「なるほど、化け物だな」

緋嵩の言葉を受けて、それまでの間に礫をズボンのポケットにしまい十分な補充を確保した白仮面が、おどけた様に両の掌を緋嵩に

向けて開いてみせる。

黒仮面は動いていない。白仮面は礮を投げたのは最初の一投きり。緋嵩の後ろにある標識。後ろから当たったその礮。

ならば、考えうる事実は一つ。たとえどれほど馬鹿げていようと、今の状況を考えれば理解するのはなんて事は無い。

目の前の敵は、初めて持った形も質量も定まっていない物質をその反射まで計算して投げる相手なのだ。なるほど、人間の能力を超えている。一体どれほどの分析力と肉体の精密なコントロールがあればそんなことが可能だと言うのか。

考えるほどにきりの無い相手の能力の予想を切り捨て、緋嵩はもう一方の黒仮面に注意を向ける。

順序から言えば、次に化け物ぶりを見せるのはこちらの筈だ。

その筈だったのだが、どうもこちらは攻撃どころか動く気さえ無いようで、現れてからじつと、まるで退路を防ぐためだけのよう。ただ其処に仁王立ちしていた。

「フェアじゃないな。二対一でやるんだから、得意技くらい見せてもいいと思うが？」

先ほどの白仮面の対応から言語が通じていることを確信した緋嵩が、探るよつに言つ。

ハイロノサノイ } second contact } [1・2・5] (前)

汗 (マウツ) 汗

やはり、と言うべきか。 今回の相手は言葉を解していた。

なぜなら、緋嵩の言葉に返答する形で、大きく筋肉質な体格に似合った野太い男の声が黒仮面から発せられたからだ。

「そいつに勝つたら、相手をしてやる」

破られた仮面の沈黙は、緋嵩にとって二つの幸運をもたらした。

一つ目は言うまでも無く、正直今の状態で化け物じみた能力を持った二人の相手を同時にするのは厳しかったことであり、二つ目は、どうやら相手は仮面を被った人間の可能性が濃厚になってきたことだ。

化け物と、化け物じみた能力を持った人間は、当然ながら全くの別物である。

肉体強度が、思考が、行動が、人間を相手にした場合、化け物の時と比べ殆ど全てにおいて遥かに難易度が下がると言っている。

加えて緋嵩は、既に時間稼ぎも終えた。

彼はほんの僅か、視線だけで白仮面を確認すると、顔だけは黒仮面を見つめたまま口を開く。

「ああ、そうかい!!」

台詞でカウントダウンを取るようにタイミングを合わせ、一気に白仮面に突進。

「なあっ!?!」

仕草も態度も黒仮面に向け、移動力に先ほど致命的ともいえるダメージを与えられている筈の緋嵩が見せたそのあまりの機動性と瞬発力に、完全に先手を取られた白仮面が驚きのままに声を上げる。

慌てて瓦礫を構えようとするももう遅い。

「っらあ!!」

一気に懷まで距離を詰めた緋嵩の掌底が白仮面の無防備な下腹部に炸裂した。 そのまま前のめりに後ずさった相手の胸に間髪いれ

ず横向きで飛び込むように入り込むと、うな垂れた顔面を肘打ちの格好で下から一気にかち上げる。

「がはっ!!!」

恐らく生身の人間だったなら鼻骨が砕けていたであろう衝撃だったが、仮面を被っていたのが幸いしたようだ。素顔をさらけ出す事と引き換えに顔面骨折を免れた白仮面は、僅かに宙を舞ってから受身も取らずに背中から地面に激突した。

死んではいないだろうが、当分戦闘行為は不可能だろう。

ピクリとも反応しない元・白仮面には目もくれず、緋嵩は仮面を砕き割った肘を軽く払うと黒仮面へと向き直った。

「さて。あんたの芸、見せてくれる約束だろ？」

「……やるな」

静かに気合のこもった声が、緋嵩に向けて発せられる。

彼の一拳手一投足を見逃さないように視線を絡ませ身構える様子には、白仮面のような隙は見られない。

先ほどの撃退は決して緋嵩自身の能力が相手に勝っていた訳ではなかった。あれはあくまで、相手の油断に付け入っただけものだ。どれほど実力があろうと、手の内を晒し隙も垂れ流す相手の対処法などいくらでも在る。

だが今、緋嵩は目の前の相手の特技も攻撃の間合いも知らない。仲間が一人やられた相手としては当然の反応だったが、それでも僅かに舌打ちが口から漏れた。

彼が約束を守って能力を見せる保証など、かけらも無いのだ。

同じ土俵で戦えば不利なのは目に見えている。

「ふん、俺はあいつほど間抜けじゃないぞ」

言って、黒仮面は闘牛の如く緋嵩に突き進んできた。

あまりに無防備に見える行動だが、その雰囲気には過信も油断もありません。

まるで当然とも言わなければならない、緋嵩は何かを仕掛けるべきかとも思ったが、慌ててそれを否定した。

黒仮面の動きは隙があるのではない、誘っているのだということに気が付いたのだ。

白仮面と違い、明らかに相手と顔を合わせた戦いに慣れている行為に緋嵩の緊張が色濃く現れる。

「っせい!!」

攻めあぐねた結果、何をしてもなく接近を許してしまった緋嵩に向けて黒仮面の筋肉に包まれた拳が振り下ろされた。

横に飛んで回避しつつ、勢いはそのままに後ろへもう一度飛んで距離をとる緋嵩。

非常時ゆえの反応速度か、常人ならば足を挫くなり躓くなりしてもおかしくない無理な連続技だったが、難なく彼はやって見せた。

「なるほど、さっきの奴が曲芸まがいの遠距離戦で、あんたが筋肉馬鹿を活かした近距離戦か。良いコンビだな」

跳び退った格好のまま表情だけ強気的笑みを浮かべた緋嵩がそう投げかける。

安い、明らかな挑発。

近距離の格闘戦をするものにおいて、感情を高ぶらせて油断を誘うと言う定石に沿った行動だった。

安易に乗らないまでも反応くらいはするだろうと踏んでいた緋嵩だが、しかし、黒仮面は言葉に反応するどころか、緋嵩が元居た場所の先にあつた壁に拳を打ちつけたまま動こうともしない。

「約束だったからな」

緋嵩ではなく、目の前の壁を見やりながら呟くと、ゆっくりと、

黒仮面はその手を押し込んだ。

そう、押し込んだのだ。

「……なるほど」

熱した鉄板に水を落としたような音と白煙の中、まるで粘土を前にしているように易々と黒仮面の拳が壁に沈んでいく姿に、緋嵩から苦々しい呟きが漏れた。

壁の様子からして、恐らくは異常な熱量を拳から発しているか、

纏っているかのどちらかだろう。どちらにせよ厄介な能力だった。「こういうことだ」

壁に文字通り風穴を開けた手を開閉して無骨に言い放った黒仮面が、緋膏に視線を合わせる。

引き抜いた手には、一目見て異常と呼ばれるところは無い。何の変哲も無いただの手だ。

その、ただの手が、コンクリート製の頑強な壁をバターのよう貫く力を持っていると誰が予想できるだろうか。

「厄介だな」

呟きながら、緋膏は跳び退ったままの方膝をついた体制のまま後ろ手を彷徨わす。

黒仮面の手には一目見て高熱と判断できる材料は傍目からは見られなかった。全身からの発動が可能なのか？ 継続時間は？ 発現のタイムラグは？ 全てにおいて、彼には情報が足りない。

弱者の特権は情報と知恵。

緋膏はそれを良く知っていた。故に、それらを最大限に活かすべく、彼は目的のものを掴む。

「さて、もうそろそろ行かせてもらおうぞ」

仕掛ける様子の無い緋膏に対し、余裕の滲む声で言い放つ黒仮面がゆっくりと足を踏み出した。

緋膏はその様子を見て思う。確かに油断は無いが、どうして彼らはこつとも相手を舐めているのか。例え鼠でも、追い詰めれば猫をかみ殺すと言つのに、と。

手を抜いているのが傍目にも分かる彼らのあからさまな態度に何を思い出したのか、緋膏が下を向いて冷めた笑いを見せた。

だがそれも一瞬。

すぐに黒仮面に鋭い視線を向けると、死角になっていた手を勢よく振りぬく。

「ぬっ！？」

突然投げつけられた瓦礫の破片に反射的に黒仮面が片手で顔を覆

う。

残念ながら顔面には命中しなかったが、比較的鋭利なそれは黒仮面の腕を掠り、僅かな傷をそこに残した。

緋嵩はその結末を確認しながら、話している間に目星を付けていた瓦礫の破片を両手に収める。

黒仮面が自分を視界に捕らえる瞬間を狙って、緋嵩は集めた大小様々な瓦礫を今度は散弾銃の如く一気に投げつけた。

「無駄だ！」

一閃。

無造作に横風に払った腕が、投げつけた礫の殆どを無力化した。振りぬいた腕の後に、仮面の奥で鼻で笑ったような音が響く。

衝突面を滑らかに変化させ弾かれた礫が地面に落ちるのとはほぼ同時に、黒仮面の腕に衝撃が走る。

案の定、ズルズルと腕を伝って下に落ちた瓦礫に視線をやると、黒仮面の落胆したような声が緋嵩に掛けられた。

「無駄だと言ってるだろうが」

「そうか、よっ！！」

想像よりずっと近くから聞こえてきた声に、黒仮面は弾かれる様に声のした方向に視線を向ける。

目に映ったのは、既に一メートルと離れていない位置から自分に叫ぶ緋嵩の姿と、風を切り唸りを上げる足の膝までの部分。

自分の能力を見せてから、黒仮面はその絶対的な相性の悪さからてつきり遠距離戦に切り替えたと思ひ込んでいた。いや、そう思ひ込まされた。

緋嵩の策略に気付くより早く、黒仮面のさらけ出した首筋を彼の足が容赦なく蹴り抜く。

「は」

息の漏れる音と共に、蹴られた勢いそのまま落とされた頭部が地面へと叩きつけられた。

首と頭部、計二撃。

いくら頑強な体をしていようと、良くて脳震盪、悪ければ頸骨骨折の衝撃はさすがに効いたらしい。

倒れた格好のまま動かない黒仮面を見下ろして一つ息を吐くと、警戒を解いた緋嵩の声が彼に落とされる。

「全身で発動できないのを見せたのは失敗だったな」

咄嗟には発現が出来なかった事と、広範囲に降りかかる礫をわざわざ腕で振り払った事。この二つさえ知れば、彼が接近に持ち込む理由としては十分だった。

周りを一望して倒れこむ二人の姿を確認した後に、緋嵩は服に付いた埃をぞんざいに手で払う。

……ぱち、ぱち、と。

緩い拍手の音が緋嵩の耳に入ってきたのは、その時だった。

ハイイロノサソイ } second contact } [1 : 2 : 6] (前書)

ていやっ……いやまあ、遅刻なんですケドねorz

「まさか二人ともものしちゃうとはね。 予想以上だわ」
壊れた塀の向こう。

死角になつていた壁の先から、悠々と彼に向かって歩いてくるのは、誰であろう倒れたはずの那凧だった。

「お前……？」

突然のことに語尾の上がつた声を出す緋嵩を差し置いて、怪我した様子など微塵も見られない那凧は彼の前で止まると倒れた二人に向かつて口を開く。

「それにしても、高原は良いとして。 虎さん、ちょっと舐めすぎだったんじゃない？」

これは一体どういうわけか。

彼女の呆れるような声に反応して、倒れていたはずの二人がややふらつきながらもむっくりと起き上がりだしたではないか。 しかも、元・白仮面の顔は高原そのもの。

つまり黒仮面は必然的に轟と言うことになる。

轟の方は黒い仮面のせいで表情は分からないが、高原は額をさすりながら苦笑いを浮かべていた。

「はは、店長の話から大体の能力は知ってたけど、予想以上だったよ。 軌道は読んでいたんだけどそれでも結構喰らっちゃったし。

ほんとに一般人、彼？ だとしたらかなりのセンスだね」

そう言つて立ち上がると、那凧の隣まで歩いていく。 その様子には多少のダメージは見え隠れしているものの戦闘不能とはとても言えない。

一方の轟も、

「ああ、悔しいが高原の言うとおりだ。 蹴られてから少しの間、意識が飛んだぜ。 大した奴だ」

外した仮面を適当に投げ捨てると、蹴られた辺りを手で摩りなが

ら悔しげにそう口にした。

どうやら緋嵩の予想以上に手を抜いていたらしい二人の様子を見て、那凧は満足そうに緋嵩に視線を移す。

「ふーん、話した感じ只者じゃ無いとは思ってたけど、そっか、とんだ掘り出し物だったわけね。さなちゃんも連れて来ればよかった」

警戒した目で睨んでいる緋嵩の様子など気にも留めず人差し指を口元に当てたりなんかして口ずさむ様子には、まるで敵意がない。

そうこうしているうちに歩いてきた二人の足が止まり、那凧を含めた三人が緋嵩の正面にそろう形になった。

戦うというよりは別の、何かいい事でもあった時の興奮のようなものが見える雰囲気で那凧が続ける。

「そう言えば、自己紹介がまだだったわね」

言葉と共に掌で自分を指すような仕草をとった彼女は、今更ながらに自分のことを話し出した。

「那凧涼香よ。ななぎ りょうか 能力は増幅。まあ、簡単に言えば何でも好きなものを一つパワーアップさせられるってところかしらね。ほら、

高原も虎さんも自己紹介して」

得意げにそう語ると、那凧は二人にも自分と同じようにするよう促した。

彼女の言葉に一速く反応したのは高原だ。

「店長、まさか、今まで彼に名乗ってなかったのかい？」

那凧の意に反してはいたが、彼から出た言葉は至極当然の疑問だった。そう、那凧は今の今まで、緋嵩に自己紹介はおるか、まともにも名乗ってすらいなかったのだ。

緋嵩が頓着しなかったせいもあるが、大雑把と言うか、なんとも間の抜けた話である。

「あ、はは。私も今気付いたとこ」

「……相変わらず、変なところで抜けていると言っか、基本的に大雑把なんだよな那凧は」

腕を組んで那凧のこれまでを目を瞑って思い返すように言ったのは轟だ。

言い終わった後の溜息が、那凧のこれまでを周りに容易に連想させる。

「い、いいじゃない、今そんな事は。それよりほら、さっさと自己紹介しなさいってば！」

轟の反応に頬を赤らめて抗議していた那凧が、話題を変えようと傍で頷いていた高原に強引に話を振った。と言っより押し付けた。口から火でも吐きそうな那凧の剣幕に押されて、高原が苦笑を浮かべながら緋嵩に向き直る。

「はいはい、分かりましたよ」

体の埃をある程度払い、場を整えるように芝居がかった咳払いを一つすると、その整った顔にさわやかな笑顔を浮かべて高原が口を開いた。

「僕は高原信也、呼び方は好きに呼んでくれて構わないよ。持っている能力は捕捉、ものの動きや力の軌道を正確に捉えることができる能力さ。よろしく」

これで自己紹介した相手が若い女だったなら好感の一つも持たすことが出来るかも知れないが、生憎緋嵩は同姓を恋愛対象にはしていない上、襲われた直後に急に好感を持てるような刹那的な感覚を持つている訳でもない。

高原もそれは承知しているようで、握手や相手の反応を促すような行動は起こさずにいた。言葉使いとは裏腹に真摯に伝えることだけを目的とした自己紹介を選んだと考えると良いだろう。

自己紹介を終えて一歩ひくと、高原は最後の一人に促すようなジェスチャーをした。

高原の催促を受けて組んでいた両手を解くと、最後のメンバーである轟が口を開く。

「ああ、俺は轟武虎（たけと）ってな。能力は纏火（たてび）ってな、メンバーの中では一番単純だ。ようは、体のどこかをものすごく熱くで

きるっただけだから」

まるで同意を得たいかのような邪気の感じられない素直な笑みを浮かべて彼は自己紹介をそう締めくくった。

そうして、三人ともがそれぞれ自己紹介を終えると、それを見計らって真ん中に居た那凧が一步踏み出して緋嵩に向けてにっこりと笑う。

意気揚々と、まるで新しい友人を迎えるかのように明るい雰囲気を出して。

「これから、よろしくね」

残りの二人も、似たようなものだった。

那凧ほどあからさまではないが、そこにもはや敵意の色は見えない。和やかに、緋嵩を迎える状況を整えるばかりだ。

歓迎の言葉が投げかけられてから、僅かに間が空いた。

自己紹介の頃から閉じられていた男の瞼が、ゆっくりと開けられてゆく。彼の表情には、怒りや驚きといったものは感じられない。無表情のまま、その口から言葉だけが紡がれる。

「なにが、よろしくなんだ？」

彼の、緋嵩からの言葉は、これまでに無いほど冷たいものを内に秘めていた。

ハイロノソイ } second contact } 「1・2・7」(前書)

久々にセーフ!!
やりました!

「え……？ いや、それは、ほら」

緋嵩の言葉から滲み出る不穏な圧力に、那凧の表情が動揺を含んだものに変わる。

彼女が意味のある言葉を構築するよりも速く、緋嵩の言葉が投げかけられた。

「大体の事情は理解できた。つまりは、悪趣味な入隊試験だったって訳だな？」

「あ、はは。まあ、そういうこと、かな」

眼鏡越しの鋭い視線に当てられて、那凧の顔は気まずいものを見せ付けられたように動揺を示していた。怒鳴り散らすでも、驚くでもない、ただただ冷静で鋭いだけの思考と言葉がどうにも自身の行為の後ろめたさを際立たせているように感じさせるのだ。

頭に血が上ったなら別の事に興味を移せばいい、驚かせたなら謝罪の一つでもすればいい、どちらにしても付け入る隙は出来る。

だが、冷静に切り返される事ほど厄介な返答はない。

なにせ、付け入る綻びを抱えているのは完全に那凧達なのだ。

相手を取り乱した所に付け入らなければ、状況改善など出来るはずも無い。例えどんな大層な理由を抱えていようと、だ。

「だが、それは所詮そっちの理屈だ。俺が話に乗ってやる義務は無い。……構えろ」

「は、はい？」

予想できた反応だった。

那凧たちの脳裏に過ぎった、この試験をした場合の最悪の返答。少なくとも、前半はそうだった。

「構えろって、どういうこった？」

「そのままの意味だ」

不穏な緋嵩の言葉に、最初に理解を表したのは轟だった。

彼らとしても、相手の実力を無理やり試すこのやり方が不評を買うことは十分承知していた。故に、それによる相手の反応も考えられている。

だが、緋嵩の言葉はそれに収まりきらない。轟への返答も、まずまず三人の思考を乱すだけだった。

油断を突いて各個撃破した、それでも相当手を抜いていた相手に再び挑むなど正気の沙汰ではない。いや、そもそも戦力分析以前に、ただの一般人が何度もこんな命を削るような戦いを望むだろうか。

どの角度から考えても繋がらない緋嵩の行動に、三人はただ動揺と困惑を示すばかり。

彼らが理解に悩まされている間に、緋嵩はくるりと反転すると、ゆっくりと三人から距離をとり始めた。

無論、この場から去ろうとしている訳ではない。なぜならその証拠に、彼は歩きながら再び那凧達に話しかけていたのだから。

「俺の実力を見る、気が済んだから終わる、それはあんた達の都合だろ。俺には何の関係も無い」

背中越しに語りながら三メートルほど那凧達との距離を開けて、緋嵩は足を止めた。

「あんたらは俺に戦いを吹っ掛けたんだよ。そして、俺はまだそれを終わらせた覚えは無い」

振り返って再び那凧達に視線を合わすと、緋嵩は上着のポケットから取り出した煙草を無造作に啜えて火をつける。

気だるげに煙を吐き出した様子とは裏腹に、彼の目だけは眼光鋭く獲物を見るような光を放っていた。

明らかな敵意。

彼の放つ空気に、那凧達、主に那凧が焦りも明らかに弁明する。

「その、騙したのは悪かったと思ってる！でも聞いて、私達にも事情が」

「分かってる」

「え？」

一息吸っただけで足元に捨てた煙草を踏みにじりながら発せられた緋嵩の意外な返答に、那凧の言葉が途切れた。

ここへ来て尚、彼の様子には攻めるものこそあっても責めるものが見られ無いという奇妙な違和感を感じていた那凧は、彼の次の言葉でその訳を知ることになる。

「理由も無くこんなことをやらかす奴なんてそうそう居ないだろ。

誰にでも理由はある。でもな、だからどうした？」

最後の台詞は、まるで氷のようだった。

少なくとも那凧達は、緋嵩のその台詞に背筋をぞくりと走りぬける冷気を感じ、返す言葉を失う。

「あんた達の理由は俺には関係ないし、知ったことじゃない。生憎そこまでお人好しじゃないんでね。俺に戦いを仕掛けた時点で、あんた達は敵なんだよ」

那凧に指を指してそう宣言した緋嵩は、向けていた手を目元に寄せて掛けていた眼鏡を外すと、何を考えているのかそのまま握り潰したではないか。

プラスチックの砕ける時の軽い音が何重にも重なって、緋嵩の足元に無残な残骸を作り出した。

「ちよ、ちよっと待つてよ！」

敵という言葉に、思わず那凧が叫ぶ。

緋嵩の様子に責めるものが無いのも当然だ。

彼は理解していた。那凧達が普通ではないことを知り、襲われた今も何か理由があるのだろうと、襲われたとは思えない冷静さで、そこまで思考を巡らしていたのだ。

しかし同時に、切り捨ててもいた。例え何があるうと、刃を向けるものは敵だと、完全に割り切って。

他人の事情を知りつつ、自分のスタンスを貫き通す。それはつまり、相手の都合による行為を責めはしないが、自分の行為を止める理由にその都合を干渉させないと言うこと。

那凧は、緋嵩のそのあまりに孤立した考え方に気付いたからこそ、叫ばずに入られなかった。

お前はお前の好きにしたらしい、ただし、俺も好きにやる上にお前の事情を何も聞き入れる気は無い。緋嵩を仲間に引き入れようとした那凧への、受け入れないと言う絶対的な拒絶。

故に、納得する訳にはいかなかった。

「待て、那凧」

だが、先に続けようとした彼女の言葉は、行く手を妨げるよう正面に突き出された太い腕と共に仲間である筈の人間に止められた。

那凧がなぜ止めるのかと言いたげな顔で睨むと、邪魔した本人、轟がその視線を受けて静かに首を振る。

「無駄だ。言葉と表情では分かんが、相当頭に血が上ってるみたいだからな。俺たちの言葉なぞ聞き入れんだろ」

轟の言葉に、反対側に居た高原も頷いた。

「そうだね。何せ僕ら三人と同時にやり合う気満々みたいだし、ここはひとまず彼を話を聞ける状態にした方が良さそうだよ、店長」

二人の言うとおり、緋嵩の言葉は気分を害した事象意外に意識が向かなくなっているだけとも考えられる。

緋嵩は那凧たちと完全に敵対したのか、それともその場の感情でそう言っているだけなのか、那凧たちに判断する術は無い。

唯一つ確かなのは、言葉でどこにかできる段階は過ぎ去ってしまったということだ。

戦いが続いていると言うならば、まずはそれを終わらせない限り何も始まりはしないだろう。

二人の言葉に気持ちを納得させられた那凧は、意識を切り替えるかのように一度目を瞑って頷いた。落ち着いて息を吐き、再び目を開ける。

迷いは、もう見られなかった。意識を緋嵩に、彼との戦いだけに集中させた証拠だ。

「二人ともありがと。そうね。とりあえずあー言ってるんだし、

遠慮なくぶつ飛ばしちゃおっか」

「それでこそ、那凧だな」

「だね」

三人が再び戦意を出し始めた頃を見計らってか、緋嵩から声が掛けられる。

「準備は良いようだな」

構えこそ取っていないが、何かあるような、なんとも言えない不吉さを漂わせる緋嵩を見て、高原が挑発するような口調で返事をした。

「君こそ、いいのかい？ 正直な話、さっきは僕も彼も手を抜いていた。それに、今回はもう一人いる。君が勝てる可能性は低いんじゃないかな」

子供に言い聞かせるような説明めいた内容に、彼の浮かべる苦笑は、見るものが見れば馬鹿にしているようにも取れるだろう。実質、高原としてもここで彼が冷静さを失って向かってくれば間髪入れず仕留めるつもりだった。

しかし、高原の言葉に対して、緋嵩は感情の揺らぎを見せる代わりに、さも当たり前のような口ぶりでこんなことを言い始めたではないか。

「貴様達はどうかやら我等に近いようだな。餌を演じる必要性も無く、ふざけた真似をしてくれた礼に手加減なんぞする気も無い。

覚悟はいいな、下種共」

それは宣告。いや、もしかすると、最後の警告だったのかもしれない。

だが、知識の無い人間がいくらそんなことを言われたとして、理解できなければその言葉は意味を成さない。

この時、那凧たちは誰一人として緋嵩の台詞をまともに受けはしなかった。口々に戯言と、歯牙にかけようとせぜすにただ聞き流した。

無理も無い話だが、故に、彼らはその身をもって知る。

自分達の前に、今まで、何が居たのかを

第二章「ハイイロノサソイ」はこれにて終了。

ふふ、次回からはいよいよ彼が動き出しますよ (^・^)(ノ

アカゾメノケモノ　Witch is the monster　「1」

最近ごたごたして更新できませんでした〜!!

すみませんorz(泣

その分これから五日間、三章をがすつと載せますはい(< | >)

記憶が現実へと戻ってきていた。

あの時。　緋嵩の宣言が終わってからまず那凧たちの注意を引いたのは、彼の目だった。

赤い、何処までも紅い目。

まるで血を連想させる鈍い光に、那凧達は言いようもないざわついた感情を感じ始めたのだ。

そして、彼の首までしかなかった筈の黒髪が、肩に垂れるほどの赤髪に変わる。

外見上の違いは、それだけだった。

なんてことは無い、彼らが普段相手にしているものと比べれば、一般人と言ってお釣りが来る程の僅かな変化だ。

だと言うのに、彼らは今までこれほどまでに禍々しいと感じた記憶が無かった。

瞬き一つすることさえ戸惑われる威圧感。　殺気、いや、もはや

これは瘴気と呼んでもいい。

触れるもの全てを侵して狂わせてしまうような、そんな途方も無い気配。

今まで化け物と呼んでいたものに比べて遥かに人間で、そして遥かに異常な生き物。　こんな存在など、那凧たちは知らなかった。

考えすらしなかった。

自分達が戦っている存在以外の異常を、いつの間にか無いと断定していながら陥る落とし穴。　知らないもの。　その異常性が、存在全てが、彼らの恐怖を揺り動かす要因たり得る。

戦うことさえ馬鹿らしく思えてくるほどの存在感を痛いほど肌を感じながら、那凧達は目の前に居る緋嵩だったモノを見る目に、より一層力が入るのを感じた。

肉体が感じる本能的な恐怖か、それとも生き残りたいと望む生存

本能か、それは本人にも分からない。

彼に変化が見られたとき、那凧達は咄嗟に身構えていた。

人間が未だに動物の枠を超えていない生き物であるが故に。理性ではなく、本能で身体が反応したのだ。理

目の前に存在するモノからはどうやっても逃げ切れない事を、無意識下に確信しているから。だから、構える。戦って打ち倒すことが目的ではない。身を守る本能に、ただただ肉体が忠実に動いているだけの行動だ。

今まで死線を掻い潜り、生存本能を少なからず研ぎ澄ましてきた彼らの肉体だからこそ選ぶことが出来る、最善と呼べる選択だった。

「……やばいね。これは」

額に吹き出た汗を拭う隙さえも恐ろしく、高原が緊張と震えに塗り固められた口調で呟いた。

「高原、虎さん。ごめん。やっぱりこの方法、止めた方がよかつたみたい」

那凧の言葉だけが、二人に向けて放たれる。

「済んだことだ。それより、今はあのバケモン相手にどうするかだ」

苦々しい轟の言葉。

構えを取りつつも、一步でも誤って踏み出そうものなら即首を刎ね飛ばされるようなプレッシャーに全身を固められ、誰も踏み出すことが出来ない現状を少しでも改善させるかのように、轟がわざと弱音を吐いた。

少しでも、鼓舞の足しになることを願って。

「はは、正直まるで勝てる気がせん。……だがな、まだ死にたくないし、死ぬ気もないんだよ。俺は」

普段弱音などまるで吐かない轟の言葉は、結果彼の予想以上の効果を生んだ。

轟の言葉に二人はほんの一瞬、瞳だけで彼を覗き見ると、顔にぎこちない笑みの形を模造する。

「そうだね。じつとしてても多分殺されるだけだろうし。店長、何か良い考えはあるかい？」

高原の言葉を受けて、那凧は数瞬だけ意識を巡らすと、努めて希望を滲ませるように言った。

「一個だけ。全てをあいつの足一本に集中させて、潰したら即逃げる。さっきまでのあいつとは何もかもが違うから成功率はなんとも言えないけど、助かる道はそれしか無いでしょうね」

「あるだけでも十分だ」

成功率などないに等しいと誰もが理解していたが、音に出して言う者は一人も居なかった。

彼らは今、未曾有の恐怖を目の前に戦う意思を固めているのだ。

わざわざ戦意に水を差す余裕も、必要も無い。

「私が速度強化で行くから、それに合わせて」

「おう」

「了解」

三人が互いに互いを支え、震え上がった意識と本能を合わせてようやく戦いの形をとり始めたとき、それまで黙っていたモノが見計らったように話し出した。

「ふん。準備は出来たようだな」

軽い、何の感情をぶちまけるでも無い言葉。

あからさまな余裕が滲み出ているその音には、まるで警戒の様子が見られなかった。那凧達を到底脅威と感じていない。その事実が嫌と言っほど読み取れる程に。

いや、よく見ればそれは言葉だけではない。那凧たちはここに来て、始めて目の前のふざけた現実に気が付いた。

両手をだらりと下げ、無造作に立っている様子はどう見ても構えているとは言えない。だが、その見た目から滲み出る気配が那凧たちの意識に叩きつける恐怖のなんと重いことか。

見た目など、何の気休めにもならない。それとも、まさかこれで気を抜いている状態だというのか。

だとしたら、それは、なんて馬鹿げた存在なのだろう。

「全力で来い。貴様等の行為の果てを刻んでやる」

変化する前とは違って、完全に相手を見下した言葉を投げつける緋嵩。彼は言い終わると同時に、おぞましい程に赤いその目を静かに閉じた。

「行くよ！」

言葉と共に、那凧の身体が地面を砕いて消えた。

あからさまな誘いだっただが、これ以上緋嵩を見ているとようやく灯した戦意が根元から消えてしまいそうで、それが何より彼女を行動へと移させた。

恐怖に震えて無様に死ぬよりも、足掻いて足掻いて生を求めて死ぬほうが何倍もましだと、そう思ったからだ。

「シッ！！」

那凧の姿が消えた瞬間には、高原は既に腰に挿してあったものを緋嵩に向けて構えていた。彼の細い両腕に不釣り合いなほど大きく、

禍々しい黒い物体が鈍い光を反射する。

規格外れな威力の組み合わせの二丁拳銃。　それらが彼の掛け声と共に一斉に咆哮した。

人間など一撃で即死に至らしめるような弾丸が、凄まじい轟音とマズルフラツシユを率いて緋嵩に放たれる。　一発ではない。　五発、十発、いやもつと。

「もらつたあ！！！！」

気合十分に叫んだ那凧。　彼女の位置は既に緋嵩から三十センチも離れていなかった。

しかし、緋嵩に逃げ場は無い。

高原の能力の真骨頂がそこにあつたからだ。

反射と、衝突。

全ての弾丸の軌道とタイミングを合わせ、緋嵩の逃げ道を塞ぐ。

前後左右、全方位から。　銃撃の際の反動の大きさをゆえ本来連射など不可能な筈の大口径の銃弾が緋嵩に向けて彼を困つようにその身を狙っていた。

的確に四肢の関節、人体の急所を狙いつつも、その数は右足に迫るものがやや多い。　那凧の向かつた先を予測しての、絶妙なコンビネーション。

瞬きをするより早く、那凧の目には全身蜂の巣になつた緋嵩が映ることだろう。　そこに彼女が追い討ちをかける。

逃げられるはずなど無かつた。　為す術もなく、緋嵩は全ての弾丸を全身に叩き込まれる。

腕に、足に、顔に。

関節に、心臓に、脳味噌に。

(勝つた　)

勝利を確信して尚、那凧の動きはもはや止められない。

緋嵩の右足を切断するべく斜め上から振りかぶられた手刀は、勢いよく叩きつけられ彼の血を撒き散らさ　なかつた。

「……え？」

彼女に瞳に映ったのは、黒い、塊。

「!？」

知覚したものが何かも分からないままに那凧の視界が闇に閉ざされ、凄まじい衝撃が彼女の顎から頭まで一気に突き抜けた。

声さえも出せずに那凧の身体が横向きのまま吹き飛ばされる。

「店長!!!」

無様にバウンドして転がる那凧に高原が声を上げた瞬間、

「おおおおおお!!!」

轟の咆哮が大気を振るわせた。

いつの間にか緋嵩の背後に回っていた轟の拳が、唸りを上げて緋嵩の顔面に落とされる。

那凧の見た黒い物体の正体は、どうやら打ち出された緋嵩の右手だったようだ。

彼女に対して右手と右足を前に突き出した格好のまま、緋嵩は無造作に右腕だけを後ろへやった。その、肌色とは似ても似つかない、漆黒の殻に覆われた右手を。

「ぐうっ！」

赤い閃光が緋嵩と轟の間で激しく撒き散らされた。

火花の爆ぜる耳障りな音を立てながら、緋嵩の右手の甲と振り下ろされた轟の拳との間で煙が上がる。次第に周りの空気は歪み、地面は溶岩を連想させる仄かな赤みを帯び始めたではないか。

それほどの熱量の発生源と接しているというのに、緋嵩は何食わぬ顔で轟の拳を受け続けていた。

「が、あああ、あああああああ!!!」

地面をしつかりと踏み込み、尚も力と熱を放出し続ける轟。その顔には汗が滲み、歯は折れんばかりに食いしぼられている。

だが、それでも、

「……終わりか？」

呆れたような声で尋ねる緋嵩の開かれた半眼が、轟を射抜いた。特に力を入れる様子も見せず、右手を無造作に上げたまま、緋嵩は唸る轟の拳を押しやって体制を元の直立へと戻していく。

その途中で、

「なめるなっ！」

高橋の叫びと共に、再び炸裂した数十の弾丸が轟を抑えている緋嵩の右腕の関節部に直撃した。面ではなく、点としての攻撃を重視した弾丸が、寸分の狂いも無く同じ箇所に関連して着弾する。

衝撃、衝撃、衝撃衝撃衝撃

一秒の何百分の一の感覚で浴びせられる大口徑拳銃の精密連射は、緋嵩の腕を破壊するには遠く及ばなかったものの、その腕の軸をずらすことぐらいは成功してみせた。

轟の拳を受けていた手は横滑りし、その顔面が振り下ろされる拳の直線状に無防備に投げ出される。

殻に覆われていない部分では、さしもの彼の無傷とはいくまい。

相手の力量を侮ったばかりに、とうとう一矢を報いられた緋嵩の顔に浮かぶ表情。それは、嘲笑。

「ガッ!？」

機械的な、声帯が無理やり震わされたような音が轟の口から漏れた。

確かに緋嵩の腕は轟の拳から外れた。

だが、動いたのは腕だけでは無い。動いたのは、その身体ごとだ。

外側へと掛けられた力そのままに身体を半回転させ、空中回し蹴りの要領で轟の後頭部に一撃。

振り下ろしていた腕に全神経、全体重を注いでいた轟に避けられる道理は無かった。

緋嵩が足を振りぬくと同時に、轟の身体が冗談のように宙を舞い

半円を描いて地面に叩きつけられる。

一方の緋嵩は、振りぬいた足が地面に付くと同時に身体の向きを変え、高原のいる方向へ弾かれる様に跳躍した。

「ば、けものおおお!!」

高原が残った銃弾の全てを緋嵩に向けてぶち撒ける。

いくら力のベクトルが認識できるとは言え、これほどの威力を持つ銃撃の反動を完全に逃がしきれぬ訳ではない。額にびっしりと汗をかき苦悶の表情を浮かべる高原の腕は、既に狙いをつけることさえままならず、銃弾は緋嵩の脇を掠ってゆくばかり。

遂に手の届く距離まで接近を許してしまった高原、その足は絶え間ない銃撃の連射で固まり、場を動くには遅すぎた。

「ぐっ!!」

腹に肘打ちを入れられた高原の身体がくの字に曲がって地を離れる。

避けきれず、だがそれでも僅かに後ろへ跳ねることで若干のダメージを逃がした高原だったが、今回はそれで終わるほど甘い相手ではなかったようだ。

「なっ!? がはあ!？」

間髪入れずに浮いた足を蹴り上げられ、空中で仰向けの形にまんと身体を晒してしまった高原の、先ほどと同じ位置に今度は拳が振り落とされた。

相手の軌道が読めても、逃がす術が無ければどうしようもない。

今度こそ襲い掛かる威力の全てを受けた高原は、その馬鹿げた衝撃に意識を薙ぎ払われ無防備に腰から地面に叩き落された。

訪れたのは、静寂。

緋嵩意外に動くものいなくなったその場所で、夜の闇を纏うように、緩やかに彼は周りを睥睨した。

びくり、と。

彼の視界の隅で、何かが動く。

「……………」
無言のまま、動いたものへと近づいていく緋嵩の前に、倒れ付したまま荒い息を続ける那凧の姿があった。

「ぐ、はぁ……………はぁ……………」
うつ伏せになりながら、地面を転がっているときに付いたであろう擦過傷を押さえて喘ぐ彼女を、緋嵩の足が無造作に蹴飛ばす。

「あつぐ!？」
反転して仰向けになっただけの所を見ると、大した力は込められていなかったようだ。

蹴られた箇所にもこれと言ったダメージは見られない。

「はぁ……………ち、くしょう」
倒れたまま顔だけを横に向けて睨む那凧に、緋嵩がゆっくりと歩み寄っていく。その目には、何も浮かんではいなかった。相手への怒りも、哀れみも、何も。

人形のような能面に那凧がふと、違和感を覚える。だが、それが何なのか確かめる前に、那凧に向かって緋嵩の足が勢いよく踏み落とされた。

顔面に ではなく、その横に。

「二度と俺に関わるな。次は、この程度では済まさんぞ。……………後の二人にもそう伝えておけ」

それだけ。

止めを刺すでも、見下すでもなく、ただそれだけを伝えると、緋嵩はふいつと身体を反転させて那凧から遠ざかっていった。

「え? ……それって」
闇夜に消えていった緋嵩を見つめながら、顔から険しさの引いた那凧が呟く。

しかし、彼女の問いに取り合わず緋嵩は無言のままに遠ざかって

行った。

彼の姿が完全に視界から消えてから、那凧が這這の体で二人に近づいていく。

「死んで、ない」

ダメージこそ見られるが、よく見れば何れも致命傷とは言えない彼らの様子。 それを見て、那凧自身も顔面を打ち抜かれたにも関わらず、那凧自身飛ばされたときの擦過傷以外に大した外傷はないことに気が付いた。

おかしい話である。 あれだけの衝撃を受けたのなら、後を引くダメージが無いはずが無いのだ。 にも関わらず、ふらつきながらもこうして意識を保ち立っていられる理由とは。

脳裏に浮かんだ事実には、那凧の腰が砕けて地面に尻餅をつく。顔に浮かんでいるのは大きな安堵と、そして、僅かな笑み。

「はは、なんだ。 あいつ、結構いい奴じゃない」

小気味良い口調と共に吐き出された台詞は、既にここから消えた彼の方向へと向けられていた。

自分達以外に誰も居ない闇夜に、那凧の笑みが空へと向けられる。

「とりあえず、さなちゃん呼んで仕切り直しね」

これ以上無いほどに打ちのめされた彼女の声は、何故か、晴れ晴れとしたものだった。

アカゾメノケモノ } Witch is the monster } 「1」

遂に五日目。

これにて第一部（出会い編）は完結でございます。

彼女が意気揚々と月に宣言している、まさにその時。

緋嵩の方はと言つと、其処から五百メートル程離れた位置で何故か立ち止まっている最中だった。

既に目は薄い赤を黒に滲ませる程度に鎮められ、髪も首筋までの黒い短髪へと戻っている。

緋嵩は何もしようとせず、目の前をただひたすら見つめていた。まるで何かを観察するような仕草だが、もちろん彼の前に在るのは代わり映えの無い町並みだけである。視線の先に至っては何処へ続くとも知れない道路だけ。

つい、と緋嵩の手が起こされた。

肘を曲げ、掌を肩ほどの高さまで上げると、人差し指で何も無い空中を指す。そのまま指だけをこまめに動かして、まるで何かをつつくような格好を作り出した。

当然、何も無い空中でやっても何かが反応するわけではない、筈だったのだが。

そう、まるでガラスで出来たグラス同士を合わせたような、甲高い涼やかな音がどうした訳か緋嵩の指先から流れ出たではないか。

しかも、何も無い空中の空間が、まるで水面の波紋のように揺れ広がっていく。

「やっぱ、結界の一種か。それにしても、こんな種類のもの聞いたことも無いな」

記憶を手繰るように呟きながら二度、三度とその付近をつつくとやはり同じように甲高い音が響き、直系三十センチほどの波紋が起きては消える。

何度かその様子を確認し、吟味した緋嵩。その腕が、次の瞬間大降りに振り上げられた。

「ぶっ」

短い掛け声と共に勢い良くその手が正面に振り下ろされる。

布を思い切り引き裂いたような、カーテンを勢い良く明けは立つそれに似た音が辺りに響き渡った。

音が響きこそしたが、一見して緋嵩の居る景色が変化した様子は無い。

相変わらず異常なほど夜の静寂に包まれた町並み。だが、緋嵩には何かしらの手ごたえがあったようだ。

振り下ろした手をズボンのポケットにしまい、両手をしまった格好に戻ると、ゆっくりと歩き出した。

「……はあ、結局ここ最近騒いでる莫迦共の情報は得られなかったな」

途中、立ち止まってため息をつきながら一人ごちると、緋嵩は思いつめたように振り返って今なお那凧たちの居るであろう場所を見つめる。

情報を得る機会を台無しにしたのは緋嵩自身なのだが、生憎この場にそれを指摘する者は居ない。

やがて、視線を前に戻すと、彼は気だるげな様子で煙草を箱から取り出して口に咥えた。ライターで火をつけて浅く煙を吸う。

「まあ、ちゃんと退治屋もいるみたいだし、放つとしても良いか」
煙を吐き出しながらそう言うと、煙草を咥えた格好のまま緋嵩は腕を振り払った場所を通り抜けた。

途端、彼の耳に聞きなれた雑踏の音が飛び込んでくる。それだけではない、虫の囁き、人工の無機物音も。

目の前に急に現れた通行人に、互いに驚くでもなくすれ違つと、緋嵩がぼんやりと空を向いて呟いた。

「……ここ、何処だ？」

思い返せば、彼は那凧と見せの正面で会ってから彼女の案内でここまで来たのだ。つまり、ここは彼にとって全く見知らぬ地区であり、帰り道など分かるはずが無いのである。

緋嵩は一瞬だけ、音を取り戻した町の中でさっきまで自分が居た

であろう場所を振り返った。

確実に帰りたいのであれば、案内人の居る場所は間違いなく彼の向く方向に居る。尤も、あれだけのことをしてかしておきながらわざわざ戻って道を聞く、と言う事が出来なければ、戻る意味は無いのだが。

「ま、何とかなるだろ」

どうやら彼でも、それほど凶太い神経は持ち合わせていないらしかった。顔を正面に向き直し、なんとも気軽な様子で呟くと、ゆつくりと那風たちとは逆方向に歩みを進めていく。

煙草から出る紫煙が、闇夜の月をぼんやりと白く曇らせていたのだった。

アカゾメノケモノ　W i t c h　i s　t h e　m o n s t e r　」 1 :

さてさて、次回からはいよいよ第二部突入！

激進更新な私ですが、どうか見捨てないでやってくれると嬉しいです

m (| | |) m (ページ)

では皆様、一週間後に乞う御期待！！

皆様、長らくお待ち致しました！

え？ 待ってない？・・・さあさあ「カオスポット」第二部

(知覚編) 遂にスタートにてございます!! (…………くすん

「お会計、百五十円になります。……………丁度お預かりします。ありがとうございます。……………くあ」

午前中最後の客を見送った緋嵩の口が、大きく開けられる。客の居なくなった店内に、ひときわ大きな彼の欠伸が放たれた。目元が潤み、流れた涙を掌で乱暴に拭う。

結局、あれから緋嵩が家に着いたのは深夜二時を回った辺りだった。迷いに迷った拳句、やつとの思いでアパートの自分の部屋に帰ってきた緋嵩は、そのままベッドへ倒れ込むようにして寝入ってしまった。そして、程なくして目覚ましに無理やり覚醒させられ今に至ると言うわけだ。

遅刻こそしなかったものの欠伸の一つも出ようもので、彼にとってはどうにも気だるい一日になってしまったようである。

「おやおや、ずいぶん眠そうだね」

二度目の欠伸の後、昨日とは違う眼鏡の上から眉間を押さえて眠気を抑えようと試みている緋嵩に朗らかな声が投げかけられた。

ふくよかな顔に今日もまた笑顔を浮かべて店の奥から現れたのは、言うまでもなくこの店の店長だ。

珍しく手に缶コーヒーなんてものを持って、彼女は今日も緋嵩にねぎらいの言葉を掛けた。

「お疲れ様。はいこれ」

そう言って、手にしたコーヒーを緋嵩に投げる。

「っと。どうも」

胸の前に投げられたそれを両手で受け取った緋嵩が、その体制のまま会釈した。眠そうな顔のまま頭を垂れた緋嵩の様子が面白かったのか、彼女は豪快に笑う。

「はっはっは、緋嵩君は今日午前いっぱいまで終わりだから、帰ってゆっくり休みなさい」

にこやかにそう言うと、彼女は緋嵩と違ってはきはきとした様子でもう一方のレジへと向かっていった。

「そうさせてもらいますよ。お疲れ様でした」
すれ違いに合わせて緋嵩がそう返すと、彼女は振り向かず片手だけを上げて歩いていく。

いつもより三割り増しの倦怠感を感じながら、緋嵩は今日は煙草の箱ではなく、コーヒーの缶を持ってロッカー室へと入って行った。自分に割り当てられたロッカーの上にコーヒーを置いてさっさと着替えると、最後に夏場に相応しくない黒のコートを羽織り、五分と経たないうちに帰り支度が完了する。

後は帰るだけだと、レジ仕事で固まった筋肉をほぐすように伸びを一つ。その際にも、また欠伸が。

「さて。帰るか」

裏口を開けると、いつものように日陰に浸された陰気な景色が彼の視界いっぱい広がる。

いつもと同じ。斜め向こうの隙間から覗く僅かな空、すぐ傍に立ててある薄汚れたゴミ箱、汚い壁、そして目の前に佇む清楚な雰囲気少女。

「……ん？」

目の前の景色と記憶との間に、どうやら齟齬が生じたらしい。

僅かに視線を上に向けると、「ああ」と納得したような声を漏らして、緋嵩は目線を下ろす。

鈍った思考ゆえに若干反応は遅れたが、数秒の後、原因である目の前の少女に彼の意識が向けられた。

位置的に見ても、偶然居合わせたというよりはこの店に用があると考えるほうが自然である。

まあ、そこで話し掛けるか否かは、本人の意思次第なのだが。

緋嵩には彼女のような知り合いが居た覚えはなかったし、無理して知り合う気もさらさら無かった。

どうにも眠気が限界に来ていた彼にとって、見ず知らずの人間に話し掛けることは荷が重かったらしい。無視しても店には店長がいるだろうという考えも手伝って、ごく自然に彼女の横をスルーして帰路に付いた。否、付こうとした。

「あの、す、すみません」
失敗。

ここ数日間面倒ごとに巻き込まれた彼としては、当分の間は当たり障りもない怠惰で規則的な毎日を過ごしたかったのだが、得てして不運は重なるものらしい。

流石に話しかけられながら無視するほど薄情な人間でもなかった。緋嵩はしっかりと呼ばれた方へと振り向いた。

勿論、振り向く前に溜め息の一吐きは忘れなかったが。

「何か？ この店の店長なら、今はレジに入ってますよ」

「あ、お、お店に用があつたんじゃないなくて」

やや狼狽えた様子で否定する少女の身振りは、まるで小動物のよ
うな雰囲気醸し出していた。

「その、えっと、わ、私は御国早苗みくに さなえと言います、初めまして」

ペこりと頭を下げた御国に、緋嵩の顔が変なものを見るような目
に変わる。突然話しかけてきて勝手に自己紹介を始められては、
まず無理もない反応だが。

白い目で見つめられる本人はと言うと、比較的すぐに頭を上げて
今は不安そうにこちらの様子を遠慮なしで伺っている最中だ。

若干の沈黙が訪れる。

その間中、居心地悪そうにそわそわしている御国を見て、緋嵩の
口からまた溜め息が一つ。

「ひだか そついち緋嵩総一だ。ハジメマシテ」

本名を名乗るべきかどうか一瞬迷った緋嵩だったが、特に名乗る
ことへのデメリットも思い浮かばなかったので素直に名乗ることに
したようだ。機械的な白々しい社交辞令も一緒に。

緋嵩の自己紹介に喜色満面とは言わずとも、それなりの安堵を見
せつつ御国が笑った。

「はい、緋嵩さんですね。よ、よろしくお願いします」

気弱そうな固い笑顔と共に発せられた彼女の言葉に、見ていた緋
嵩の眉が上がり眉間に若干の皺を作る。彼の怪訝な表情を気に留
める様子もなく、御国が右手を緋嵩に向かって差し出した。

まるで握手を求めるような彼女の仕草に、要領を得ない緋嵩が片
手を上げてその行動を制する。

「待った。話の意図が読めない。とりあえず、何であんたがこ
こに居るのかだけでも教えてくれ」

訳が分からないとその身振りからも主張した緋嵩を見て御国は一
瞬きよんとした表情になると、すぐにどうしようかと言った動揺
の心情を前面に押し出した。簡単に言えば、視線をうるうると彷徨
わせ何か話そうとしては止めると言う、なんともコメントのし辛
い行動を緋嵩に向けてやって見せたのだ。それもこちらが苛めて
いるかのような困り顔で。

扱い難い、と言うかどうにもペースを乱されてしまう御国の行動
に、緋嵩は悟られない程度に肩を落とす。

「……………それで？」

心なしか疲れたような声色で先を促す緋嵩。

「ああああの！ えっと……………緋嵩さん、これから時間ありますか？」
促されたことでようやく決心が付いたのか、御国の口から大きめの呼びかけが飛び出した、のだが。最初こそ大きかったその声量は後半になるに連れて落ちるに落ち、最終的に目的を口にしたときには、かなりささやかなものになってしまっていた。

無理も無い。内容というのが、初対面の人間にいきなり付き合えというのだから。

まして、見かけからして人見知りと言うか、気の弱さが前面に押し出されている彼女ならなおさらだ。むしろ、よく言えたと賛辞を述べてやるべきだろう。

正直に言えばすぐさま帰ってベッドに直行したい緋嵩だったが、言ってもこれまでの態度から考えるに彼女の場合簡単に逃がしてくれるとは到底思えなかった。どうせ駄目だといっても、ぐずり、ねだりで時間をとらされた拳句付き合わされる事になるのは目に見えている。

本人にそうしている自覚は無いのだろうが、いじめっ子の気分を味合わされると言うのは存外に後味悪く、結局はその場に残ってしまふものなのだ。

「……………」

なんでこう厄介ごとばかり、と言いたげな表情で緋嵩は手に持っていた缶コーヒを開け、中身を一気に胃に流し込んだ。

「あの、緋嵩さん？」

突然自棄になったような緋嵩の様子に、訳が分からず御国が困り顔で尋ね掛ける。

「……………ふう。それで、何処に付き合えば良いんだ？」

お世辞にも美味しいとは言えないコーヒの持つ過剰な甘さで半分寝ていた脳を無理やり覚醒させると、ゴミ箱に缶を投げ捨てて緋嵩がそう返した。

途端、御国の表情が困惑したのから一転して、少々驚いたようなものへと変わる。

「来て、くれるんですか？」

「ああ」

御国本人もこんなにあっさり事が運ぶとは思っていなかったようで、改めて確認をとってみたが、どうやら彼女の聞き間違いではなかったようだ。短く了承の意を再び返した緋嵩が、おもむろに両手を上着のポケットに入れた。

彼の同行が確実なものになると、ようやく彼女の顔に安堵のようなものが見え、初めて笑みと呼べるものがそこに浮かぶ。

「それじゃあ、行きましようか」

そう口にして歩き出した御国。何処に行くといった説明も無くいきなり歩き出してしまった彼女を追うようにして、緋嵩も足を踏み出した。

「なあ、何処に行くかは教えてもらえないのか？」

とことごと自分の前を先導していく御国へ緋嵩が尤もな問いを投げるが、彼女は歩きながらただ困ったような顔を彼に返すのみだった。

「ええと……すみません。着くまでのお楽しみだから内緒にしておいてくれて言われてるんです」

返ってきた答えに緋嵩が怪訝そうな顔を見ると、御国が慌てて付け足すように言う。

「あ、でも危害を加えるとかそんなことは一切無いんで、ぜんぜん大丈夫ですから」

行く先も知らされず大丈夫と言われても気休めにもならないのだが、その辺りには目を瞑るしかないらしい。成る程、こういう相手の不安を煽る場所へ連れて行く場合の人選としては、彼女は適任と言えるだろう。

見るからに人畜無害な虐められ易さを放出している上に、断ったほうが罪悪感を覚えさせるのだから、たまったものではない。

「はあ、わかったよ。あんたについて行けばいいんだな」
「お願いします」

だらりと首を下げて降参のポーズをとると、緋嵩はげんなりした様子で仕方なさそうに呟いた。彼の様子に歩きながらも小さくぺこりと頭を下げると、御国は再び前に向き直る。

それからは特に話すでもなく、黙って緋嵩は御国の後ろを歩くことに徹した。幸い五分も立つ頃には見覚えの無い風景へと変わったので、散歩の感覚で周りを眺めつつ歩いていたので、それほど退屈と言うわけでもなかったようだ。

ただ、つい最近同じような状況でなんとも嫌な思いをした感覚が緋嵩の脳裏に思い出されるが、考えてももう付いて行ってしまっ

いるわけだし、仕方が無いという結論に至った。

結局のところ彼は、罨を食い破って仕掛けた相手を五分刻みにするだけの実力を備えている。何があっても何とかできると言う自信ゆえの余裕が、やはり無意識にでも思考に出ているのだろう。

何はともあれ、御国について歩き始めてからかれこれ一時間ほど経った頃。道中大した事件も起きないまま、彼女から到着の言葉が出されることとなった。

彼らの目の前に現れたのは、時代を感じさせる、一軒の屋敷。

色あせた木の外壁に今の時代稀少とされる瓦敷きの屋根、入り口は戸ではなく横にスライドする形のものが適用されている。

緋嵩の顔が、微妙に歪んだ。つい最近、彼はこれと良く似た造りの家を目にした記憶があるのだ。

(まさか、な)

緋嵩の頭に直情的な、悪く言えば単純そうな思考を持つ見た目だけは悪くない女の顔が浮かぶ。

流石にあれだけ脅した後に昨日の今日でこうも大胆なアプローチをしてくるとは思えなかったが、それでも注意だけはしておくに越したことは無いと、緋嵩は御国の後ろでそつと眼鏡を外すと、胸にあるポケットにしまった。

御国はそれに気付く様子も無く、緋嵩に背中を向けたまま入り口を開ける。

「さ、どうぞ」

前を向いたままそう言って先行して行く御国に従い、緋嵩もその屋敷へと足を踏み入れた。

思った通りの広い古風な玄関で靴を脱ぎ、二人は屋内へと入って行く。案内されるまま、それなりに広い廊下を御国について歩くと、間もなく十畳ほどの広さの和室へと辿り着いた。

「ここです」

襖を開け、部屋の真ん中まで緋嵩を連れて行くと、御国の足がそこできびたりと止まる。おもむろに彼に向き直ったその顔は、まさ

に真剣そのものといった様子だ。

「何も聞かずにここまで来てくれて、ありがとうございます」

「で、いい加減こんなとこに連れて来た訳を聞かせてもらえるとありがたいんだがな」

御国からの感謝には答えずに、両手を組んで皮肉げな笑いを浮かべる緋嵩。彼の質問に御国が口を開きかけるが、それよりも早く室内に二人のものでは無い声が響いた。

「それは私から説明するわ」

ツカノマノクビキ } a s l i g h t c o n t r a c t }

「 2 . 1 . 3 」

さてさて、彼に声をかけたのは一体だれなのかつ？
いやまあ、皆様の予想通りなんですけどね（苦笑）

声と同時に、緋嵩たちの隣の部屋の襖が開く。

やはり、と言うか。開いた襖の向こうには緋嵩が思い描いた通りの面々が佇んでいた。

つい最近会った、いや、叩きのめしたばかりと言うべきか。よくもまあ昨日の今日で会う気になれたものだ、その神経の図太さに緋嵩は呆れた表情を浮かべている。

彼の前に現れたのは当然、那凧と高原、そして轟の三人だ。

昨日決別したばかりの相手との早すぎる再会に、緋嵩から重く長い溜め息が零れた。

「やっぱり、あんたらか。二度と関わるなつて、言ったはずだが」呆れているというよりは一気に疲れが襲ってきたという感じで、緋嵩が那凧に問いかける。彼の今までの那凧たちに関する出来事を考えれば、無理もない。少なくとも、好意を抱けるような出来事は彼らの間に起こっているとは言えないのだから。

「それについては守れそうもないわ。このままじゃ気がすまないことがあるから」

あっさりと緋嵩の言葉を一蹴すると、那凧はつかつかと足早に彼に近づいていった。

つい最近、死んでもおかしくないような、少なくともかなりの恐怖を味合わされた相手。だと言うのに、彼女の行動はとても堂々としたものであり、その何処からも気負った様子は見られない。

よほど肝が据わっているのか、それとも、ただの馬鹿なのか。気がすまないと言う言葉の真意が掴めずに、緋嵩はただ那凧の行動を見続ける。

彼女は緋嵩から一メートルほど離れた所まで歩いて来ると、そこで止まった。

緋嵩がちらりと残った二人の男達に視線を向ける。もし何かよ

ろしくない事をする気なら、那凧に目がいつている今はその絶好の機会であり、歴戦を潜り抜けてきた彼らがそこを逃す手は無いからだ。

だが、どうにも彼らは動く気は無いようで、ただそこにじっと立ち尽くしているだけで動く気配さえ見せないまま。

「……う」

ゆっくりと、那凧が瞼を閉じて息を吐く。

心なしかその表情には、緊張や戸惑いといったものが浮んでいるように緋嵩の目には映った。

息を吐き終えた那凧は目を開けると、その場いっぱい響く声で、ただ一言。

「ごめん!!」

がばつと勢い良く背筋を曲げる那凧。同時に発せられた言葉は、部屋全体に響き渡った。

予想外、と言うほどの行動でもない。

多少は考えていた、もし那凧達がまたアプローチを掛けてきたらこつという行動に出るだろうなと予想したうちの一つ。それだけに緋嵩は対して驚くこともなく、彼女の言葉を受け入れられた。

言葉の、その意味だけは。

「……………何してんの？」

相手からの返事が無いままな事を不思議に思った那凧が恐る恐る顔を上げると、そこには何故か、片目をつぶり眉間に皺をよせ、右耳に指を突っ込んだ不可解ポーズの緋嵩の姿が。

思わず謝罪のときのような沈痛なものとは打って変わった、間の抜けた声が那凧から漏れる。

「て、てん、ちょう。声、大きすぎ、です」

彼女の声に応えたのは緋嵩、ではなく、その横から。緋嵩よりも大げさに、屈みこんで両耳を押さえる格好をとっていた御国がなみだ目で訴えた。

御国に同意するかのように、やや震える声で緋嵩が口を開く。

「鼓膜が……」

「すみません、緋嵩さん。 店長、たまに暴走しちゃうんです」

未だダメージの抜け切れない様子の緋嵩を見上げて、御国が申し訳なさそうに言う。

「ああ、知ってるよ」

嫌なことでも思い出すように苦い顔つきをしながら御国に返した緋嵩が、ようやく耳から指を抜いてその目を那凧に向ける。

「よく知ってる」

手を下ろしながら再び呟いた彼の声は、やけに冷たい響きを放っていた。 それだけで、彼の雰囲気さがらりと変わる。

「それで？ 謝るためだけにここに呼んだのか？」

先を促すような、まるでこれだけで終わるわけがないと確信があるような言葉。

この場所まで来た、もつと言えば、御国に誘われた時点で厄介なことになるだろうと緋嵩は踏んでいた。

何故なら、謝るや話をすると言った単純な目的だけならば、何も別の場所まで呼びつける理由はない。 わざわざ連れ出して、しかも自分の陣地に呼んだと言うことは、何かしらここに呼ばなければならぬ訳があると言うことに他ならないからだ。

おどけるような、皮肉げなその口調とは裏腹に、まるで内心を見透かすような彼の鋭い視線を受ける那凧の顔が、一気に緊張を取り戻す。

一転して、息が詰まるような沈黙が瞬時に部屋全体を包み込んだ。どんなに間の抜けた姿を晒そうとも、目の前に居る男が外見通りの常人ではない。彼の赤みを帯びた目を直視した瞬間に、嫌と言うほどそれを思い知らされた光景が那凧達の脳裏に思い起こされる。「そうじゃない、って言ったら、付き合ってくれるの?」

試すような、挑むような口調で、那凧が投げ掛けた。彼女の額に流れる汗が、その言葉に滲む不安を物語っている。

「このまま帰って、事あるごとに付きまとわれるよりは、今この場でケリをつけたほうがマシだ」

緋膏の言葉、そこに含まれる皮肉げな了承に剣呑な響きは無い。

那凧の顔から若干固さが抜けた。

「じゃあ……」

「聞くだけ聞いてやるよ。あんな目にあつた翌日にこんな事する度胸と、そのしつこさに免じて」

それは苦笑だったが、那凧たちに対して初めて緋膏が浮かべた笑顔でもあつた。紛れもなく、彼から敵意や警戒の抜けた証拠に他ならない。

矛を納めた緋膏の雰囲気、那凧だけでなく場の空気に当てられて息を呑んでいた面々からも緊張が抜け落ちる。

「うん、ありがと」

皮肉の交じつた緋膏の台詞に対して那凧は素直に頭を下げると、それまで隣の部屋で黙って見守っていた二人に首から上だけを向けて口を開いた。

「高原、虎さん。あれ、持ってきて。ああ、さなちゃんは飲み物よろしく」

「おう」

「わかりました」

御国が部屋から出て行き、轟達が隣の部屋の奥に消えると、那凧が部屋の隅に置いてある座布団を緋膏に向かって放り投げる。

「座って」

緋膏に告げた後、那凧の方もまた手に座布団を持って彼の正面へと戻っていく。

いつの間にも用意していたのか、座布団を持つ方と反対の手には黒い装丁の分厚いファイルを持っていた。

渡された座布団に胡坐をかいて那凧に目を向けた緋膏が、それに気付いて興味を擲られた。黒一色の、模様もタグも無い不気味な印象を与えるそのファイルは、何が納められているのか外見からはまるで判断がつかない。

ただ、こんな場面で持ち出されるのだから、常識的な代物ではない事だけは確かだ。

「……それは？」

再び正面に向かい合う形になった所で、緋膏が問う。

那凧は彼の前に腰を下ろすと、見れば判るとでも言わんばかりにそのファイルを彼に差し出し、畳に広げた。

どんなものが飛び出すのかと思いきや、彼の目に映ったのは、予想に反して大して珍しくも無いもの。

新聞、コピー用紙といった、様々な質の紙が切り抜かれて所狭しと収納されているそれは、所謂スクラップブックと呼ばれるものだった。

てつきり化け物の図鑑や、それに関する資料とばかり考えていた緋膏にとっては拍子抜けな内容と思われたが、記事を読み進んでいくうちにその考えが甘かったことに気付く。

『現代の神隠しか！？ 消える住民の謎！！』

『連続猟奇殺人の恐怖！！ 犯人の目的は！？』

『都会に熊！？ 姿のない猛獣の彷徨う街！』

問題はその量と、規模だ。

どれもこれもここ最近の新しいものばかり、しかも、一つの事件

につき被害者は多数。

「これ全部、か……」

ファイルのページをめくる緋嵩の顔が苦いものでも飲み込んだように僅かに歪む。

現実になっただけでも軽く三桁を越す犠牲者は、知られていないものも含めば一体どれほどに上るのか見当も付かない。とても見えていて気持ちのいいものでは無いだろう。

「今月だけでも、七件。被害者は、三十九人だった」

ファイルを閉じた緋嵩に重なるように告げる那凧の声も、決して軽いものではなかった。手を握り締め、見えないように歯を食いしぼるその思いは、果たして何に向けられたものなのか。

互いに、やりきれない思いを乗せた僅かな沈黙が流れる。話を進めるべき那凧の方も、何かを思い出しているのか悔しげな表情で唇を締めていた。

「失礼しますね」

それを破ったのは、この場に居ない第三者の声。

話を戻そうとした那凧よりも早く場に流れた穏やかな声と共に襖が開き、麦茶と茶菓子を乗せた盆を持った御国が姿を現す。

「冷たいうちにどうぞ」

御国はそれぞれの前にグラスと真ん中に茶菓子の入った器を置く。と、まだ二つグラスの残っている盆を脇に置き、自分の分のグラスを持って那凧の横に腰掛けた。

緋嵩の前に置かれたグラスの氷が崩れ、涼しげな澄んだ音が響く。不思議なことに、それだけでどこか空気が柔らかくなったような印象を周りに与えた。

当たり前の日常の穏やかさに、やりきれない思いでささくれた心を鎮められる二人。

「ん、ありがと。さなちゃん」

期せずして場を和ませてくれた御国に那凧は静かに礼を言つと、張りの戻った声で緋嵩に話しかける。

「とりあえず、奴らのやり口は分かったでしょ。　ここから先は男二人が帰ってきてから詳しく話すから」

ひとまずの区切りとばかりに麦茶をひと口含み二人を待つ姿勢に移った那凧を見て、緋膏も置かれたグラスを手に取った。丁度いい温度に冷やされた麦茶を喉に流し込み、ついでに出された茶菓子にも手を伸ばす。

「んむ……美味しいな、これ」

しっとりした皮に程よい甘さの、上品な味わいが彼の口内に染み渡った。

「お口にあって良かったです。　それ、今人気のお饅頭なんですよ」
「納得だな」

御国とどうでもいい雑談を交わして、また手元の麦茶で喉を潤す緋膏。　彼にとっては、久しぶりに心の休まる時間だったのだろう。　だがそれも、残念なことに長くは続かなかつた。

ツカノマノクビキ } a s l i g h t c o n t r a c t }] 2 . 1 . 5 [

緋膏くんも、苦勞してるのですよねえ(うんうん

「よう、持ってきたぞ。 那凧」

大きめの声と共にやや乱暴に隣の部屋の襖が開けられ、一抱えほどの大きさの鏡台らしきものを持った轟が現れたからだ。

その後ろには、スポーツバッグを肩に掛けた高原の姿もある。

「二人とも遅いよ。 もうこっちはとづくに終わってるんだから
勘弁してくれ、こっちは怪我人だぞ」

座ったままグラス片手に顔だけ振り向かせてばやいた那凧に、轟の口から情けない声が漏れた。

「そうそう、僕なんか立ってるだけでやっただし」

「その割には軽々持ってるわよね、それ」

轟に便乗してわざとらしくふらついて見せる高原に、彼の持つスポーツバッグを指差して指摘する。

「そこはほら、頼まれたら断れない紳士の証？」

「はいはい、いいからここまで持ってきて」

「よっ、と」

那凧と高原の二人がじゃれあっている間に、轟は四人から少し離れた所に持ってきたものを置き、ほこりを払うような仕草で両手を叩いた。

「お疲れ様です。 はい、どうぞ」

二人の登場に合わせて立ち上がったいた御国がタイミングよく轟に麦茶を渡す。

「おう、ありがとよ」

いましがた力仕事を終えたばかりの身体に流し込むように豪快に麦茶を煽る轟。

「っはあ、生き返った」

一気にグラスの中身を飲み干した轟をその場に残し、御国是那凧の横にスポーツバッグを降ろした高原へと歩み寄って、彼にも麦茶

を手渡した。

工具が詰っているような、金属同士がぶつかり合う音を立てたバツグと使いどころ不明な台の登場。普通は訝しげな表情の一つでも浮かばせて疑問でもぶつけそうなものだったが、生憎、見せられた当の本人はそんな可愛げのある人間ではなかったようだ。

「なるほど、それがあの術式の媒体だな。さしずめ鏡面結界の亜種ってところか」

「……やっぱり、全くの無知って訳じゃないんだ」

意味ありげな、少なくとも常人に走りえない単語を吐き出した緋嵩に部屋に居る全員の視線が集中した。

なぜそんな事を知っているのか、そもそも緋嵩が何者なのか、今の場に居る誰もが気になっている事だろう。だが、間違えてはいけない。

今の彼らは文字通りスカウトマンであり、彼を引き込むためにここに居るのだ。まずすべき事は、彼の正体を問いただすことではなく、こちらの事情の説明である。

その点においては、この後の那風の行動は適切と言えた。

「まあ、知識があるなら話は早いでしょ。この台、私達は『玉響』たまゆらって呼んでる。あんたの言う通り、これを使って奴らの『映世』うつしよに介入してるの。知ってるかもしれないけど、映世っていうのは……」

台を指して説明を続ける那風に、未だ座ったままの緋嵩は腕を組んで言葉の先に被せる。

「鏡面結界特有の世界の複写だろ。映した世界を現実と置き換える」

言うまでも無いとばかりに説明の先を奪った緋嵩があごで玉響を指し、那風に確かめるように問いかけた。

「それ、大した時間発動できないだろ？」

「え？ うん、精々が二時間かそこらだけ。なに？ そんな事まで分かるの？」

当たり前のように言う緋嵩に対して、こうまで見事に言い当てられた那凧の方は流石に驚きを隠せない様子で尋ね返す。

「鏡面結界は元々長期向けのものじゃないからな。まして媒体なんか使ってるなら尚更だ。昨日破った時の手応えからして、性能や特性はあまり差が無さそうだったんでね」

どうやら映世の説明においては予想以上に知識を持つ緋嵩に那凧たちの方が圧倒され、結局は彼の正体に一層の興味が深まるだけに終わったようだ。

彼の十分すぎる情報量に徐々に膨れ上がる好奇心を抑え、那凧は説明を次の段階へと移す。

「それだけ知ってればこれ以上は無駄よね。じゃあ、次は奴らの説明だけど、もしかしてこれも必要ないのかしら？」

現状までの彼の反応からして、これもまた無駄な事になるのではと危惧した那凧が尋ねる。

が、返ってきたのは意外にも、首を横に振るといふ否定の意を示すものだった。

「いや。奴らについては最近出てきたって事くらいしか知らないな。俺も奴らの行動に気付いてから気に入らなかつたんで調べても見たんだが、まるで掴めなかつた。実際に会って仲間を誘き出そうとした時も、どっかの誰かさんに後ろから襲われて無駄になつたしな」

「悪かつたわね」

あからさまな皮肉を混ぜた緋嵩の言葉に唇を尖らせて言い返すと、那凧はおもむろに高原に持って来させたスポーツバッグのファスナーを開けて、ごそそと中身を漁りだした。

金属同士の当たるような硬質な音が緋嵩の耳へと届く中、手を動かしながら彼女が口を開く。

「文献に奴らのことを記した物は無い筈よ。もちろん伝説や昔話にもね。片鱗ぐらいは残ってるかもしれないけど」

不自然に言葉を区切り、那凧はバッグから目的の物を取り出すと

緋嵩に放り投げる。

緩やかな弧を描いて投擲されたそれを難なく空中で受け止めると、緋嵩は光に照らすようにしてそれを見つめた。

「……で、こいつが一体なんだって？」

鈍い、円状の形をした物体。

所々が錆付いて、骨董屋にこそ相応しく思えるそれは、今この場にはとても相応しいとは思えない。

古臭いそれは、刀の鰐と呼ばれるもの。

「昔々、鬼ヶ島と呼ばれる場所で勇敢な若者が鬼を虐殺して財宝を奪いました。っていう話、知らない？」

場違いな、それも酷く湾曲した那凧の突然の昔話に緋嵩の顔が歪む。

だが次の瞬間には、誰でも知っている有名なその昔話に、目の前の刀の鰐という二つの情報は緋嵩の脳内で繋げられ一つの事実を導き出した。

常人なら到底信じられないような莫迦げた話で終わりだが、今この場で語られるのならば話は別だ。

「桃太郎の刀の鰐、か。さすが骨董屋、随分とレアな物持ってるだな」

手の中の品物の正体こそ分かったが、それだけではあの化け物へと通づるものはない。

鰐を持つ手を下ろし、だからどうしたと言わんばかりの緋嵩に対して、間髪入れず那凧の言葉が被せられた。

「それが二日前、あんたを襲った化け物の本体よ」

「……なに？」

ここへ来て初めて、緋嵩の表情に動揺が浮かぶ。

確かめるように手元にある鐔に改めて視線を落とす彼へと向けて、
尚も彼女の説明は続く。

「万物には意思がある。長い年月を掛けてその意思を外に表現で
きるようになったものを付喪神つくもがみって言うのは、よく知られてる話よ
ね」

「ああ。だが付喪神はその殆どが力の無い雑魚の筈だ。それに、
人間を無差別に襲うなんてのも二十年に一度あるかないか」

握っている鐔から視線を外して目を瞑ると、緋嵩が意識をあのと
きの記憶へと向けた。

二日前に見た異形。尋常なものとは言えないその姿と、漂った
嫌な気配を思い出しながら、彼は改めて那凧の言葉を否定する。

「そもそも俺が見たあれは、そんな生易しい感じじゃなかったぞ。
穢れきった気配に意思なんぞ感じられなかった。意思を持つ

ことで生まれ出でた付喪神が、その意思を失って殺戮衝動のままに
動くんなんて有り得るのか？」

少なくとも、緋嵩が知る中でそのような現象には覚えが無い。

それもその筈。付喪神とは元々、物に意思が宿ることで誕生す
るものなのだ。

だが、緋嵩が目にした存在は他種族とコミュニケーションが取れ
るようなものとは到底言えなかった。意識にあるのは目の前の獲
物を捕らえる事のみ。言うなれば、狩猟本能や殺戮本能とでもい
うべきものの塊とも呼べる存在だったのだ。

知性の欠片も見られないこんなお粗末な意思しか持たないくせに、
何人もの人間を殺める程の能力を有する存在は、とても付喪神とは
呼べないだろう。

「そう。本来の彼らなら、ね」

緋嵩の疑問に答えた那凧の言葉に、嫌な響きが混ざる。

「どっかの誰かが、力のある付喪神を化け物に変えたって事か？」

「いいえ、もつと厄介よ」

不吉な答えと一緒に、那凧が鐙を放った手をもう一度緋嵩に向けて振るう。

今度も難なく受け取って掌を開いて見ると、先ほどよりも小振りなそれが人工の光を反射して白く輝いていた。

余計なものを含まない、完全な純白の円錐形。一見して何かの結晶のように見受けられるそれを見て、何故か緋嵩の動きが止まった。

表情にも硬さが表れ、その目が僅かに見開かれる。

「鬼の、角、だと……」

急に硬質な響きを見せた緋嵩に、とうとう那凧が諦めたような、驚きを通り越した呆れを滲ませて呟いた。

「呆れた。あんた、一体何者よ？ 一目でそれが鬼の角って分かるなんて……それ、一応私達が人類初の発見だって自負してたのに」
愚痴る那凧をよそに、緋嵩は次の瞬間にはいつもの態度を取り戻していた。那凧達からすれば彼の行動は、珍しいものを見た驚き程度にしか悟られないだろう。

もし彼の目が見せた刹那の輝きが知覚できたなら、もしかすればその表情に仕舞われた奥が覗けたのかもしれないが、既にそれが叶うことは無い。

「俺も人づてに聞いた程度で、実在するとは思ってなかったけど。成る程、確かにあいつの風貌は物語なんかに出てくる鬼に共通する部分が多いな。……これの影響でも受けた、新種の付喪神か？」

緋嵩の正体云々はさておき、彼の問いに那凧はゆっくりと首を横に振った。

「厳密に言えば、奴らは付喪神であって付喪神じゃない。核に使われてるのは付喪神の本体だけど、それは既に死んだ後の抜け殻で、つまりは媒体に使ってるだけ」

那凧の説明を受け、緋嵩は静かにその手にある角を握る。

「死体を贄に……」

視線を上げた緋嵩の目に灯る困惑に、促されるように那凧が説明を続けていく。

「そう。黒魔術とかそのあたりの文献では、悪魔の召喚に生贄や動物の骨なんかを使ったって書いてあるけど、これはそういったのとはぜんぜん違う。知識や経験、特性なんかを受け継がせながら、本質はあくまで鬼のまま」

「待った。核が死体で、しかも二重の特性って事はまさか、この鬼の方も死体か？」

緋嵩の疑問に、那凧の首が今度は縦に動かされた。

彼女の示す肯定に、緋嵩の思考が冷めていく。

死体に死体を重ねて生を造り出すなどということは、如何なるものと言えど不可能なのだ。一度死んだものはどんな魔術を施して、その結果例え魂を呼び戻したとしても肉体に宿らせることは出来はしない。

死とはこの世界の線引きを超える事に他ならず、一度超えたものはどうやっても再び肉体を得る事は叶わないのだから。

死者の蘇生術など存在しないという事を、緋嵩は良く知っていた。それ故に、彼の脳是那凧達の話素直に死者の蘇生と受け取ることは出来なかったのだ。またそれ故に、真相を導き出すことが出来たとも言える。

「死体が蘇るって三流ホラーなら要らないぞ。つまりは、その二つを繋げて糧にした奴が居るって事だろ」

緋嵩の、今までの話の流れを全否定するような一言に那凧が溜息を吐きながら半眼で呟いた。

「私達のやってること自体、作り話染みてるって思わない？ まあ、正解なんだけどね。……私達は、「禍鏡」(かきよう)って呼んでる。

禍を映す鏡で、禍鏡。それが、私達の敵」

ツカノマノクビキ } a s l i g h t c o n t r a c t } [2 . 1 . 7]

ようやく敵の総称判明。

な、長かった……

死者の蘇生についてあっさり真相を見出した緋嵩に対して、いささか不満そうにしていた那凧だったが、次の瞬間にはやはりいふべきか、それ相応の真剣さを滲ませたものへと表情を変えてそう告げた。

「なるほど、取り込んだ物の経験、容姿を映し出すのがそいつらの特性つてわけか。確かに厄介だな、取り込むもの次第でどうとでもなれる。……それにしても、そんな奴らが居るなんて初耳だ」「何もかもが取り込むもの次第のカメレオンみたいな奴だからね、映世の発現の有無を確かめない限り、判別は難しいと思うわ。実際それで今まで正体を隠してきたんだし。でも、あんた程の経験や知識があれば、会っただけでどこがおかしいって気付いたんじゃない?」

随分と緋嵩を評価した物言いで尋ねる彼女の目に、偽りの色はない。

相手が鏡の特性を持つならば鏡面結界に似た術を使うのも頷けるだろう、その上、対峙したときの今までに感じた覚えの無い禍々しさ、那凧の言うとおり緋嵩にとって未知の存在であることをこれ以上ないほどに示していた。

故に、

「それもそうだな」

那凧の言葉が真実か、少なくとも自分より真実に近い所にあると確信した緋嵩は、彼女の言葉に素直に同意する。

「さて、これだけ分かれば十分よね」

掌を差し出して緋嵩に二つを投げ返させると、那凧は器用にも片手で両方を受け取り、スポーツバッグに仕舞いながら話を締め括った。

そして、緋嵩の目に視線を合わせると、意を決したように真剣な

表情のまま口を開く。

「率直に言っわ。 私たちと一緒に戦って」
訪れたのは、たった数秒間の沈黙。

だが、一瞬が数時間にも感じられるほどに張り詰めた緊張感を覚える者達にとつては、そんな沈黙さえも耐えがたい苦痛に他ならぬい。

彼から紡がれる言葉は、果たして了承か、拒絶か。

那凧の頬を、一筋の汗が伝う。

ゆっくりと、目の前の男の口が開き、言葉が紡ぎだされた。

「……断る」

静かに、だがはつきりとした声で緋嵩の口から発せられたのは、明確な拒絶を伝えるもの。

「奴等が物騒で厄介だったのは分かった。 あんたらが敵じゃないつてのもな」

「だったら……！」

落胆の空気が流れる中、緋嵩の言葉に那凧が勢いよく食い付くが、制するように緋嵩が言い放つ。

「あんたらは俺を仲間に取り入れたいんだろうが、それは俺からすれば単に足手まといが増えるだけにしかないんでね」

あっさりと言い放たれた緋嵩の言葉に、那凧は悔しげに唇を噛んで視線を下げるしか出来なかった。何かを言いかけていた様子を見せていた那凧だったが、そのたった一言は完全に彼女の言い分を叩き伏せたようだ。

高原と轟も、苦々しい顔で緋嵩から視線を外す。

「……私達とじゃ、手を組むまでもないってこと？」

感情を押し殺し切れていないような震える声が、下を向く那凧の口から漏れた。

「そういうことだ。 もし俺がチームに入っただとして、相手に俺と同等の実力者が現れた時、お前らに何が出来る？」

まるで反論の余地が見つからない、残酷な現実が彼女達に突きつ

けられる。

自分達が束になっても、目の前の男には傷一つどころか全力を出させることさえ叶わない。

「っ……！」

食いしばった歯の軋む音が何処からか緋嵩の耳に届く。

「話は終わりだ。じゃあな」

なんともそっけなく話を打ち切った緋嵩は、膝を起こして入ってきた襖へと向き直った。

呼び止めるものは居ない。少なくとも、緋嵩に現実を思い知らされた者達には今の彼へと立ち向かうだけの気力の沸く要因がない。

一步、また一步と、緋嵩の足は那凧から離れていく。

心に灯るのは喪失感か、それとも無力さへの絶望か。どちらにせよ、去って行く彼を止められる術が彼らには見つからない。

そう、彼らには。

ツカノマノクビキ } a s l i g h t c o n t r a c t } 『 2 ・ 1 ・ 8 』

このまま交渉決裂になってしまうのか!?
次回をご期待アレ(ペこり

「待つてください!」

緋嵩の前を、一人分の影が塞いだ。

確かに彼と戦った経験を持つものならば、その実力差に捕らわれてこれ以上の言い分が封じられるかもしれない。無意識に強者の言に意識が塗り潰され、思考が諦観へと繋がってしまったかもしれない。

だが、彼と戦っていない者は、無用な経験に捕らわれることはないのだ。

「確かに緋嵩さんは強いかもしれませんが。でも、戦いは個人の強さが全てじゃない筈です」

立ちふさがった御国が、どうにか彼の足を止めようと言いつつ、強がりが見え見えの薄っぺらい言葉だったが、そんな御国に言い聞かせるような口調で、ひどく面倒そうに緋嵩が口を開く。

「確かに。だが、奴らについての情報はさっきので大体手に入った。敵の歴史的背景や目的なんかどうでもいい、ようは奴らの使う結界の種類と行動原理だけ知れば、駆逐するには十分だ」

ポケットから出した煙草を咥えると同時に、妙に鋭い緋嵩の視線が御国へと突き刺さる。

「奴らの手口も実力も分かった、追跡の方法も見当が付いた。あんたらにこれ以上期待できるもんは無いと思うんだがな」

まるで何かを試すように向けられたその瞳に若干の寒気を覚えながら、それでも御国は一步も引きはしなかった。

「それでも、です」

何がそれでもなのか、恐らく言った本人にも分かってはいまい。

ただ、ここで引く訳にはいかないと思っただら自然と口から言葉が飛び出していただけだろう。

「……ぶっ」

不意に、それまで痛いほどの視線を浴びせていた緋嵩の目が弛み、僅かに吹き出した。

突然の事できよとんとした表情になってしまった御国に、まるで悪戯の成功したような子供のような表情で笑いかけると、彼はゆっくりと那風達へ振り返る。

「が、だからってこのまま「はい、さよなら」ってのも、不公平な話だよな」

自然と顔を上げた三人の視線を受けた緋嵩は、どういうわけか何かを示すように指を立てたのだ。既に彼の顔に笑みは無く、何を言いつすのかと四人ともが彼の動向に目を向けている。

「三ヶ月。あんたらに付き合ってやるよ」

「は……え？」

間の抜けた声だけでなく、一瞬何が起こったのか理解出来ないような顔。

四人それぞれのその様を鼻で笑う緋嵩を見て、那風の顔が何かに気が付いたようにはっとした表情を作る。

「あんた、始めからそのつもりだったわね!!」

「さあ？ 日頃の行いが悪いんじゃないのか？ とりあえず今日はもう帰らせてもらうぞ」

御国に見せたような小憎らしい顔を浮かべて煙草に火をつけると、緋嵩はふいっと身を翻して部屋から出て行った。

「あ、ちよつと待……!!」

これ以上の会話を遮るようにぴしゃりと襖が閉じられると、見る見る彼の足音が遠ざかって行く。

「……やられたな」

「そうだね」

なんとも言えない表情で声を漏らした轟に、脱力したような声で高原の相槌が入った。一方、御国の方は苦笑いを浮かべながら部屋の中央に目をやる。

そこには、

「ああもうつー！」

不機嫌な声もそれなりに、ごろりと畳の上を転がる那凧の姿が。その様子は、なんとも不愉快そうに眉をしかめながら、座布団を丸めて股に挟み込むだけでは飽きたらず更には腕でも抱き締めているという力のいれようだった。

一度では気が済まないのか、右へ左へ何度もごろごろと転がって行き場のない感情を処理する様は、見ていて中々に鬱陶しい。

「しょうがないですよ店長。これに懲りたら、今後は試験内容を変えるのをオススメします」

「そうそう、早苗ちゃんの話に乗ってくれただけでも、十分奇跡的だと思っよ」

唸る那凧に上から声を掛けたのは、廊下側から中央に寄って来た御国と隣の部屋から入ってきた高原の二人。

「奴が敵に回らなかつただけました」

加えて、高原の後ろから轟も室内に姿を現した。

「だからってさ、何なのよあの態度！ あゝ思い出しただけで腹が立つー！」

起き上がり、腕の中にある座布団をまるで人の首を肘で絞め上げるような動作を取ると、那凧は乱暴にお茶請けに出された菓子を掴んで口の中の放り込んだ。

一口で掌大の饅頭を頬張った那凧を見て、他三名が顔を見合わせため息を吐く。

「はあ、緋嵩さんも、もう少し気を遣ってくれたら良かったんですけど……」

「そう？ 僕はああいう正直な態度とってくれた方が分かりやすくていいと思うけどな」

「こつちとしてはとんだ災難だがな」

鼻息荒く饅頭を咀嚼する那凧に一齐に視線を落とす、三人の口から再び深いため息が落とされたのだった。

ツカノマノクビキ } a s l i g h t c o n t r a c t } 『 2 . 1 . 1 0

初・節番号二桁入り。

ず、随分長くなっちゃいましたねえ……

さて、那凧が三人をよそに三つ目の饅頭を頬張ったのと同時刻。彼女の機嫌を地へ叩きつけた元凶はと言つと、夕焼けの訪れ始めた街中の真つ只中に居た。

「……………」

大道路の交差点で赤信号に引つ掛かりながらも暢気に欠伸なんかをしている様子は、あの後那凧がどれほど荒れたかなど気にも留めていないのがよく分かるというものだ。

平日の夕方、それも田舎ではなく都会のものともなればそれなりの人口密度がある場所である。そんな中、徐々に彼の後ろに待ち人が増えてくると、あつと言つ間に人ごみが完成する。

ようやく信号の色が変わると、まるで決壊した堤防のように人ごみが緋嵩を飲み込み、横断歩道の縞模様を塗りつぶすかのように侵食を始めた。

「慣れないな、こればっかりは」

すれ違い、追い越され。何十の他人と刹那の邂逅を繰り返しながら、緋嵩がポツリと呟いた。

服装にも容姿にも、特にこれといった特異点はない。そこらにいる一般人となんら変わらない彼の空へ向けた透明な呟きは、誰に聞き取られるでもなく周りの靴音に掻き消されてしまう。

「じゃあさつさと引つ込めばいいのに」

ふわりと、瞬く間に飲み込まれた緋嵩の言葉に柔らかな声が重ねられた。何処から聞こえてきたのか、誰が発したのかのかも全く判別の付かない応答だというのに、緋嵩の顔には動揺の色は浮かんでいない。それどころか、口元を僅かに吊り上げている様子はどこか笑っているようにさえ見えた。

ポケットに手を入れたまま、緋嵩がまた空に向かって話しかけ始める。

「そういうわけにもいかないだろ？ フォーチュンテラ」
fortuneteller。

『占い師』、と最後に投げかけた緋嵩に対して、ゆったりとした笑い声が彼を中心に四方から木霊した。

一体どうなっているのか、群衆の中を反響する声はどういう訳かその軌跡を明確に現しているのだ。

人から人へ、空間から空間へ、反響する声は波紋を残して辺り一帯に響き渡る。

しかも、音が反響するたびに人が消え、車が消え、周りの音さえも消えた。

「今度は亜種じゃなくてオリジナルの方が。相変わらず、何処で見えたんだか」

「ふふ、それは企業秘密って事で」

道路に一人残された緋嵩の正面の景色が一瞬歪んだように見えたとおぼえ、次の瞬間、そこには一人の占い師の姿が。

ありがちな水晶球に乗せたテーブルに顔まで隠した紫色のローブを纏う彼女の姿は、誰に聞いても占い師と答えるだろう。そんなあからさまな印象を全面に滲ませる女性が、テーブルに両肘をつき、掌にあごを乗せたまま緋嵩のほうを見つめていた。

ツカノマノクビキ } a s l i g h t c o n t r a c t }

「 2 . 1 . 1 0

いっ たい 彼女は なん なの かつ ! ?

「それにしてもよく分かったわね。腕は落ちていないようで安心したわ」

ローブの下で笑顔を浮かべているのが相手まで伝わるような、柔らかな気配を漂わせながら、彼女はそう投げかける。

声に懐かしさや親しみといった感情が含まれているのを見るに、どうやら緋嵩との仲は悪いものではないらしい。

その証拠に、緋嵩の方も挑発的な彼女の言葉に気分を害した様子もなく、寧ろ何かを懐かしむような穏やかな目をしていた。少年くとも、那凧達には一度も見せたことの無い表情なのは確かだ。

「お前の方はまたネタが増えたみたいだな」

言葉と共に緋嵩は片手を広げ、曲げた人差し指に親指を重ね軽く力を加えると、そのまま勢いよく人差し指をピンと伸ばした。たったそれだけで、風鈴を連想させる澄んだ音と共に、何も無い筈の空中に水面を弾いたような波紋が生じる。

「それで？ このタイミングだ、単に世間話をしに来たわけじゃないんだろ？」

まるで揺れる空間の感触を楽しむかのように波紋に指を這わせながら、緋嵩が本題へと移るようフォーチュンテラを促した。

「せっかちなのも、変わってないわね。もう少し心にあそびを持つたら？」

半分冗談、半分本気で緋嵩にそう提案して見たものの、帰ってくる答えは分かりきっていた。これもまた、昔と同じだ。

「そうか？ 他人には余裕があり過ぎだって言われるんだがな」

ふわりと自然な動作で振り向いた緋嵩に、フォーチュンテラが一言。

「そんな誤魔化しが私に通用するとも？」

いかにも気安く軽い雰囲気で発せられた緋嵩の台詞を下らなさ気

に一蹴すると、彼女はやれやれと一息ついて水晶に掌を置いた。

「そうやって何もかも求め過ぎてると、そのうち死ぬわよ」

今までのような女性的でどこか艶のある声を、硬質で真剣なものへと変えて発した警告。

「ああ、そうだな」

苦笑を浮かべながら彼女へと帰された一言は簡素なものだったが、その中にはこれ以上は無駄だと言わんばかりの雰囲気十分に込められていた。

また、彼女の声は届かなかった。

どれほど時間が経とうと彼女の目の前にいる男は変わらない。

態度も、強さも、そして、心に渦巻く欲望と飢餓さえも。のらりくらりと巧妙に自分を隠し、幾ら心に注がれてもまるで穴の開いたバケツのようにただ次を求めるばかり。

理解できても自分ではどうにもならない。まさに暖簾に腕を押し当てることしか出来ない自身の滑稽さにロープの下で自嘲の笑みを浮かべると、彼女はまた掌を合わせて顎を寄せ、占い師の自分を形作る。

傷ついて落ち込む心をいちいち表に出すほど体面が拙いわけでもなし、すっかり気持ちを切り替えた様子で彼女が口を開いた。

「次の出現予測地は栄領公園近辺、時間は明日の夜十一時前後といったところよ」

「了解、いつも悪いな」

伝えられたのは、次の禍鏡の出現予測。

もし、ここに那風達が居れば目の前の占い師に詰め寄っただろう。それほどに重要な情報が得られたと言うのに、緋嵩はまるで天気予報でも聞いたような気安さで定型の礼を述べると、彼女に背を向けて歩き出す。

「そうそう、ちょっと待って」

いつもなら情報を聞いてこのまま別れる所なのだが、今日はなにやら違うらしい。

軽い調子で呼び止めたその声に緋嵩が特に身構えもせず振り返ると、フォーチュンテラは姿勢を変えず顎を手に乗せたまま口を開いた。

「大した事じゃないんだけど、紛い物の結界の消失に不確定な介入が見られるわ。退治屋にしる縄張り争いにしる、何かが対立してるのは確かだね」

本当ならば状況が一変するほど重要な情報の筈なのだが、生憎それを語る彼女に重んじている気配は微塵も無い。

「ああ、知ってるよ。さつき手を組むって協定を結んできたばかりだからな」

対する緋嵩の方も、買い物にでも行ってきたかのような安い口調でそう告げると、フォーチュンテラがローブの奥から意外そうな声を上げた。

「ふうん、珍しいわね。面白そうなおもちゃでも見つけた？ それとも、手を組んだ方が面白くなりそうだっただけかしら？」

つまりは、そう言う事だ。この二人にとっては、所詮那風達など始めからその程度の扱いにしかならないということなのだろう。

それよりも今は、手を組んだと言う緋嵩の言葉の方が彼女にとっては興味の覚えるところらしい。

どこか楽しそうな口調で訪ねてくるフォーチュンテラに対し、緋嵩は呆れたような表情でため息をつくと、

「お前と一緒にするな。純粹な取引の結果だ」

ばつさりと目の前の女の興味を断ち切るように言い切って彼女に背を向けた。

「なあんだそうなの」

がっかりしたように、心なしか僅かに肩を落とした風情で呟くフォーチュンテラを尻目に、今度こそ緋嵩は彼女から離れていく。十メートルほど離れた頃だろうか、ふっと、それまで見えていたはずの彼の背中が消えた。

恐らくは彼女の結界から出たのだろう。

遠目にその様子を眺めていたフォーチュンテラが、まるで緋嵩の気配が消えたのを見計らっていたかのように、自分しか存在しなくなつた空間でポツリと呟いた。

「純粋な取引、ねえ」

視線の先にあるのは、今の今まで飾りとしてしか機能していなかつた水晶球。その中に映る、古めかしい日本家屋を出る緋嵩の姿だ。

「ふふ、面白そうなことしてるじゃない」

赤い唇が微笑を描き、その口からは艶やかな笑い声が漏れる。

全身の殆どをローブで隠されているというのに、その様子はどんな聖者さえも欲望の水底に突き落とすような色香を見るものに与えるだろう。

だがその目だけは、彼女にはまるで相応しくないものを映していた。成熟した女としての雰囲気とは似ても似つかない、まるで悪戯に目を輝かせる子供のような、そんな彼女の内側を。

ツカノマノクビキ く a s l i g h t c o n t r a c t く

「 2 . 1 . 1 . 1 . 1

いやあ、こういう女性は敵に回しても味方にまわしてもやっか……
いやなんでもありませんやめてくださいごめんなさいすみませんで
したってちょ……!!?! (ブツツ つー、つー、つー、つー

「……はあ」

フォーチュンテラが微笑のままに細められた目を怪しく輝かしていた時、別の場所では、どこか疲れたようなため息が落とされている所だった。

そこは何処にでもある、建物と建物の狭間。

中身のこぼれたゴミ箱に、無駄に音ばかり大きい旧式の換気扇ががたがたを今にも壊れそうに身を震わせている。外には眩しいほどに人工の光が輝いているというのに、この場所には殆ど届いていない。

薄闇の中で遠くから響いてくる街の音が、まるで人間の世界から隔離されたような物悲しさを与えるようだった。

そんな場所で、一方の建物の壁に背をもたれさせながら、気だるげに視線を彷徨わせている人影が一つ。

「あいつがその気になるとろくな事にならないからな。変に興味を持たなきゃいいが」

ポケットに手をつ突っ込んだまま誰に言うでもなくそう愚痴ったのは、つい数分前までフォーチュンテラと話していたはずの緋嵩である。

と言うのも、彼女の作り出した真正銘の鏡面結界から抜け出して見た所、目の前に広がったのがこの薄汚れた路地裏の景色だったのだ。

目撃者の有無についての配慮と考えれば、こんな場所に現れるようにされていたとしてもおかしくは無い。

難点といえば、突然吐き出されて気分のいい場所ではないことぐらいだらう。

だと言うのに、

「ははっ、まあいいか」

不自然で、上機嫌な声上がる。

普通こんな場所に突然吐き出されたら誰であろうと多少は気が滅入りそうなもののだが、緋膏の声にそれを感じさせるものは微塵も無かったのだ。それどころか、時間が経つに連れてどこか機嫌がよくなっているようにすら見える。

しかし、それさえも長くは続かない。

くつくつと喉の奥で笑ったかと思えば、次の瞬間には急に真剣な表情で建物の隙間から僅かに覗く夜空を見上げる。

「……やはり、あの程度では抜け切らぬか」

今までのぶつきらばうな口調とは打って変わり、今度はいやに年寄りめいた口ぶりで、何がしかの感情がこもったようにじつくりと呟く。

情緒不安定な挙動不審者のようにこころごととせわしなく態度と感情を変え続けた緋膏が、一気に感情が冷めたかのようにゆっくりと目を瞑ると、そのまま小さくふつと笑った。

どこか嘲笑めいたその笑い声と共に目を開くと、傾けて寄りかかっていた身体を起こし、緋膏はそのまま薄闇を後にする。

街を彩る人工の光が彼の顔を映した瞬間、その真紅の瞳が僅かに細められ、光を反射していたのだった。

ツカノマノクビキ } a slight contract }

「 2 . 1 . 1 2

ようやくツカノマノクビキ、終了です。

ああ、はやくバトルが書きたい……orz

次章こそはバトルを、ばとる、を……はあ (;)
(;)

さて、日常部分がもうちょっとだけ続きます。

というか、この章で日常は最後のような？（ばとるはモウスグだ）

翌日。

太陽が一日で一番高く昇りきる、その少し前。

「ええい！ だったらこれで、どうだっ！」

呆れるほど晴天の中で、呆れるほど活気のついた声が鳴り響いた。その発生源を辿ってみると、今時の街にはそぐわない概観の建物が一つ。

『那風骨董点』と書かれた看板を掲げるその場所の、吹き抜けになった店の入り口の直線上にあるカウンターに、声の主は居た。

半そでに短パンといったラフな衣装の上から、店の名前が入ったエプロンだけを着けるといふスタイル。 叫ぶと同時に頭上に掲げた右腕を勢いよく振り下ろしたその人物は、この店の店長を務める那風涼香その人である。

だんっ、という盛大で硬質な効果音と共に木製のカウンターに叩きつけられたのは、年代物の電子式卓上計算機。

一般に電卓と呼ばれているその電子盤には今、平均的な中流家庭の年収に匹敵する金額が表示されていた。

「ほっほ。 お譲ちゃん、無茶を言ったらいけないよ」

金額に目を落としながら穏やかに口を開いたのは、くたびれた灰色の帽子によれたロングコートという出で立ちの老人だ。

だが、決してみすばらしいと言いつてではない。 白髪に片眼鏡、

適度に曲がった背中に洒落た漆黒のステッキという組み合わせが絶妙に衣装と絡み合い、どこか知的な雰囲気の色濃く醸し出していた。

老人は電卓をひよいとつまみ上げると、手早く内容を書き換えて那風のほうへと向けて差し出す。

「これらの品物ならば、これくらいが相場じゃろって」

映し出された内容は、先の数字の三割減。

「なっ……」

既に大分値引きしているにも関わらず、尚も削られた数値を見て、那風が目を見開いて硬直する。

「いやなら良いんじゃないよ。この値段なら他の店でも十分買い揃えることが出来るからのう」

那風の様子に追い討ちを掛けるようにそう言った老人が、かつかつかと陽気に笑った。

状況が状況だけに、なんとも意地悪く見える光景が広がる中、店の奥から荷物を抱えた轟が姿を現す。

ここでようやく那風に援護が入るかと思いきや、そういう訳でもないらしい。彼は那風と老人の様子を見るや否や、くすりと苦笑しただけで、何も言わずに商品を持ったまま那風の脇をすり抜けて陳列棚へと去って行ってしまったではないか。

その反応を見るに、どうやらこの光景はそう珍しいものでもないようだった。

一方那風はと言うと、轟が通り過ぎたことにさえ気付かず、じいっと電卓を睨みつけているばかり。

どうやら値段交渉に集中しすぎているようで、周りが眼中に入っていないらしい。

熱くなりすぎては交渉事が上手くいくはずは無いのだが、短絡的な彼女のことだ。毎回毎回、目の前の難敵に翻弄されるがまま、頭に血を上らされてしまうのだろう。

那風はしばらく電子盤の数字を見つめていたが、突然それをもぎ取るようにして勢いよく手中に収めると、機械を壊すのではないかという激しさと共に数字を打ち込み始める。

「じゃ、じゃあ、これでっ！ これ以上は無理！ ぜったい無理！」

もはや白旗確定の切羽詰った叫びと共に、那風が半ばカウンターに乗り出した格好で老人に電卓を突きつけた。

示されている数字は、やはり老人の打った値段よりは大きいものの、元の値段の半額以下。

小刻みに腕を振るわせ、鼻息荒く老人を見る彼女の様子は、怯えながらもこれ以上引けないという決意じみたものがよく見える。

もはや利益などまるで無く原価ぎりぎりの値段なのは、彼女の様子をみれば一目瞭然だった。最大の譲歩をして老人に値段を見せた那凧の方は、さぞ内心で心底歯噛みしていることだろう。

対して、彼女から原価での取引を勝ち取るのに成功したであろう老人は大層満足そうになっことりと笑うと、

「ほっほ、ここをこうして、とな」

那凧の手にある電卓を、ぽちぽちと指で弄った。

「……………」

「……………」

まさか、と目の前の現実を疑うような表情で老人を凝視する那凧に、彼はただ微笑んで彼女が電卓の数字を確認するのを促す。

急かすでも、声を掛けるでも無く、ただただ笑顔を保っているその余裕が、かえって彼女の不安を掻き立てる。

「……………」

どれだけそうしていただろうか。暫しの沈黙の後、那凧は不意にぎゅつと両目を瞑って電卓を自身の眼前に持つてくると、恐る恐る目を開けた。

「ちよっ！？ 無茶言わないですよ！ これじゃあ利益どころか赤字じゃない！…！」

案の定、というか何と言うか。

不吉な予感を裏切ることなく、しっかりと下げられた値段を目にするや、那凧が吼える。

だが、それさえもすっかりと老人の掌の上。彼は穏やかな笑みを崩さぬまま、しかし確実に相手を完膚なきまでに打ちのめす言葉を口にしたのだ。

「それはお譲ちゃんの買い方が悪いんじゃないやろって。市場価格ならこの七割ほどの値段で手に入るはずじゃよ。ほっほ、ぼったくられたの」

愕然と、突きつけられた情報に打ちひしがれ呆然とする那凧を見つめながら、老人はゆっくりと視線を下ろし、ステッキを撫でながら囁いた。

「さて、どうするかね？ このまま無駄に高い品物を買え残らせるか、多少損がでても私に売って綺麗にするか。好きな方を選ぶといい」

実際、今二人が商談している商品は、決して売れ行きがいいものとは言えない。このままいけば、確かに売れ残りとなる可能性のある物だったのだ。

目に見える不吉な未来に、老人の卓越した話術とが絡み合い、巧みな戦術となつて那凧を襲う。

果たしてそれは悪魔の囁きの如く、どうしようもない諦観の波を彼女の思考へと巻き起こした。

「あ、う……」

当然のように発せられた老人の台詞に言い訳さえも思い浮かばず、那凧はただ乱れる思考のまま妙な呻きを漏らすのみ。

どれだけそうしていただろうか。

困ったように、迷うようになくしゃやくしゃと顔を歪めていた那凧が、唐突にかくんと首を落とした。

がっくりと垂れ下がった肩に、力が抜けたようにだらりと下げられる両腕。なんともわびしい雰囲気を全身からこれでもかという程に漂わせながら、

「はあ、毎度ありがとうございます……」

しよぼくれた声でそう呟いたのであった。

また、言い終わると同時にカウンターの下から掌大の小さな箱を取り出して、老人の目の前に差し出す。

全てが木で出来たその簡素な外観は新品と呼ぶには程遠く、作られてからゆづに数十年は経っていきそうな風格と古めかしさを伴っていた。

骨董店に相応しいと言えるそれは現在ふたが閉じられておらず、

中には衝撃吸収用の綿がこれでもかと詰められている。

だが、何と云っても目が引かれるのは、箱の中心部に敷かれた黒い布の上にある品物だろう。

乳白色の、艶やかな光沢を放つ流線型。

七センチほどの長さを持つそれは、側面では緩やかで歪み一つ無いカーブを描いている。両方の先端が多少鋭すぎるような気がするものの、色や質感と相まって、それはまるで美術品のようであった。

それが、八本。

「おお、これこれ。何度見てもいいものじゃなあ」

品物を見つめながら両のまなじりを下げて、感極まったかのように言葉を漏らした老人は、ふっと思いついたように那凧の顔まで視線を上げると、

「まあ、ずいぶんと値は張ったがの」

小憎らしい台詞と共に、懐から財布を出して見せたのだった。

あからさまな老人の皮肉に、ぴきつと彼女の額に血管が浮かんだのは、まあご愛嬌というところだろう。

内心では、目の前の老人に一通りの拷問めいた関節技でも極めているに違いない。

しかし、現実では怒りに手を震わせながら、老人が財布から取り出したカードに手を差し出すばかり。

那凧の指が、触れるか触れないかといった時、

「へえ、ずいぶん安いんだな」

唐突にカウンターに第三者の影が落ち、この場にいるはずの無い人物の声が店内に響いたのだった。

「なっ!?! あんた」

予期するどころか店内に入ったのすら気が付かなかった那風が動揺の声を上げるが、当の本人はそんなことはお構いなしで、ひよいと箱に入っている品物を一つ摘みあげる。

「……やっぱり、土蜘蛛の牙か」

品物を蛍光灯に向け、光に透かすように眺めていた人物は、確信したような呟きを漏らす。

「ほお、一目でこれが何か分かるとは。おまえさんも、これに惹かれた口かね？」

急に現れた他人に対して、こちらは特に驚いた様子も無く感心したような声音で話しかけたのだった。

見つめていた土蜘蛛の牙を箱に戻すと、老人の探るような視線を受けた人物、季節外れの黒いコートを羽織った緋嵩が、にやりと口の端を持ち上げる。

「まあな、それより爺さん。ここいらの土は、箱を作るには痩せすぎてると思わないか？」

まるで世間話でもするかのようなタイミングで口にした言葉はしかし、何のことを言っているのかまるで分からない一言だった。

そばで聞いていた那風でさえ、「は？」と頭に疑問符を浮かべている有様だ。

ただ一人。

老人だけが面食らったように一度だけ目を見開くと、急いで今までのような微笑の形を取り繕う。

「やれやれ、こいつは驚いた。お前さん、何者じゃね？」

探るような鈍い光を目に宿したまま、形だけはこれまでと変わら

ない笑顔のまま、老人が尋ねた。

「ひい、ふう、みい……一本あたり約三十万か。随分と安いんだな、こんなんでも採算が取れるものなのか？」

投げかけられた問いに答えることも無く、無防備に電卓を覗き込んだ緋嵩が那風の方へと顔を向ける。金額に対する純粋な疑問か、それとも単に店主に対する凝った皮肉なのか、その表情はいつものような人を食ったものではなく不思議だと言いたげな悪意の無いものの。

老人との会話について行けないばかりか、突然話の矛先を向けられたこともあって、那風が交渉の内容ををきよとした様子で正直に口走ってしまう。

「え……赤字だけ。でも、その人が市場ならこの七割で手に入るって」

那風が老人を指差したのを見て、緋嵩が特に勢いをつけるでもなく自然な動作で老人に振り返った。

「へえ、七割、ね」

彼女の言葉に何を得たのか、老人に向き直った彼の顔には悪戯っぽい笑みが浮かんでいる。

笑顔を向けられた相手は緋嵩のほうを向いているものの、視線だけは彼を見ていない。

殆ど自分が視界に入っていないことを承知の上で笑みを濃くすると、彼はカウンターに腰掛け、箱の中にある牙を摘みだした。

老人の身体から、緊張を臭わす空気が漂う。

「まあ、あんたが何しようが俺には関係ないし、わざわざ首を突っ込む理由は無いんだがな」

一本。

「だがまあ、この店とは付き合いがあるし、義理が無くも無い」

二本。

「で、だ。目は閉じればいいだけだが、耳と口を塞ぐには、塞ぐものが必要だよな？」

三本目を掌に収めたところで、何かを仄めかす様な仕草をしていた緋嵩の口調が一変し、その身体がカウンターから離れていく。

まるで話は終わりだとも言うような緋嵩の行動に、強張っていた老人が先ほどの那凧のようにきよとんとした顔で緋嵩を見ると、「ふ、はっはっは！ 面白い奴よ。 お前さん、将棋は好きかね？」途端、老人の顔に何かを理解したような色が現れ、その口からこれまでとは打って変わった愉快そうな声が上がったのだ。

那凧に対していたものとは明らかに違う。 人を食ったようなものでも、好々爺然としたものでもない声色と雰囲気だった。

言葉にすれば、気に入った、とても形容したら適切かもしれない。恐らくはこちらが、彼の本質なのだろう。 見かけよりも随分と活力に満ちた張りのある声で訪ねる老人に、彼に背を向ける形で歩いていた緋嵩が首から上だけを振り向かせる。

「悪いが花札の方が好みだ」

ひどく面倒そうに言った彼の顔には、笑顔など欠片も無い。 浮かんでいたのは、那凧達がよく知っている皮肉屋の顔だった。

「やはりか。 上の者達は派手好きだからなあ……お嬢ちゃん、支払いを頼むよ」

「え？ あ、はい」

残念そうにふつと苦笑すると、老人は改めて手に持っていたカードを那凧に差し出した。

二人の化かし合いは愚か、会話の内容さえ殆ど理解できないまま完全に空気にのまれて呆然としていた那凧が、未だ思考の回り切らぬ様子でカードを受け取る。

とりあえずまとまった商談の決算だけを済ますことにしたようだが、その仕草はお世辞にも滑らかとは言えない。

「えっと。 この値段で、良いんですか？」

カウンターの電卓と商品を交互に見返しながら、彼女の口から疑問の声が漏れた。 当然と言うべきか、緋嵩が取り上げた三本分の事や値段を聞いた際のやりとりが引っ掛かっているらしい。

「構わんよ」

しかし、老人から発せられたのは、何の躊躇も説明も無い至極簡素な、了承のみを伝える言葉。

思わず那凧が、なんとも言えない微妙な表情を浮かべて戸惑いを露にした。

だが、本人が許可を出している以上追及の予知は無く、仕方なく専用の機械でカードを読み取った今この時点で、那凧の気持ちなどお構いなしに売買は終了となるのだ。

会話に参加できなかったとか、何がしかのやりとりがあったとか、そんなものは値段に関係していないし、そもそも買い手が良いと言っているのだからどうしようもない。

老人の方もご丁寧に説明する気は無いらしく、返されたカードを受け取って箱の中から五本の牙を懐に入れると、迷うことなくカウンターに背を向けて出口へと歩き出してしまった。

始終ペースを乱されっぱなしだった那凧だったが、結局最後の最後まで調子を取り戻すことは叶わなかったようだ。

「あ、ありがとうございます……」

気の抜けた声で老人を送り出すと、何をしてもなくぼつとしたり様子で立ち尽くす那凧だったが、不意に隣から声が掛けられた。

「おい」

「え？」

大して考えもせず、殆ど反射のように返事をして那凧が振り向くと、

「あいたっ」

ぱしん、と軽快な音を立てて、那凧の顔面に何かがぶつかった。

「間抜け」

顔面に衝突した物体の重量を眉間に感じたまま、那凧が何事かと目を開ける。

すると、何やら肌色のもので分断された視界の中に、呆れたような目で自分を見下ろす緋嵩の姿が。

彼の体制を見てすぐに、視界の真ん中に映っているのが目の前の男の手刀なのだ。彼女の脳が理解する。同時に、大して力のこもっていない衝撃は、痛みよりもこれまで曇りきっていた彼女の思考に鮮明さを取り戻させたようだ。

「いきなり何すんのよ！」

目を三角にして威勢良く吼えた那凧の様子に、緋嵩は目を瞑つてため息をつくと振り下ろしていた手を彼女の顔から持ち上げる。

まるで悪びれた様子の無い緋嵩の態度が癪に障ったのか、那凧が勢いよく彼を指差して怒鳴りつけた。

「大体あんた、どっから湧いて来ぶっ!？」

手刀再び。

うるさいとでも言いたげな投げやりな表情で落とされた緋嵩の手は、先程よりも鈍い音を立てて那凧の顔面にめり込んだ。

「うむ、いい角度だ」

「……何最初からいましたみたいな雰囲気出してんだあんた」

那凧が両手で顔を押さえて床をのたうちまわっている光景の中、後ろから響いてきた賞賛に冷めた口調で切り返した緋嵩が、目だけを動かして相手の姿を視界に捉える。

白地のＴシャツの腕部分を更に付け根まで捲り、組んだ腕の先に軍手をつけ、何食わぬ顔で緋嵩の隣に現れた轟の姿がそこにあった。「はは、あのじいさんには店の奴ら全員やられててな。出来るだけ近寄らんことにしていたのだ」

苦笑交じりでそう言った轟の顔を見て、彼が姿こそ現さなかったがこちらの出来事をしっかりと認識していたのだと理解する。そうでなければ、こんな都合のいいタイミングで品物棚から帰ってこれるはずも無いだろう。

「はあ、こんなざまで大丈夫なのか？」

呆れたような声を出して、緋嵩が眉間を揉むような仕草をとった。それは単に店の経済的なものではなく、短い間とは言えこれから自分はこの人間達と行動を共にすることを考えてしまったがゆえの行動だったのかもしれない。

「一部、仕入れがタダに近いものもあるからな。売り上げは問題ない」

うんうんとなぜか得意気に頷く轟に、緋嵩の口から諦めたような深いため息が落ちる。同時に、視線も落とした所で、目の前でのた打ち回らないながらも未だ顔を抑えてしゃがみこむ那風の姿が視界に入った。

「いつまでしゃがんでんだよ、あんた」

自分の非など露とも感じていない彼の一言に、しっかりと縦線の入った顔を押しさえながら那風が涙目で緋嵩を睨み付けた。

もちろん、彼の手の射程外で。

「うう、あんたのせいだよ。何であたしが二度も殴られなきゃいけないのよお」

「あんたが不甲斐無いからだろ」

恨みがましい口ぶりで非難する那風にざっくりと言い放つと、緋嵩はもう一方の掌に収まっていた物を彼女に向かって投げた。

剛速球で。

「はっつ!?!」

すこーん、と乾いた音を立てて那風の額に激突したそれらが、彼女の顔を仰け反らせるのと引き換えに地面にぱらぱらと落下する。

「くっ! くっ! くっつ!」

頭蓋に伝わった衝撃に声にならない悲鳴を上げながら、那風がまるで土下座しているかのような体勢でうずくまった。額を押しさえながら細く開いた目が眼前の地面を至近距離で映す。

すると、薄汚れた床の丁度視界の真ん中辺りに、周りの灰色とそぐわない小奇麗な乳白色の物体が。

体勢そのままに訝しげに目を細め三本の棒状の物体に注視する。

数秒後、細めていた目が一気に見開かれた。

自分の額にピンポイントな衝撃を与えた物。その正体を知るや

否や、

「ちよっ!?! あんたなに投げてんの!?! これ一つでいくらする

と思ってるのよ!!」

痛みなどそつちのけで那凧が吼える。

彼女の額に当たったのは、先ほど緋嵩が摘み上げた土蜘蛛の牙。一本五十万相当の品物が勢いよくぶん投げられ、しかも自分に直撃して地面に墜落したのだ。それも三本も。金銭に無関心な人間でもなければ当然の反応だろう。

手刀の恐怖さえ無ければ近づいてぶん殴ってやりたい所だと、鼻息荒く威嚇するような仕草で緋嵩を指差す那凧。だが、当の本人がそんなことで怯むはずも無い。

「この程度なら傷一つ付かないことぐらい知ってるだろうが。そんなことより、あんなモグラ爺になににいいように騙されてんだ」
那凧を指差して緋嵩がずいっと踏み込む。

駄目な子供でも見るような彼の目に加えて眼前まで迫った指先に差された方は「うつ」と言葉に詰まった様子で半歩あとずさった。

一転して至近距離になったことで、言いようも無い無言の圧力が那凧に押し掛かる。

先ほどの威勢は、あくまで予想外の事実への驚きが後押ししただけのもの。優劣が逆転したわけでもない那凧はまたも追い詰められ、気まずそうに視線を外して唇を尖らせた。

「だ、だって、あの人が……」

「だってじゃないだろ。つたく、都合よく俺が来たからよかったものの、あのままだったらこの三本分まるごと損してたんだぞ。

あんな目が退化したようなモグラ相手に」

指を下ろして腰に当てると、叱られて不貞腐れたような様子的那凧に緋嵩がやれやれと苦笑して身を翻す。

「う……よ、余計なお世話よっ」

「おいおい那凧」

子供扱いされたのが癪に障ったのか、そっぽを向いたまま目だけで彼の動向を追っていた那凧が悔し紛れに負け惜しみを返した。

残念ながら言い返す様子さえも子供そのままの那凧に、轟からも

控えめな非難が漏れる。

本人にも自覚があつたのか、轟の非難にうつすらと頬を赤く染めると、彼女は気まずそうに視線を下ろしてしまった。

そこへ図つたように落とされる緋嵩の言葉。

「そういう訳にもいかないだろう」

淡い笑いを含んだ声と共に彼の足が歩みを止めた。

「俺と組むんだろ。仲間を助けちゃ悪いのか？」

振り向いた顔に浮かぶ表情は皮肉屋というよりいじめっ子の笑みに近い。那風の反応が面白くて仕方ないという本音が駄々漏れた瞬間だった。

あつけらかんとした彼の告白に、つかの間の静寂が流れる。

「くくつ、はっはっはっはっは！ 確かにそうだ。一本取られたなあ那風！」

先に口を開いたのは、轟の方。

どこまでいっても那風より一枚上手な緋嵩の様子に、豪快な笑い声を上げて賞賛を送る。

ついこの間彼らを打ちのめした相手と一緒に居るとは思えないほどの和やかな雰囲気の中、意地の悪い兄にでも弄られているような気分陥った那風が赤面して俯くと、わざとらしく声を上げた。

「そ、そういえば、さっきからあのお客さんのことモグラモグラって言ってるけど、普通ああ言うのはたぬきって呼ぶんじゃないの？」

「おお、そういえばそうだな。何でだ緋嵩よ？」

どうにかして予先を変えようと強引に話題の切り替えを試みたのがバレバレな内容だったが、上手い具合に轟が援護射撃をしてくれたようだ。

本人としては那風を援護した自覚はないのだろうか、純粹なだけに効果は中々のもの。

上手く話の切り替えに成功した空気の中、二人が緋嵩に視線を向けると、

「……………」

なぜかきよとんした顔が浮かんでいた。

「なあ、あのじいさんのこと、なんだと思ってたんだ？」

面食らった表情から一転して、そんなはずは無い、とでも言いたげな口ぶりで尋ねた緋嵩に、さも当然のように那凧から答えが返される。

「え？ 確か、古美術の収集家だとか言ってたけど？ ね、虎さん」

「ああ、そうだったな」

那凧の隣にいる轟も頷きながら同意した。

「なら、その用途は？」

那凧が握る土蜘蛛の牙を指差して問うと、こちらも大して悩んだ様子も無く答えた。

「え？ この間の禍鏡から手に入れたんだけど、綺麗だから飾り物として売れるかなあって。ほら、土蜘蛛の牙なんて言っても、誰も信じないでしょ？」

思いもよらぬ台詞だったのか、珍しく言葉に詰まったような顔をした緋嵩が眉間にしわを寄せてやや早口で次々と質問を投げかける。

「……仕入れの値段は、まさか適当か？」

「ああ、あれ。前に来たお客さんが言ってたの」

「これ以上は無理って言うのは？」

「あれを持ってた禍鏡を退治するのに使った費用だな。玉響の発動や高原の武器、那凧の装備と、奴らの退治にはなにかと費用が掛かるのだ。まあ、安く済む時もあるがな」

緋嵩からの問いに対してぽんぽんと答えていく二人。

さて、ここで問題なのは緋嵩の方だ。

「あ……」

なにやら目頭を押さえて唸っている姿は言いようも無い脱力感を臭わせると共に、どうしたものかと悩んでいるようにも見える。

今までで一番呆れ返ったような雰囲気溢れる彼の様子に、二人は顔を見合わせて訝しげな顔になった。

「ねえ、なんか莫迦にされてる気がするんだけど。言いたいこと

があるんなら言いなさいよ」

眉間にしわを寄せて那凧が訪ねると、ぼつりと、独り言のような
呟きが彼の口から漏れた。

「あれ、人間じゃないぞ」

「……………は？」

目の前の男の言ってる意味が分からないとばかりに、ぽかんと口
を開けて間の抜けた声を出す二人。

沈黙。そして、ため息。

「やっぱり、気付いてなかったんだな」

眉間を揉んでいた手を下ろすと、緋嵩が疲れたような半眼のまま
で顔を上げた。

「人と妖の区別も付かなくてよくこんな商売できるな、綺麗ってお
前……………下手したら他の退治屋に消されるぞ」

「へ……………よ、妖怪って、今も居るの？ 禍鏡じゃなくて？ ってい
うか退治屋って何!？」

半ば脅しのような緋嵩の一言に、声を上げた那凧だけでなく轟も
驚いたような顔をして緋嵩を見る。

老人の正体に気付かなかったのではなく、まるで始めからそんな
ものなど知らなかったかのように。

「おい、まさか全員、今の妖や退治屋のことまで知らないとか言う
んじゃないだろうな？」

どうも自分の予想とは根本から違うような気配に、とりあえず緋
嵩が基本から確認を始めた。

「……………」

こくこく、と同じタイミングで頷く二人。

「……………早まったかな」

本日一番の苦悩と疲労感を伴って、好奇心を刺激されたらしい二
人を前に、ため息にも似た緋嵩の嘆きが静かに響いたのだった。

「よし、みんな集まったわね！」

店の奥。既に集会場と化しているその座敷のど真ん中で、満足そうに両腕を組んだ那風が意気揚々と声を張り上げた。

彼女の視線の先、座敷の側面にある柱の一つには、背をもたれさせてポケットに手を突っ込んでいる緋嵩の姿がある。

また、仁王立ちしている彼女の周りには、胡坐をかいて興味深げな目で緋嵩を見る轟に、正座で麦茶をすする高原と、横に足を崩した格好できょとんとした顔を浮かべて那風を見る御国の三人が揃っていた。

「あのお、何で私たちまで集められたんでしょうか？」

純粹な疑問が御国の口から零れ落ちる。

「僕も気になるね。今日は非番だったからさきちゃん遊ぶ約束があっただけだな」

グラスを置いた高原からも非難めいた声が上がった。

「ああ、それね。なんかひだちゃんも皆も呼べって言うからさ」

「ちよつと待て。色々省略しすぎな上になんだその呼び名は」

さらつと言つてのけた那風だったが、そこは聞き逃さないとばかりにしっかりと緋嵩が異を唱える。

「いいじゃない別に。仲間ならあだ名の一つぐらいあつておかしくないでしょ」

特に悩んだ様子も無く言つてのける那風に、どう言い返したものと緋嵩が困つたように息を吐いた。

こういったものは悪気を含んだものではなく純粹なものほど性質が悪い。

「あいな……」

「まあまあ、良いじゃないですか」

なにやら物言いたげな緋嵩を、苦笑いしながら御国がなだめる。

「そうそう、店長のは今に始まったわけでもないしね」
「だな」

他の二人の表情も、彼女とさして変わらないもの。
つまり、「言っても無駄だ」ということらしい。

「はあ、まあいいけどな」

うなだれる緋嵩に微笑ましく苦笑を送る三人を見て、那凧が微妙な表情を浮かべて呟いた。

「なんか、私馬鹿にされてる？」

生憎その質問に答える声は無く、代わりに高原が何かに気が付いたような素振りを見せた。

「そう言えばさ、まだ彼の名前聞いてないよね」

唐突に投げかけられた質問に、他の三人も高原と同じような表情に変わる。

「む、そういえばそうだな」

「さなちゃんが名前呼んでたから気付かなかったけど、言われてみれば」

「私は、教えてもらいましたけど、そういえば店長達からは緋嵩さんの名前聞きませんでしたね」

三者三様に同意を返すと、合図したわけでもなく四人の視線が一箇所に注がれた。当然ながらその先には、身体を斜めに保ったままの緋嵩が。

彼の方かというと、先ほどのうなだれた雰囲気も収まり、心なしかその顔は些細な忘れ物をしたようなものに変わっていた

「ああ、そっぴやそうだったか。 緋嵩総一だ、よろしく」

「え、それだけ!？」

どうやら本当に内面の方にも大した動揺は無かったようだ。

緋嵩の口から出たのは、いかにも彼らしい台詞。 注目を浴びていることなど気にも掛けていない、どうでもよさそうな声で述べられた簡素な自己紹介だけだった。

思わずそのあっけなさに那凧が声に出して驚きを示してしまうも、

相手にはそれに応える姿勢などまるで無い。

「十分だろ」

「不十分過ぎるわよっ」

突然の大声にもさして驚いた様子は見せず軽い調子で返されたあつけない終了宣言に、間髪入れず那凧が噛み付いた。　ずずいと緋嵩に詰め寄って、これまで溜まりに溜まった文句を羅列するも、対する彼の方はそっぽを向いて聞き流すのみ。

「ま、まあまあ」

そんな、一方的にヒートアップして暴走危険を臭わせる雰囲気が那凧から流れ始めた頃、再び御国の方から諫める声が上がった。

二度目だけあって、その苦笑の色は微妙に濃い。

「ねえ、そろそろ呼ばれた理由が知りたいんだけど」

助け舟が出たのは、意外にもこういつた揉め事が一番好きそうな高原から。

大した声量ではない、どこか拗ねた色合いをみせる声が部屋に居る全員の耳を通った。

いつもの軽薄そうな笑顔をつんとしたものに変わって尋ねたその様子は自身の休暇が潰れたことに対しての不満が見え隠れしているようにも見えるが、単に遅々として話が進まない子供のけんかに嫌気がさしただけのようにも見える。

どちらにせよ、高原の一言に反応して明後日の方向を向いていた緋嵩が話を進めようと向き直ったのは確かだ。

「なあ、この中で付喪神を知ってる奴、居るか？」

ようやく緋嵩の口から出た本題、その内容に、彼以外の全員が訝しげな顔になった。

具体的には、

「はあ？　何言ってるんのあんた？」

今この瞬間、見事に那凧が声に出してくれた台詞のような顔だ。

付喪神とは、つい昨日那凧達が禍鏡の説明をするときに使った単語であり、その性質を知らないはずが無いのである。

「知ってるも何も、昨日店長が言ってた通り禍鏡の核になってる妖怪のことですよね？」

分かり易くやや説明めいた口調で確認する御国に向かって、緋高の口が開く。

「会ったことは？」

「え？」

きよとん、とした顔で御国が疑問符の付いた一文字だけを返す。

少しして理解が追いついたのか、反射的に聞き返した彼女の顔が次第に何かを考えるようなものへと変わった。そのうち顎に指先を当てだし、記憶を漁るようなものになったかと思えば、最後には腕を組んで眉間にしわが。

唸る御国から視線を外して周りへ向けると、他の面々も似たような表情を浮かべていた。

「言われてみれば、普通に妖怪の事とか口にしてる割に、見たこと無いな、俺達」

御国と同じように腕を組んだ轟から今初めて気が付いたとばかりに声が漏れる。

轟の言葉に反応して、いつの間にか緋高から意識を外した那凧から彼女達の現状を示す一言が発せられた。

「そもそもさ、そういうのってもう皆死んじゃったんじゃないの？だから禍鏡がこんなにいるんですよ？」

会った事は愚か、今現在居ることさえも定かではないという彼女の言葉に同意する面々。

「はあ、やっぱりな」

そんな彼等の姿にガツクリと肩を落として呟いた緋高の一言は、予想通りという確信と、僅かな呆れが混じったものだった。

「そもそも禍鏡の存在をどうやって知ったんだ？」

妖怪に関する知識はあれど現在の知識に関してはやたらに疎い。

かと思えば、文献にないような怪物の事を知っており退治屋としての組織を形成している。

てんでちぐはぐな組織のリーダーに疑惑の目を向けながら緋嵩が尋ねた。

「え？ 言ってなかったっけ？」

「聞いてない」

どうやら、彼女の方は話したものとばかり思っていたらしい。

思いがけず帰ってきた否定を「そうだった」と軽い口調で受け流すと、世間話のような明るい調子で話し出した。

「えっと、実は私の生まれた村がさ、代々禍鏡と戦ってきた一族なんだ。なんでもね、私達の居た村が昔、何でかは知らないけど禍鏡に襲われたんだって。普通ならそのまま滅んじゃうところだったんだけど、その時たまたま通りすがった親切な鬼が村を助けてくれたの。で、また襲われたら困るだろうって、帰り際に生き残った村の人たちに力を分けてくれたんだって、それが――」

「あのときの能力ってわけか。成る程、信憑性はさておき、退治屋としてはありがちなパターンだな」

一通りあらずじを聞いて納得したところで、那凧から視線を外した緋嵩が今度は後ろの方に居る面々に視線を合わせる。

「あんたらもそうなのか？」

それは那凧の話を踏まえ、彼ら全員が恐らくは同じ村から派遣された小隊のようなものだろうと予想した上での、いわゆる確認のような問いかけ。

だが返ってきた答えは彼の考えとは大きく異なっていた。

「あ、いえ。私達は店長とは違って元々この街に住んでた、その

……一般人でした」

遠慮がちに告げられた御国の言葉に、緋嵩の眉が僅かに動く。無論、とても興味深そうに。

「……一般人ね。能力者って言った方が適切じゃないのか？ 那凧以外の三人とも、何かしらの能力を始めから持ってたんだろ？」
もっともな緋嵩の問いに、正座したまま芝居がかった仕草で両手を広げた高原が答えた。

「まあね。でも最初はこちらまではつきりとしたものじゃ無かったよ。僕や早苗ちゃんのはなんとなくに近い程度だったし、轟のも温泉並みだったしね」

「あたし達とまともにやり合えたのなんか、あんた位のものよ」
色々と思うところがあるらしく、那凧が腕を組んで拗ねたような目で緋嵩を睨んだ。

どうやら先の戦いの目的は相手の能力確認と非現実の証明。簡単に言えば、相手を混乱させて然るべきものだったらしい。簡非常識を納得させた挙句、自分達の仲間にしよつと言うのだから、そのぐらいのインパクトと強引性は必要と言えるだろう。

うまくいけば、昨今の幼児教育における際に芽吹いた英雄と言った超常の存在への憧れにも火が付いてくれるかもしれない。自分が英雄ないしは他を超越した存在になれるかもしれないといった誘惑は、そこそこの魅力を伴う場合があるのだから。

そこを目の前の男には、自分達の超常性を示す所か完膚なきまでに叩きのめされた上に散々翻弄され、仲間になつた後も完全に下扱い。睨みの一つもくれてやりたいと言うものだ。

「なあ、あんた達はこいつと組んで長いのか？」

すぐ近くで睨みを利かせる彼女をまるで無視して遠くに視線を向けたまま話す緋嵩に、三人全員が僅かに思い出すような仕草を取る。

「私は……まだ三ヶ月ほどです」

視線をやや上に御国が呟くように言うと、今度は腕を組んだ轟が。「俺は高原とほぼ同じ時期だったよな」

「そうだったね、もう1年くらい経ったかな。僕を助けに来たときの君の様子と言ったら……ぷっ、くく」

同意した高原が噴き出すと同時に、轟の顔が僅かに赤みを帯びる。

「あ、あの時はまだ俺も勝手が分からなかったのだ！」

恥ずかしそうに人の居ない方向に首をひねって大口を開ける轟。

「だからってさ、「うほう!？」は無いよね。くくっ、ゴリラそのものだったよ」

「た〜か〜は〜らあ〜!!」

「ぷっ、そういえばそんな事もあったわね。いやあ、あれはある

意味見事だったわ」

「那凧まで言うかつ!？」

すっかり思い出話に花を咲かせるような和やかな雰囲気で場を三人が賑やかす。

何も言わず興味深げに話の先を促す御国の様子から察するに彼女も知らない笑い話なのだろうが、生憎、緋嵩の知りたい情報からは脱線甚だしい話題だ。

「……はいはい、とりあえず分かったから、今は俺の質問に答えてくれるか」

やや大きめの、疲れたような呆れ溢れる声色に、何故かしら逆らいたい雰囲気を感じて皆の注目が集まった。

静まった部屋で主導権を握る彼の視線が向けられたのは、またもや那凧。

「とりあえず聞きたい事は色々あるが、まず一つ。那凧、あなたの村じゃ組織的に動くんじゃないか、個別に動くのか？それともあなたが特別なのか？」

てつきり妖怪関連のものだとばかり思っていた質問は、意外にも彼女の一族に関するものだった。

少々意図から外れた内容に半ば面食らいつつも、腕を組んだ那凧が答える。不思議なことに、急に苦々しいものが混ざったような

表情を浮かべて。

「え？ あ、ああ、そうね……村の皆は、どっちかって言うと禍鏡と戦うって言うよりは、もしも会ったときに生き残れるようになっていう感じ。村に居る間は積極的に戦おうとはしないように育てられるの。そういう感じだから、個別に動いてるって言うのは正解かもね。戦おうと思うには村を出ないといけないんだから。後、村からは十八を過ぎると出て行く決まりなんだけど、子供が出来たら戻ることも出来る。もちろん、戻らなくてもいいんだけど、禍鏡って存在を知っちゃつてると、戻ってくる子が大半かな。村に帰ってくる人も殆どが戦わなかった人達。戦ってた人は、大抵が死んじゃつてる」

浮かんでいるのは、諦観にも似た何か。

力を持つていても使う事を許されず、いざ使ってみれば目に見える所に死の恐怖。そしてその恐怖から、立ち向かうものは減り続ける。正義感を覚えるものには、少なからず苦々しい現実だ。

対する緋嵩は、どこか納得したような顔に変わっていた。

「……どうりで。つまりは退治屋じゃなくて単なる能力者の集団か、それなら今までのちぐはぐな情報の偏りにも納得がいく。外部との繋がりも少なからずそっち側の奴らと呼ばひ込むからな、情報と接触は最小限に留めた方が安全って訳だ」

正義のため、なんて理由で命を掛けれる人間は、いつだって異端なのだ。

大抵の人間は死に怯え、強引な理屈で矛を収めて自身の弱さを正当化する。生きる為に。

「そうみたいね。村の皆が間違ってるなんて偉そうなことは言えないけど、でも、あたしは嫌。助けられるだけの力があるのに見ないふりするの、何も知らない人に紛れて自分が巻き込まれないように怯えて生きるのも」

根っからの英雄気質か、それとも唯の負けず嫌いか。

そんな那屈の台詞を聞いて、どこか朗らかな色合いを感じさせる

苦笑が緋嵩の口からこぼれた。まあそれも一瞬のことで、誰もそんな彼の表情に気付かない内にその笑みは消え、いつものわざとらしく呆れを滲ませたものへと変わってしまったが。

「意気込むのは結構だけど、それで妖怪と人間の区別も付かないんじゃないや締まらないにも程があるだろ」

「う、うっさい、それは、これから覚えるからいいのよっ」

多少の自覚があつたのか、僅かに朱を帯びた頬で言い返す様はつんけんした物言いの割にどこか微笑ましい。

「なあ、それでなんだが、結局そいつらは何なんだ？」

話の流れに乗ってそんな質問したのは、腕を組んで難しそうな顔をした轟だつた。その問いに緋嵩が答える前に、質問は尚も続く。

「そもそもさつきから聞いていて思ったんだが、随分と、その、退治屋とか妖怪とか何処にでもあるような響きを持つてないか？ 少なくとも那凧と知り合つてから一年の間は、そんな奴ら見たことも聞いたことも無かつたぞ」

「まあ、そうそう自分から言い出すようなことも無いとしても、一年もやつていれば違和感ぐらいは気付きそつなものだね。特に退治屋とか、さ」

轟に同調して高原も付け加えるようにそつ言ったが、彼の言葉が言い終わるや否やといった所で、即座に緋嵩からの否定が重ねられた。

「ああ、それは当然だ」

「? 当然、つて?」

まるで常識であるかのように溜めも無く返された返答に、純粹な疑問として那風が鸚鵡返しに聞き返す。

彼女だけでなく、部屋に居る全員に意識を向けて緋嵩が尋ねかけた。

「自分達のことを考えて見るよ。 あんた達全員、禍鏡と人通りの激しい街中で戦ってるわけじゃないだろ? それに、多少骨董屋なんかで自分達よりの物を見つけたとして、わざわざ自分達の職業明かしたり、探りを入れたりするか?」

言われて見れば当たり前のことだった。

まっとうな一般人ではなく、非常識の中を生きていると自覚している者達が進んで身分を明かすとは思えない。 ましてや、巻き込んでしまい最悪命のやり取りをするかもしれない状況を作り出すなど、まっとうな罪悪感と倫理観を持つ者ならまず思い留まるだろう。では、そもそもどうやってそんな者たちの間でネットワークが確立すると言っのか。

訳が分からないと眉間にしわを寄せる面々だったが、すぐに答えが明かされた。 無論、緋嵩の口から。

「いいか、この世界にはあんたらみたいな特別な能力を持った奴らや、化け物、異世界からの訪問者、そういった類の奴らが至る所にひしめいてる。 基本、奴らとの交流は駆け引きだ。 こういった商売をやってるなら、値切り、雑談、気配、あらゆる所に奴らの正体を示す知識が隠されてると思え。 俺達のような存在は大体立場が孤立してるものだからな、戯れか本気かの違いこそあれ、常に理解者を求めているものさ。 妖怪だろうが人間だろうが、知能を得た奴らは往々にして繋がり的重要性を学ぶものだからな」

「……」

他の三人が感心した様子で彼の話を聞く中、一人、那凧だけが何か納得がいかないような顔をしていた。

「何か気に食わないことでも？」

まるで彼女が抱えているものを見透かしたような台詞に、反射的に那凧が否定を返す。

「そういう訳じゃないけど、でも、」

僅かに言い淀み、一瞬だけ緋嵩の顔を見ると、やがて諦めたようにゆっくりとその先を話し出した。

「なんか、周りに居る一般の人達と区別が付かないのって、実はすごい怖いことなんじゃないかってさ、今更ながら思ったんだ。お店に来たお客さんが、たまたま話した人が、気付かないだけで自分なんか及びもしない力を持つてるかもって、もし一歩間違ったら、自分も引きづり込まれるんだって、そう考えたら」

那凧が不安を覚えたのも、無理もない。

何かの拍子で、自分が全く知覚していなかった世界が広がってしまふ。それも、その誘いはごく身近に在るのだ。

今まで禍鏡と、それに付随する情報しか知らなかった彼女達にとって、自分達のような非日常の存在がごく当たり前にいくつも広がっていると知らされれば不安にならない方がどうかしている。

大海の広さを知った蛙は、その広さに順応できるとは限らない。

那凧以外の三人も彼女の台詞に表情が沈み、自然と視線が下がっていった。

また、それに拍車を掛けているのが緋嵩の存在だ。

目の前の、自分達をはるかに凌駕する存在が跳梁跋扈している日常を想像してしまった彼女達は、今更知った世界の姿は、どこが普通かもわからない何と曖昧で危ういものだったのだらうと思いつらされたのだった。

自分達こそが常識を逸脱する守護者と思いきや、そんなものは氷山の一角ですらないと自覚したときの世界の闇の深さは、彼女達全員を震えさせるには十分だらう。

そんな彼女達を、緋嵩だけが知らぬ顔で眺めている。

「……はああ」

かと思えば、呆れたような溜息を零し、かっくりと首を落としたのだった。

今回は今までのような周りに心情を示すものではなく、ただただ静かに息を吐いたため、俯いている他の面々の中で彼の動作に気付いたものはいない。

当然、彼が組んだ手の片方を懐に入れ、なにやらごそごそとコートの内側を漁っている事にも。

「おい那風」

懐を漁る仕草が止まると同時に、未だに俯いたままの那風に対して、ぶつきらばうな調子で緋嵩が話しかけた。

確かに不安が溢れて気落ちしているが、掛けられた声を無視する程に浸りきれているわけでもなかったらしい。 ややトーンの下がった声で俯いていた顔をゆっくりと上げ、

「なにンモガッ!？」

吹っ飛んだ。

厳密に言えば、恐ろしい速度で飛んできた何かの辺りに命中して勢いよく仰け反っただけなのだが、その一連の様子はまさに吹っ飛んだと形容するべき勢いだった。

ついでに言うと。 仰け反らされた被害者の方はその後、よろよろと二、三步あとずさった末に尻餅をついてしまい、現在色々と悶絶中である。

「……」

残りの落ち込み組も、呆然と目を点にして目の前で起こった状況に頭が追いつかない状態だ。

そんな彼らの表情に気が付いた緋嵩は、ゆっくりと見回すように眺める。

「……(にやり)」

びくうっ!？ と緋嵩の笑みを見た三人が同時に驚いた猫のよう

に背筋を浮かせると、彼から高速で顔を逸らす。未だ彼らの脳内は真っ白なままだったが、どうやら緋嵩の表情から不穏な何かを感じ取ってしまったらしい。

冷や汗をだらだら流す彼らの思考では完全にシリアスな不安など隅に追いやられ、レッドアラート付の疑問符が脳内をひたすら暴れまわるばかり。

「くっつ、あにふゅんほよ!!!」

すると、タイミングよく復活した那凧が涙目を三角になるほど吊り上げて怒鳴り散らした。が、その口には緋嵩から受けたであろう白い投擲物体を唾えたままなので、何とも迫力があるとは言い辛い。

「取り合えず、それ食ってから話したほうが良いんじゃないか？」

「よへいなおへわらっ!」

「余計なお世話だ」と言ったらしい那凧だったが、その割には口を激しく動かして物凄いスピードで口内の物体を咀嚼していく。

口の中に広がる皮と餡の絶妙なバランスが彼女に投げられたものの正体は饅頭だと言うことを気付かせたのだが、今はそんなこと大した問題ではない。

「もぐもぐもぐもぐもぐ　ごくんっ!　あんたねえ!　突然何てことするのよ!!!」

大口を開けて犬歯をむき出しに怒鳴る那凧に、まるで気圧される様子の無い緋嵩はつかつかと歩み寄ると、背を屈ませて彼女に視線を合わせる。また、彼女を指を指す形で突き出された人差し指が、額に触れるか否かと言ったところで彼女を威圧する。

とは言え、今回はこちらも負けてはいない。

「な、何よ」

多少の迫力負けはするものの、唇を尖らせて反抗の意思を見せる那凧に向かって、緋嵩が一言。

「悩んで落ち込んでる場合か、禍鏡一つ駆逐できない癖に」

情けない、とでも後に続きそうな流れに、聞いていた那凧がむっ

とした顔で言い返す。

「し、仕方ないじゃないっ、あんなこと言われたら誰だって不安にくらいなるわよ！」

「不安になるのはいいさ。でもな、それを表に出すな」

那凧の台詞は彼女の行動が無理も無いことを示すもつともな理由だったが、必ずしも正論が世の中を動かしているわけではない。

そもそも、正論が一つだと、誰が決めたと言うのか。それを示すかのように緋嵩の言葉が続く。

「俺達には現実に怯える前にやる必要があるだろ。今はただ、与えられた情報が自分達の行動や目的にどんな影響を及ぼすか、それだけを考えとけ。悩むのは禍鏡を潰してからでも遅くない」

成る程、こちらも間違っではない。

だがそれでも、彼女の不安を拭うには少々足りなかったようだ。

「でも、消されるぞって言ってたじゃない。そんな前置きされてたら素通りなんて出来ないよ」

彼の言葉にも正当性を感じながら返した言葉は、随分と情けない響きを含んだものに変わっていた。それは紛れも無い彼女の内面そのものであり、彼女が覚えたのが体面の前に捻じ伏せられる程の不安ではなかったことを如実に物語っている。

純粹な感情ほど単純で厄介な理由は無い。普通ならこんな弱音を吐かれた相手は困ったような表情の一つでも浮かべそうなものだ。

だと言うのに、緋嵩の顔にはあの表情が浮かんでいた。悪戯めいた、小憎たらしい笑みが。

「それは話を最後まで聞いてないそつちが悪い」

指を那凧の額から外して背を起こすと、那凧を見下ろす形でポケットに手を入れる。

「あつち関連の事はこれから徐々に教えていってやるから、それまでの間品物の売買を俺に任せろ。心配しなくても収入は全部そつちに流す」

そう、これこそが緋嵩の目的だった。

世界の暗部に染まりきっていない彼らは、手に入れたそちら側の品物を売買することで資金源の一部としていた。しかもどういった用途のものかも知らず、骨董品として、だ。

ロクに繋がりも無く、相手を見抜く目も持たない彼らがそんな事をしていれば、いずれその危険性を知るものに排除されかねない。下手をすれば、他の組織間でのトラブルの可能性だってあるのだ。禍鏡意外にも厄介事が増えるなど、誰にとっても良い筈が無かった。

それを防ぐために緋嵩が考えたのが、先の提案だ。

馬鹿正直に危険を訴えるよりも多少の不安や疑心暗鬼を与えた方が人は動きやすくなるものだと知っているが故の、確実性のみを求めた方法だった。

現に、那凧達も納得の意を示している。

「あ、うん。 そういうことなら、仕方ないよね、うん」

「よろしく願います」

「僕も同意するよ、君もだろ、轟」

「ああ、確かに、緋嵩に任せた方がよさそうだな」

いつの間にか那凧との話に耳を傾けていた三人からも、次々に声が上がった。

もし、危険だから自分に渡せ、等と言ったなら、決してこう簡単

にまとまりはしなかつただろう。その点で言えば、彼のやり方は綺麗ではないが、彼等の安全を守る最適の手段だったとも評価できるかもしれない。

それから話は、どうやって緋嵩に売買を任せるかに移った。

とりあえず彼女達の勉強も兼ねて臨時のバイトとして雇われる事に決まると、働く時間帯と基本的な注意事項の確認などが行われ、それも一段落した今は、全員で御国の入れた麦茶を啜っている所だった。

「さて、そろそろ俺は行くぞ」

手元の麦茶を飲み干した緋嵩が立ち上がり出口を向いた瞬間、那凧から待ったが掛けられる。

「あ、ねえ！」

「ん？」

何気なく首から上だけで振り返ると、随分と楽しげな笑みを浮かべる四人の姿が映った。

「今日さ、よかつたら皆で飲みに行かない？ ほら、歓迎会ってやつ」

どこか浮き足立ったような彼らの雰囲気にな得した緋嵩だったが、生憎と返ってきた返事はずれないもの。

「悪いな、今日はもう休ませてもらう」

「えゝ何よ、ノリ悪いなあ」

途端、あからさまに残念そうな顔でしよげる四人を見て、緋嵩の顔に苦笑が浮かぶ。

「今日は無理だが、明日ならいいぞ。それじゃ駄目か？」

緋嵩の苦笑を、どうやら断ったことに対する妥協と見たらしく、那凧達の顔に再び楽しげな雰囲気の流れ出す。

「よし、明日ね。ふふふ、覚悟しなさい」

「へえ、張り切ってるね店長」

高原の言葉に、那凧はテンションも高く、得意げに胸を張った。

「当然。明日は飲むわよ」

「おつ、久々にアレやるか？」

「えっ！？ アレですか……」

調子よく話す那凧と轟に、うわあ、と残念そうな目で緋嵩を見る御国。

彼女の様子が気になったのか、緋嵩が訝しげな顔で御国に話しかける。

「なあ、アレって？」

「なんていうか、その、頑張って下さいね緋嵩さん」

具体的には何も言わず言葉を濁した御国に、疑問符を頭に浮かべたような表情で緋嵩が首をかしげた。

「？ ああ」

とりあえず濁したということは深く問い詰めても仕方ないとばかりに、あっさり納得した緋嵩は、今度こそ別れを告げて部屋を出る。

「じゃあまたな」

「ああ、またな緋嵩」

「総一、明日逃げるんじゃないわよ」

「またね」

「さようなら」

襖を閉める瞬間、ふっと、緋嵩が何かを思い出したような表情になった。

「ああ、そうそう。明日の夜、禍鏡が出るぞ」

不意に、彼の口から飛び出した言葉。

まるでなんでもないことを伝えるような気安い雰囲気では告げられた情報に、残された四人も軽い返事だけで返す、

「……はあ!?」

訳はなかった。

さて、これにて第二部は終了とあいなりました。

次回からのカオスポットは、第三部(殲滅編)です！

いよいよバトル、これからバトル、待ちに待ったこの瞬間。

お楽しみに(＾ロ＾)ノ

キヨウランノウタゲ ｝ battle、 battle、 battle、 battle ｝ 「3

クリスマスですね。

聖夜ですああすばらしきかな……スミマセン、長らくお待たせ
いたしました（土下座

今回は一気に更新するべき内容かなと溜め込んでいました（<^>）
久々のバトル、どうぞご覧になって下さいまし。
それでは『カオスポット』、激動の戦編でございます。

「ねえ、いいじゃん。教えてよ、って言うか教えなさいよっ」
「……しつこい、知り合いの情報屋って言ってるだろ」

「そうじゃなくて！ 何処に言ったらその情報屋に会えるのかって聞いているのよ。それに、どうやって禍鏡の現れる場所を特定したわけ？」

「さあな」

夕闇の訪れる頃。それほど人通りの多くない都会の道に、駄々をこねるように喚く女の声が響く。

まるでこれから夜遊びにでも行くような明るい雰囲気を感じながら歩みを進めているのは、若い男女の集団だった。

メンバーは全部で五人。彼らの内、三人は何処にでも居る夏場の若者らしいラフな服装を纏っていたが、残る二人は微妙に通り過ぎる人々の視線を集める出立ちをしていた。

一人は、ポニーテールをした活発そうな印象の女性だ。

薄手の半袖シャツに太腿を露出させるほど短い黒革のパンツを履いているという所までは、特にこれと言った違和感はない。問題は、手には黒いゴム製の、しかも甲の辺りに銀板の光るグローブと、足には歩く度に鈍い金属音を立てる金属で覆われたブーツを身に付けているという点だった。

そこには誰かに見せるといふ事よりも、いやに実用性が重視しているような地味で重々しい本物の剣呑さが滲んでいる。着飾るとはまるでかけ離れたその異様な物々しさが、逆に見る人間の興味を引くらしい。

続くもう一人は、黒髪に眼鏡を掛けた知的そうな男性である。

やや古ぼけたジーンズにシャツと、こちらは彼女とは違って装備らしきものは見えないのだが、何と云ってもその上から羽織られている漆黒のロングコートの存在感が群を抜いていた。夏真っ盛り

の今の時期に長袖の、しかも厚手の革のコートでは、周囲に溶け込むのは無理があると言わざるを得ない。

しかもそんな二人が一緒になってじゃれあっていたのでは、まあ多少の視線を注がれても止む無しと言えるだろう。

「ねえ、なんだかんだでさ、あの二人って仲いいよね？」

「あ、やっぱり高原さんもそう思います？」

後ろの二人のやり取りを聞いていた高原が隣を歩く御国に囁きかけると、面白そうな顔で御国が頷き返した。

「そりゃあね。見なよ、完全に二人の世界作っちゃってるし」

ふい、と高原が視線を未だじゃれあう二人に向ける。

つられて御国と、後ろで興味深げにその会話を聞いていた轟も二人の方をチラツと見、三人が内緒話をするような内輪を作った。

「ですね」

「だな」

くすくすと笑いあう三人。

「ちよつと待ておい」

そんな楽しげな密談に、不意に割り込む声が上がった。

誰かと思えば、いつの間にかじゃれ合いから抜け出してきた緋嵩である。若干吊り上った眉とへの字に曲がった口元は、言うまでもなく不満げだ。

とは言え、完全に悪ふざけのスイッチが入った三人にそんな生半可な釘が刺さるはずも無し。

「はいはい、君の相手はこつちじゃなくてあつちだろ」

あつちと高原が緋嵩の矛先を切り返す。

勿論、端から見れば握り拳の一つでもぶち込んでやりたくなるよ
うな、それはそれは小憎らしい笑顔で。

「そうですね。店長とのお邪魔をするつもりはありませんか」
すっかり悪戯心が顔を出した御国も、便乗する形で那凧を見て。
そこで、何故か台詞が止まった。

彼女の視線の先には、

「……ぷしゅう」

緋嵩の後方で空気の抜けたような音を出して地面に伏す謎物体が

「って店長!？」

驚きの声を上げる御国に反応して、何事かと彼女の視線を追う高原と轟。当然その先には例のものがあり、二人もまた驚きの表情になる。

三人が目を離した一瞬の間に、どうやら事態は急変してしまったらしい。

しつこい追及の相手をするのが面倒になったのか、それとも何か気が障ったのか。とりあえず顔面を押さえて倒れている那凧の状態から推察するに、まず間違いなく緋嵩の宝刀が炸裂したのだろう。

「で？ 何か言い残すことは？」

ひどく軽い、冗談を言っているような口調とは裏腹に、目だけはしっかり笑っていない緋嵩の態度を見て、何かを感じ取った三人の背筋が急にぴんと伸びる。

「いや、あ、あはは」

「おっと、電話だ」

「うおっ、急に腹が!」

彼の据わった目から三者三様にそっぽを向いて遠ざかろうとするが、当然そんな真似が許されるはずもなし。

「ふふふふふ」

ばきばきと指を鳴らしながら、狩人がじりじりと三人に近づいていく。

「ちょ、緋嵩さ、じよ、冗談じゃないですか、ねっ？」

「ふふふふふ」

説得、失敗。

「もしもし、うん。明日の夜？ 空いてる……よ？」

「ふふふふふ」

誤魔化しは、しかし効果が無かった。

「ト、トイレは……」

「ふふふふ」

逃げられない。

「~~~~~!?!?」「」

哀れ幾重にも重なる声の無い悲鳴の中、何かがめり込むのを連想させる鈍い音がきつちり三発分、夜空に響いたのだった……

「……つたく」

耐え難い痛みに悶える四人の中心で、呆れ顔を浮かべた緋嵩がほこりを落とすように両手をぱんぱんと二、三度叩く。

すると、ふとその眉間に僅かなしわが刻まれた。

「ん？」

突然の不快感に、彼は一体なんだとばかりに少しだけ顔を持ち上げると、鼻を上に向けて様子を探りだした。その様子は、どこかしら動物が臭いを探っているようにも見えなくもない。

ゆつくりと首を回し細めた目で辺りを確認する彼の意識は、近場ではなくどこか遠くに向かって焦点が定められているようで、少なくとも今更周りの道行く人々の好奇の視線に気がついた、という風には見えなかった。

さて、文字通りそんな鼻持ちならない状況の中、彼の足元では。

「うっ、いつつたあゝ。 なんなのよお」

「これは……きついね」

「うっ、一瞬鼻が埋まったかと思いました」

「ぶしゅっ」

どうやらもぞもぞと蠢めいていた面々が、ようやく復活してきた所らしかった。とは言ってもまだ約一名、未だに口から半分魂を覗かせている者がいるが。

「なんかさ。あたしの顔、前より平べったくなつてない？」

「私も、なんだか顔がへこんじゃった気がします」

顔をさすりながら、地べたに座り込んだままうなだれる女性陣。

「大体総一は手が早すぎなのよ、ことあることにがんがんに、乙女の顔を何だと思つてんのよあいつはっ」

苦々しげに愚痴をこぼす那風。

最初の出会いからこつち、会うたびに最低一度は首から上に何かを受けている彼女としては、どうにも扱いに納得がいかないらしい。まあ実際、それを訴えたところで帰ってくるのは精々が小馬鹿にしたような溜息か、無慈悲無遠慮の一撃だというのは言うまでもないことなので、とても面と向かつて言う度胸は無いのだが。

「緋嵩さん、容赦ないですもんね」

「ほんと、ぜつったい彼女いないわよ。あの野蛮人」

うんうんと頷きあう那風と御国。

そんな中、こういう時に誰よりも早く反応を示すはずの高原が、珍しく会話に便乗する様子を見せていなかった。彼はただじつと不安げな顔でどこかを見つめている。

「ねえ」

尚も覚めやらぬ調子でばやく二人に対し、それまで黙っていた高原が急に真面目な雰囲気で口を開いた。

「思いもよらず耳に入ったその場違いな声色に、思わず振り向く二人。」

「轟の魂、なんか上がったっていつてないかい？」

「「……………え、？」」

言葉の意味を理解するや否や、音が立つような勢いで二人が轟のほうを振り向くと。

そこには高原の言葉通り、半分と言わず九割がた魂を抜け出している轟の姿が。しかもなにやら本体の方は穏やかな表情を浮かべているではないか。

まるでこれから、至上の楽園に導かれるような

「ストーリーップ!!」

「おぶうるっ!!!!?」

色々駄々漏らしている轟を目にした瞬間。

那凧が神速の勢いで御霊の首らしき場所を掴んで轟の口に突っ込んだ。 というよりぶち込んだ、痛烈に奥まで。

「うえほっ! ぶおっほ! おええええっ!!」

途端に幸せそうだった轟の顔は一転し、豪快にむせながらよだれと嗚咽交じりで地面に倒れ伏す。 ある意味天国から地獄と言っても、決して過言ではないだろう。

「うわ、汚」

一方那凧はというと。 二度の惨劇で悶える轟などまるでそ知らぬ顔で、先の行動で手についてしまった轟汁を彼自身のズボンにこすり付けている真っ最中だ。

また、その始終を参加するでもなく見守っていただけの二人に至っては、もはやあらゆる意味で状況についていけず、ぼかんとした間抜け顔を浮かべている始末である。

「今一瞬、肘まで埋まりませんでした?」

「いや、流石にそれはあり得ないでしょ……たぶん?」

思考が真っ白というのを全面に押し出しながら、視線を二人から動かさずどこかぼんやりとした口調で会話する高原と御国。

「お前ら、緊張感が無いにも程があるだろ」

と、そこへ色々と感情を抑えているような緋嵩の声が重なった。

眉間の皺を揉みながら那凧達へと近づいていく彼の表情は、当然ながらどこか苦々しげである。

「ん? どしたの総一? 頭痛?」

「お、俺には何もなしかな凧、ぐふっ」

きよとんとした表情で話しかける那凧と、まだ回復し切れていない轟の前まで来た緋嵩は、ため息、かどろかは判別できないが、とにかく肺の中を空にするように、一度だけ息を吐き出した。

「もういいから、ふざけるのはその辺にしとけ。 ……はあ、向こ

うはとづくに準備が出来てるってのに」

呆れ顔にいつものような皮肉交じりの口調。その自然さに、一瞬緋嵩以外の人間の間で言われた内容に理解が追いつくまでの空虚な沈黙が流れる。

「向こう、つて、え？　ちよ、そんな気配無かったわよっ！？」

ようやくその言葉の意味に気付いた途端、驚きのままに叫んだ那凧が大慌てでポケットを漁りだした。

数秒と掛からず飛び出すようにポケットから姿を現したのは、直径六センチ程度の透き通った球体だ。その一見すれば宝石のように見えなくも無いそれは、透明なゴムにも似た不思議な質感と光沢を放っている。

見れば、高原、轟、御国の三人も彼女と同じものをそれぞれ取り出していた。

まるで何かの装飾品の一部のようなその球体を、緋嵩以外の面々が至極真剣な様子でじいつと見つめるが、どれも特に変化があるようには見られない。

「ほらやっぱり。　はあ、もう驚かさないでよ」

何の変哲もない球体をしばし見つめて、やがてほっとしたように那凧が緋嵩を睨み付けると、残りのメンバーも気を緩めた様子で身体から力を抜いた。

途端球体が光りだす。

「わっ！？」

「へえ、そんなものまで持ってたのか」

あまりのタイミングのよさに驚いて球体を落としそうになった那凧をよそに、緋嵩は観察するような眼でじっくりとそれを捉えていた。

中心からやや上よりの部分から、まるで蛍のような光を滲ませる球体。　ただし、その色は緑ではなく、淡い紫色。

緋嵩の感じた不快感とこの球体の反応を照らし合わせるに、この球体は恐らく映世が発動されると同時に反応するといったような、

いわゆる探知機の役割を果たしているのだろう。

「境界発動に連動して反応、ね。色々と仕組みが気になるが、まあ、今は後回しだな」

試案顔で見ていた緋嵩が納得したような声を上げると、それに被せるようにもう一言だけ呟く。

「行くぞ」

前の台詞から、たった数秒にも満たない時間で発せられた筈の言葉。なのに、それはまるで別人の言葉のように重い響きを辺りに流した。

「分かつてるっ！」

気合十分な那風の声。

その声が耳に入りきる前に、既にその場にいた全員が動き出していった。

映世の発動が確認された途端、彼らのスピードは今までのような探索めいたものとは打って変わって、全力疾走へと切り替わっていた。

彼らの足に淀みはなく、建物が次々と後ろへ流れていく。その

視線の先にあるのは、緋嵩意外は全員がああ球体だ。

光が右へ寄れば右に、左に寄れば左に、まるで臭いをたどる犬のように、道を進み路地を抜け建物の隙間を縫いながら、ただひたすら光の指し示す方へと突き進む。

また、彼らが進むにつれて、球体の光は徐々にその大きさを増していた。

「まさか、ホントに現れるなんてね」

手元に視線を合わせたまま、那風が笑う。

楽しい、と言うよりも、悔しさや後悔、嫉妬、そういった感情が混ざり合ったような、苦い笑いだった。

「なんだ、信じてなかったのか？」

てっきり独り言のつもりだった台詞に思いもよらず返事が返され、那風が意外そうな顔をして声の主を確かめる。

全員が球体に意識を集中させ全力疾走している中、強化の能力を有する那凧だけに生まれる余裕。

自分以外に声を出せるものなど居ないと思っていた彼女だったが、視線を向けた瞬間、彼女の目に意地の悪そうな笑顔を浮かべる規格外の姿が映った。

彼の姿を捉えた那凧が、もう一度笑った。確かに目の前のこれなら、他の人間には無理なことでも笑ってやってのけそうだ、と言わんばかりに。

「そりゃあね。今まで苦労して見つけてたのがこんなにあっさり出来るなんて、はいそうですかって信じられると思う?」

先ほどとは違い、まるで友人を責めるような悪戯めいた顔で那凧が尋ねかける。

「ま、そりゃそうか」

至極尤もな彼女の言葉に、緋嵩は走りながら少し考えるような動作をとると、納得したように相槌を打った。

束の間、足音と誰かの息遣いだけが彼らの間を支配する。

「もうちょっと早く、総一を仲間に出てたらな」

今までの声より尚小さく、ぽつりと漏れ出た本音。

それは、これから殺し合いをする人間の言葉とは思えない、だが、何の誤魔化しもない言葉だった。

戦いの前の最後の空白。おそらくは彼女にとって、緊張感と高揚感、憎悪と殺意が絡まりあって溢れ出した自分の心中を、誰にも聞かれず吐露できる唯一の瞬間だったのだろう。

そこへ何の苦もなく踏み込めてしまったが故に、思いがけず緋嵩は無防備に曝け出された彼女の心中を見ることになってしまったのだ。

この上なく扱いづらい、儂く脆い人間であるが故に生まれる欲望。だが、彼はそんな那凧の言葉を聞くと、

「ばかたれ」

呆れ顔であっさりと一蹴した。それも那凧のほうを見もしない

で。

「ばっ!? ちょっと、そーゆーこと言う!？」

慰めを期待したわけではない。が、まさか罵倒されるなど微塵も考えていなかった彼女としては、怒りなのか悲しみなのか良く分からない感情が噴き出すのを堪えきれず、緋嵩に向かって声を荒げるばかり。

その見るからに不満爆発な顔に、あからさまに白けた彼の視線だけが向けられた。

「仲間にするのが遅れた、じゃないだろ。俺を仲間にした、だろっが」

「……?」

面倒そうな、だがしっかりと言い聞かせるように発せられたその言葉に、いまいち要領が掴めていない様子的那凧が、眉間に皺を寄せたまま緋嵩を見返す。

当然、返ってくるのは、いつもの人を小馬鹿にしたような溜息。それと、

「あんたらは俺を仲間に来たことで今後起こり得る禍鏡の被害を減らすことができる。けどな、そもそも俺を仲間に取り入れられたって言うこと自体が、九死に一生だったってことを忘れるな」

気遣いか、それともただの傲慢か。

とても慰めには聞こえない緋嵩の言葉は少なくとも那凧の耳には厳しく響いたが、彼の目に灯る淡い紅色だけは、穏やかな色合いを浮かべたまま彼女を捉えていた。

「あの瞬間から遅くても、早くても、俺はあんたらの仲間にはならなかった。下弦と晦の間を漂うあの一夜だったからこそ、あんたらは生き残れたし、次の日に俺は話を聞く気になったんだ。いいか、自分の不手際に囚われる前に、自分がどれだけのことを成し遂げられたのかを考える。その上に何を成し遂げられるのかを考える。後ろにばかり目をやってると、出来ることさえ見えなくなるぞ」

すうっと、一息。

間を計るように呼吸をはさむと、緋嵩は那凧のほうへ向き直った。「俺を仲間にしたお前に、何ができる？」

真摯な響きを持った、緋嵩の問い。からかうでも莫迦にするでもなく、ただの問いかけとして発せられたその言葉に、那凧は息を呑んだ。

慰めるでも、励ますでもない。ただ事実と正論をぶつけただけの、言われた方からすれば叱咤に近い言葉だったろう。

それでも、

「言ってくれるじゃない」

いや、だからこそか。彼女のような人間にとって、それらはこれ以上ない起爆剤へと変わる。

「そこまで偉そうなこと言ったんだから、足手まといなんかになったらぶっ飛ばすからね」

「上等だ」

後悔を激情で塗りつぶす。

道を振り返って後悔するよりも、先にある障害に突き進むことを決めた那凧の顔は、清々しさの溢れる不敵な笑みを浮かべていた。

同時に、彼の顔にもいつもの皮肉げな笑みが浮かんでいる。

互いに互いを見つめ、にっと口角を持ち上げた二人の内、一足早くその先にある異物を捉えたのは緋嵩の方。

「そろそろ奴らの結界に当たるぞ」

視線を先に向け、遠くを見つめるように呟いた彼の顔は鋭い。

「ん」

言葉、というより音で返事をした那凧の顔も、既に戦人のそれに変わっていた。

彼女はおもむろにポケットから携帯電話を取り出すと、慣れた動作で操作していく。

その刹那。

音が、消えた。

「……入りました」

映世に踏み込んだ瞬間、御国の声を合図にして、それまで走っていた全員の足が止まった。

それぞれの手に握られた球体が今や全体が紫色に染まりきっているのを見るに、もはや探知機としての役目は終えたらしい。

「なるほどな、携帯に連動させて発動させる訳か。発動時間は？」

「三時間と、少し。それ以上経つと禍鏡の結界に取り込まれて閉じ込められるか、弾き出されて禍鏡が自分で撤退するのを指をくわえて待つことになるかのどっちかよ」

玉響の発動の仕組みに感心をみせながら、固い表情は崩さずに視線をばら撒いて辺りを探る緋嵩に、同じような動作で警戒する那凧が返した。

「どうする？ 映世が広がる気配を見せなかったってことはまだ誰も引き込んでないみたいだけど、動くまで待つかい？」

「おいおい、それで時間切れなんてなったら洒落にならんぞ。こういう時は真ん中にいるって相場が決まってるもんだ」

互いに逆方向を向いた高原と轟の提案に、束の間の沈黙が流れる。

「いいわ、あたしが速度強化で」

「いや、必要ない」

偵察を買って出た那凧に被せるように、緋嵩の否定が静かに響いた。

「こつちだ、遅れるなよ」

短い言葉と共に、彼の身体が流れるようにコンクリートの上を駆けていく。

残された四人も彼が動き出した瞬間こそ出遅れたものの、その言葉の意味を理解するや、次々にその後へと続いて行った。

そして三つ目の交差点を左へと曲がったとき。突然彼が後ろに並ぶ面々を抑えるように両手を広げてこれ以上の進行を遮った。

「ちよっ！？」

「シッ！」

細く鋭い声で発せられた全てを遮るかのようなその音に、那凧を含めた全員が即座に口を結び動作を消した。

「この先だ」

重い響きは最低限の範囲だけに響くよう調節され、那凧達の間だけを通り抜ける。

彼らの視線の先にあるのは、石造りの囲いと身を隠すには丁度良い人工林が生い茂る場所。

「公園、か。こんなところで何してやがる」

「すぐに分かるわよ」

「あんたらは二人一組で左右に散れ、俺が囿になって気を引く」

緋膏の提案に四人が揃って頷くと、那凧は御国、高原は轟と組を作って、それぞれ林の中へと消えて行った。

四人が消え、晦のためか殆ど光も差さない夜闇の中、輪郭しかみえない影だけが、彼がそこにいるのだということだけを僅かに示す。

「……………」

コートのポケットからおもむろに取り出したのは、啞えた動作とその形状からして、恐らく煙草だろう。

次いで金属を弾く音と共に、ぼんやりとしたオレンジの光が灯る。

「ふう……………」

まるでため息のように落とされた紫煙を身に纏いながら、ゆっくりと、彼の足が前に動いた。

遊具も、街灯も、地面さえも飲み込んで、ただそこにある闇色。

日の光の加護から離れ、月の光も失われかかったにも関わらず、不思議と誘い込まれるようなその場所に入る彼の姿は、まるで溶けるように、ずぶずぶと、飲み込まれていくように、消えてゆく。

「チツ。 全く、うるさい奴等よ」

煙草の光だけが彼の居場所を示す中、忌々しげに呟いたのは、果たして緋嵩だっただろうか。

歩いているのに、まるで進んでいるという感覚が無い。

無機質な黒色の中を、ただ歩く真似だけしてみせる。 不気味というよりも、世界が狂ってしまったかのような錯覚を与える光景だ。だが、そこを行く彼の足に、淀みは無い。

一寸先さえも見えない闇、進めど進めど到達しない矛盾。 考えれば考えるほど説明のつかない現象だらけの中を、何食わぬ顔でひたすら歩く。

「そろそろ、良いか」

入るときに付けたはずの煙草は、既に三分の一ほどの長さになっていた。

どう言うわけか、ここへ来て緋嵩の機嫌は随分と荒立っているらしい。

いつものように億劫そうな言葉の中に込められた、この上ない苛立ち。 それを隠そうともせず、彼は唐突に持っていた煙草を手中に収め握り潰した。

視界も、聴覚も完全に役に立たなくなった空間に、人肉の焼けるすえた臭いだけが僅かに漂った。

……じわり、と。

何処に何がいるかも見えない黒一色に浮かぶ、点。

赤く、紅い。

まさに血のような、生々しくおぞましい一対の光が、灯った。

「ふっ！！」

刹那。

一閃、とでも言うべきか。それまで一色に閉ざされていた空間が、まるで絹を引き裂くような耳障りな音と共に引き裂け、消える。彼の先にあるのは、僅かな月光に照らされる金属製の遊具か。

それとも、闇を照らす人工の光か。どちらも否だ。

あったのは、数えるのも億劫になるほどの、金色に光る無数の点きしきし、がちがちと。生々しい駆動音を至る所から上げるそれらは、目の前に現れた餌に歓喜しひしめき合い涎を垂らす、おぞましい化け物の群れに他ならなかった。

そして、彼等の目は今、緋嵩ただ一人に注がれている。

隙間など無い。限りなど無い。視界の全てを支配する気が狂いそうな数の目、目、目、目。姿を闇に溶かす彼等の、その毒々しい眼球だけが、そこに居るといふ唯一にして最大の証明。

煌々と滲む点の中心、周りに巢食うそれらのゆづに十倍はあろうかという大きさの球体に向かって、緋嵩の顔が皮肉気に、凶暴に、狂おしく、歪む。

「獲物を誘い込んで衰弱させて餓鬼共に狩らせ、自分は高見の見物か。ククツ、外見通り蟲という訳だ」

彼の侮蔑と同時に、不意に差した月光が彼の者の姿を淡く照らし出す。

そこに浮かぶは、果たして、蟻か。

二本足、四本足、六本足。

節足、軟体、脊椎。

数多の種が混在し混じりあう集合体、その中心に規格外の巨軀を構えているのは、まるで女王蟻とでも言うべき様相のバケモノだった。

ただし、部分部分が蟻に近しいと言っただけで、蟻がそのまま巨大化したというわけではない。

五メートル近い高さの鉄色の肉塊。その上部に生える上半身と頭部こそ蟻そのものだが、そこから生える異常に長い四本の前腕の形状は間違いなく人間のそれだ。加え、肉塊の長さはゆうに十メートルに達し、所々から粘着質な溶液を滴らせる人の足と思しき脚部を多数生やしている。

が、やはり一番こちらの興味を引くのは、その肉塊が一定感覚で半透明な円状の膜を貼り付けているということだろう。中には様々な形態の、だが間違いなく何かが息衝いている気配がある。

つまりは、繁殖しているということなのだろう。

それは、今この場所にいる化け物のすべて、いや、ともすれば那凧達が戦ったものも含め、全てがこの固体から産み出されたという印象を見た者の脳髄に焼き付ける光景に他ならない。

彼の目の前にいるのは、紛れもない女王だった。

そのとき不意に、ガラスをこすり合わせたような不快音が那凧たちの耳を打つ。

見れば彼の視界の後方、巨軀の端辺り。

今この瞬間にも、薄紫の体液に塗れた化け物が、また一匹。女王の体内からずるりと糸を引きながら這い出して、歓喜の産声を上げたではないか。

「！！！」

咆哮。

何百何万の音をめちゃくちゃに混ぜ合わせたような、声としての機能などまるで考えていない不協和音が女王から吐き出され、これでもかと言わんばかりに辺りに響く。

刹那、今まで様子を伺うばかりだった化け物が全方位から一斉に緋嵩に襲い掛った。

口々に粘着質な音や鳥のような甲高い音といった咆哮で自身を彩りながら、自らの半分ほどの大きさの人間を我先にと埋め尽くし切

り刻み貪り喰らう。

それはまるで、生きた化け物で塗り固められた異形の塔。何処から見ても憐れな獲物の姿など微塵も覗かせはしない絶命のオブジエ。

さしもの緋嵩と言えど、どうやら一度にこれだけの猛襲を防ぐことは敵わなかったらしい。

「――！」
我が子達が見事狩りを成功させた光景に、かの女王は人の子程もある眼球を細め、さも満足そうに天に向かって、今一度高々と咆哮した。

そして、気付く。

自分と同じ高さ、文字通り目前に迫る、人間の姿に。

「もおらったあああああああ！！！！」

彼女の存在を器官が理解するよりも早く、振りかぶられたその腕が肉を引きちぎるような粘ついた音を響かせて深々と女王の眉間に突き刺る。

勢いのままに刺し込まれた腕が最奥とらしい位置に到達した瞬間、プラスチックを砕いたような硬質な感触が那尻の掌に伝わった。

同時に、人間と同じ色のおびただしい鮮血が腕の隙間から噴き荒れる。

「――！?!?!?」

まるで予想していなかった襲撃にまんまと身を許してしまった女王が、痛みに叫びながら反射的に彼女を振り落とそうと勢いよく首を動かした。

「まだ終わらないよ！！」

響く男の声。

裂帛の気合と確かな敵意を乗せたその宣言と共に、女王の真横の草むらから二丁拳銃を構えた高原が躍り出る。

だが、女王は彼の姿を捉えることは愚か、恐らくは彼の言葉を最後まで聞くことさえも叶わなかっただろう。

何故なら。

彼の声が発せられた時にはもう、女王は首から頭に狙いを定められた数十発の弾丸に囲まれていたのだから。

着弾。 いや、それはもはや爆散と言ってもいい。

あらゆる方向から襲い掛かった秒速四百メートルを超える大口径の銃弾は、瞬く間に獲物の内部で凶暴に荒れ狂い、その端々に至るまでをこれ以上無いまでに掻き回し引きちぎる。 また、そうやって女王が体液を内臓をぶちまけて撒き散らしている間にも銃撃は留まることを知らず、それぞれの肢の付け根を確実に砕き貫いていった。

女王が成す術もなく次々と荒れ狂う銃弾に蹂躪されていく中で、四肢を装甲で固めた最初の襲撃者は、ようやく鮮血と肉片に塗れた腕を引き抜く。

まるで魔法のように彼女の周辺だけを避ける銃弾は、彼女を彩るように血と肉の花火を絶え間なく咲かしていた。

彼女は、ゆっくりと身を起こすと、もはやただの肉山と化しつつある女王の頭部を無造作に踏みつけ、そして 跳んだ。

銃撃が、終わる。

腕も頭も何もかも完膚なきまでに破壊された女王が、僅かに面影を残す上半身を、ゆっくりと重力に任せて地面に倒れこませた。

だが、自分達の産みの親の哀れな成れの果てに感情を揺らすものはおろか、目を向けるものさえこの場にはいない。

当然だ。

異形たちの前には、今まさに彼らの元へと降り立たんとしている、最強の敵がいるのだから。

空からの僅かな月光に彩られ崩れ落ちる巨躯を背景にした彼女の姿は、まるで死と闇を統べる女神の如く。 その場にいる全ての異形の意識を視線をその身に集め、最高の標的としての価値を惜しげ

もなく彼らに示す。

だからこそ、彼らは気付かない。

彼女の遙か下方、自分達により近い場所で響く、同胞の断末魔に。

辿ってみれば、そこにあるのは、かつて異形の塔を誇ったものの達の成れの果て。火種のように内部に所々赤みを残した炭の塊が蒸気の上がる耳障りな音を立てて燻り、炭になりきれなかったものは液状となってその周りで今もなお溶岩のように沸騰していた。

唯一、

「成る程。今がお前の能力というわけか」

死骸の中心で佇む緋嵩の姿だけが、数秒前と何一つ変わっていない光景としてその場に残っていた。

彼の視線の先には、何かしたとは思えない距離で穏やかな表情を浮かべる御国が佇んでいる。

「おい、お前を助けた俺には何も無しか？」

責めるような半眼をくれながら文句をつけたのは、緋嵩のすぐ隣で腕を組む轟だ。

どうやら何らかの手段で緋嵩が生き残っているうちに、彼に群がる化け物を屠つたのは轟に間違いないらしい。だが、緋嵩はまるでそんなことなど眼中に無いと言わんばかりに、遠くへと目を向けていた。そして小さな舌打ちを一つ。

「三秒でいい、もう一度今のを俺の前に張れるか？」

視線を戻した彼の口から出てきたのは、感謝を表す言葉どころかまるで試すような口調のそれだった。

しかも、相手は轟ではなく、御国に向かって。

「任せてください」

互いに顔を合わせ、一人は頷き、一人は口角を僅かに上げる。

完全に存在を無視される中、二人の間でなにやら意味ありげな会話が成立したことだけはなんとか理解できた轟が、痺れを切らしたように緋嵩に向かって腕を伸ばした。

「おい、ちったあ俺の話も」

「合わせるぞ。俺は中、お前は外、奴等が気付く前に仕掛ける」
「は？ あ、お、おう」

あれほどの襲撃に加えて中核への強襲も成功した現状、緋嵩のほうに意識を向けている固体は皆無と言っているいい状況だった。更に、前方では那凧と高原が残った残党を捌いている最中でもある。

追い討ちをかけるには絶好の機会に返された、なんとも間の抜けた轟の返事っぷりに、緋嵩の眉間に皺が刻まれた。

「気を抜くな。まだ終わってないぞ」

「ちっ、分あかつてるよ」

まるで先の自分を咎めるような緋嵩の台詞に、轟ががしがしを頭を掻いて、そして音も無く構えを取る。

再び臨戦態勢に立ち戻ったその姿に緋嵩の顔が一瞬優しげな笑みを作るが、それもすぐに、戦意に埋もれて消えてしまった。

「シッ！」

気合を込めた声を残して、緋嵩の身体が異形の蠢く肉林へと一直線に駆けてゆく。

目に見えないというレベルではないものの、轟が目で追ったとき、彼の姿はもはや最前列のそれとの距離は一メートルも無かった。

当然、そこまで迫られて相手が気付かないはずも無い。

「御国っ！！！」

迫り来る緋嵩の姿に相手が気付くのと時を同じく、緋嵩が短く御国を呼ぶ。

声を受けた彼女はと言えば、どういうわけか先程の位置から一歩たりとも動いていないではないか。

今の状態の緋嵩からすれば、それは何をすることも手遅れの距離だといえよう。まして彼女は飛び道具どころか、目立った武装さえしていないのである。

だが、戦略的に絶望的な配置に浮かぶ彼女の表情は軽く、その腕の一つは何を意味するのか、緋嵩を視界から隠すように掌が広げら

「ふんっ!!」

熱したフライパンに水を注いだような音を響かせながら突き刺した腕の勢いを殺さずに、そのまま上へスライド。

結果、貫かれた禍鏡は断末魔を残す間もなく、Yの字に引き裂かれて絶命した。

「御国の障壁を使って突っ込むってか。一步間違えたら化け物共に押し潰されるぞ」

物騒な台詞とは裏腹に、その声に滲む色は心配よりも呆れに近い。まるでとんでもない馬鹿者を見たような表情で呟いた轟が、すぐ傍で弾き飛ばされた衝撃に悶える禍鏡の首を蹴り飛ばした。

程なくして、ようやく立ち上げられるまでに回復してきた数体の異形が轟を標的として認識しだすと、彼も犬歯をむき出しにした凶悪な笑顔と共に、眼前の相手への敵意を露わにする。

「はっ。なるほどな、貴様らが俺達のノルマと言うわけか……上等だ」

群れから離され、自分達から扇状に展開する配置になった禍鏡の前に、轟が自らを鼓舞するように言い放つ。俺達、と言う彼の言葉通り、彼の隣にはいつの間にも移動してきたのか、既に臨戦態勢を整えた御国の姿があった。

「援護は任せたぜ、御国!!」

「はいっ!!」

御国が返事を返した瞬間。まるでそれを合図にしたかのように、周りにいた禍鏡が一斉に二人へと跳びかかっていった。

一方、轟達が禍鏡と真正面から激突している頃。

別の場所では今まさに、全身を穴だらけにされた人型の禍鏡が崩れ落ちる所だった。倒れた先には、背中合わせの格好で周囲を取り巻く禍鏡を警戒する、那凧と高原の姿がある。

「はあ、はあ。ったく、どんだけいんのよ」

「はあ、ははっ、とりあえず見た感じでは、まだまだ尽きる気配は無いね」

ばやきながら汗を軽く拭う那凧に、銃のマガジンを再装填した高原が軽口を返す。

当初の予定では既に轟たちと合流しているはずだった。

あの軍勢を前にして那凧が立てた筋書きのポイントは二つ。

一つは敵の頭を確実に仕留めると同時に、取り巻きの注目を一点に集めて他の仲間が奇襲する隙を作ること。もう一つは、後は自分達が押し迫る禍鏡を手当たり次第に殲滅して奇襲している仲間の元へと突破口を開くことだ。

成功すれば、残るは母体を潰された拳句奇襲に混乱する烏合の衆、と言っわけである。

彼女らしい大胆な計画であり、即興のものとしては上出来の部類だろう。

事実、途中まで上手くいってもいたのだが、どうやら相手は彼女が思っているより群れとしての意識がしっかりしていたようだ。

禍鏡達は早々に個で攻めることを止めると、群れとしての攻め、いわゆる持久戦の構えに移ったのである。

今まで単体で行動していた禍鏡達ばかり相手にしていた経験から、つきり集団としての協調性に欠けると考えていた那凧はあっさり逃げ道を封鎖され、消耗戦の形に陥ってしまったのだ。

慌ててサポートに入った高原も巻き込んで、二人は現在、禍鏡のど真ん中で立ち往生という有様だ。

加えて、不幸にも崩れ落ちた女王が壁のように立ち塞がる形になり、轟達が居るであろう場所は完全に二人の視界から遮られて連携を取るには絶望的な位置。

応援は期待できず、囷となって突入した自分たちの周囲には、何重にも群がりながら隙間のない壁を作る敵、敵、敵。

愚痴の一つでもこぼしたくなるというものだろう。

「てつきり生まれたばかりで手慣れてないと思ったのに、やってくれるじゃない。総一は役に立たないし、もっと本気出さないよねあいつっ」

「でも、彼が注意を引いてくれたおかげで供給源は絶てたんだし、これ以上増えることが無いのはありがたいね、つと!!」

言い終わるや否や、三方から勢いよく禍鏡が飛び出した。

うち一体を近づくと前に蜂の巣にすると、高原は側面から突き出された槍のような前足を僅かにサイドステップして躲す。そこにカウターの要領で繰り出された那凧のハイキックが相手の頭蓋を蹴り砕くと、最後の一匹が那凧の身体へ大人の腕ほどもある牙を突きたてようと大口を開け、

「ッ!？」

そのまま何発もの銃弾を叩き込まれて、顔面を花火のように破裂させる。

「はっ、間一ぱ、つつ!」

息つく暇も無く正面から新たに飛び込んできた禍鏡の顔面へ語尾に合わせて裏拳を叩き込むと、那凧が周囲への警戒そのままに再び態勢を元へと戻した。

「はあ、はあ、はあ」

「はあ、ふう、つはあ」

じり貧、という言葉が二人の脳裏に浮かぶ。

先ほどの攻防で仕留めたのは、僅かに四体。

何度戦っても、周りをとり囲んでいる集団には衰える気配がまる見えなかった。

だと言うのも、獲物をテリトリーから逃がさずに時間を掛けて確実に仕留める戦法に移ったことで那凧達に一度に向けられる戦力が小出しになってしまったからである。

定期的にあらゆる角度から差し向けられる刺客に警戒を解くことは許されず、距離をとられたことで必然的に警戒の範囲さえも広げられた今の状況は、乱戦よりも遙かに二人の精神を消耗させていった。

今の調子でいけばそう遠くない未来、絶えず張りつめることを強要された緊張感の限界を迎え、必ずどこかでほつれを生んでしまう

だろう。

そうなつてしまつたら最後。後に残るのはどう転んでも、無残な最後しか起こり得ない。

思考は絶えず苛まれ、疲労と緊張を滲ませながらも突破口を探すその顔には濃い焦燥が張り付いていた。

「は、あ。どうする？」

「どうするつて、言われても、どうしようもないんじゃないかな。流石に」

一点突破を図ればまず間違ひなく他方から攻め入られる、かと言つて周りの禍鏡全てを一気にどうにかするだけの手札も彼らには残つていない。

僅かな動作で高原が視線を自身の腰に落とすと、ベルトに差さつている替えのマガジンは予想通りどちらも残り一つだけ。

(くそつ、せめてもう一セットあれば)

悔しげな舌打ちが、彼の口から漏れた。

だが、尚も不運は続く。

獲物達の疲労を感じ取つたのか、あるうことが異形達の輪が徐々にその大きさを縮め始めてしまつたのである。

「ね。一瞬でいいから、あいつら全部の動き、止められない？」

じりじりと狭まる輪の中で、那風が高原に反対方向を向きながら話しかけてきた。

「出来ない事もないけど、次は無いかな」

「お願い」

額の汗を拭おうともせずただ威嚇の銃口を向けるだけの高原に対して、那風がなにやら決意めいた表情で短く頷いた。

「イチかバチか、飛び越えてみる」

飛び出したのは、思った以上に簡潔な答え。だが、高原にはそれだけで十分だったようだ。

聞いた瞬間にこそ彼も目を見開いたものの、すぐにその顔を歪めた。

呆れたような、しかし楽しげな。

笑みの形に、だ。

「失敗したら、僕ら骨も残らないね」

「じゃあ、やめる？」

「まさか。それくらいのリスクがないと面白くないからね」

景気づけに軽口を叩き合うと、もはや一メートルと無いほどにまで近づいた禍鏡の群れの中で、二人が小気味いい笑みを浮かべた。

どうやら起死回生の策は、高原が全方向に向かつて牽制している間に那凧が高原ごと輪の外へと飛び出す方針らしい。

もっとも、囲んでいる敵の総数も分らずに、更には人一人抱えたままでは、いかに跳躍力を強化した那凧と言えども大した成功率は期待できまい。その上、禍鏡の中に跳躍や飛び道具に優れたものがないとも限らないのだ。

もし失敗すれば、ピラニアの水槽にえさを放り入れるが如く、なす術も無く異形に貪り尽くされることになるだろう。

が、このまま全方位からの襲撃を受け続けたところで、結果はさして変わらない。

二人の顔に、もはや迷いは感じられなかった。

「いくよ高原っ！」

那凧の合図と共に、高原が使いかけのマガジンを捨てて新しいものへと付け替えた。

途端、何かをする気配を感じ取ったのか、禍鏡達が二人に向かって一斉に牙を向く。

「しまっ」

失敗。

牽制する前に攻め込まれてしまったては、もはや銃を撃つたところで先頭に立つ数体に手傷を負わせるぐらいしか出来はしない。

加えて、今の彼らにはもう乱戦をする体力も精神も、武器も無いのだ。

あまりにあっけない作戦の崩壊に、二人は抵抗の術さえも思い浮

かばないまま無情にも闇色の奔流に飲まれて消える。

そんな時だ……雨が、降ったのは。

「！？」

予兆も何も無い突然の降水の感触に、思わず二人が反射的に顔を上げた。

最初こそただの雨かと言いたげなものだったその顔が、見る見るうちに驚愕に染まっていく。

なぜなら、それはありえない現象だから。

世界を映し、仮初の世界を作り出す鏡面結界。言い換えればそれは、映し出した瞬間の世界しか反映しない写真のようなものだ。

発動した後には、現実の世界の天気がどう変わろうと影響するはずが無いのである。

描かれた絵の中で雨が降る状況など、異常と言わずなんと言っただろう。

では、今起こっているこれは、何か。

降り始めた雨は間違はなく世界の全てを余すことなく濡らしている。幻でもなければ、何某かの特殊能力とも思えない、至極緩やかな雨足で。

「……………」

奔流は、止まっていた。

人あらざるもの本能でさえ塞き止めるほどの異常事態は、同時に飲み込まれるはずだった那風達をも混乱の渦に引き入れる。

目の前にいる禍鏡の混乱は、つまり。

この光景は、彼らの所業でも無いと言うことなのだから。

「これ……………」

自分達でもない、禍鏡でもない。事態の把握もままならない中で、淡々と雨に濡れるだけだった那風だったが、ふと妙な違和感を覚えた。

結界の性質に関するような知識めいたものではなく、それはもつと肉体的な、感覚的なものに起因する違和感。

自分を濡らし続けるこれは 本当に水なのだろうか、と。

「ヒギヤアアアアアアアアアア！！！？」

それは、悲鳴。

動揺の沈黙の中に突然響いた絶叫に、那凧達は愚か禍鏡さえもが意識を奪われ本能的に目を向けた。

映ったのは、何だっただろう。

「あ……あ……」

眼球の飛び込んできた映像に理解が追いつかない。 理性が潰れて本能が警鐘を鳴らす。

浮かび上がった光景を先ほどまで自分達が見ていたものと一致させることができず、それどころか、もはや頭が考えること自体拒否しているような錯覚を覚える中。 何かを言いたいわけでもないのに、口が勝手に不規則的な音を漏らしていく。

驚愕なのか、恐怖なのか。 それさえも判らない中で、眼球だけがいつも通りに広がる光景を鏡のように写し取っていた。

目の前の、真っ二つになった女王の腹の前で、自分達を襲うはずだった化け物の一体をあるうことが素手で貫き、易々と掲げた男の佇む光景を。

血のように紅い眼を光らせて、降り注ぐ化け物の血を心地よさそうに受けている、もう一つのバケモノを。

「やれやれ、どうせこんな事だろうと思ったださ」

バケモノはそう呟くと、突き刺していた手を大振りに振って、刺さっていた化け物を地面へと放り捨てた。

固体と液体が中途半端に混ざった衝突音が生々しい血生臭さをもつて、見ている者を現実世界へと引き戻す。

心地よさそうに見えた顔も、実は皮肉げなため息をついていたものだったのだと、気付く。

「そ、う、いち」

声に出し呟いた言葉を媒介に、那凧の瞳が徐々に理性の色を取り戻す。

そうだ。自分はこのバケモノを知っている。

かつて戦いを挑み、完膚なきまでに叩きのめされた。ことあるごとに自分を貶し、叩かれた。

それでも決してそれは敵じゃあない。目の前の、このおせっかいな性格の変わり者は

「緋嵩、総一」

理性が現実を理解する。

ようやく、那凧と高原が止まっていた思考を復活させて現状を把握した時には、既に禍鏡達は混乱から立ち直っていた。

だがどの個体も、もはや弱りきった那凧達など眼中にない。今彼らの意識を独占しているのは、たった一人。

「さあ、これからが本番だ、雑魚共」

目の前にいる獲物よりも自分達を遥かに威圧し、脅かす存在。

緋嵩総一というバケモノだけだ。

「ッ、ッ」

きしきし、ざわざわと。蠢く禍鏡の一つ一つから出る生態音が、

まるで一つの意思を持った生き物が舌なめずりをしているように、ねっとり緋嵩を囲う。那凧達を外側へと残し、緋嵩を中心にして完全な円の形を作り上げた。

数の上での圧倒的な優位性が、目の前のただ一人を餌へと変える。「敵を包囲して、潰す、か。確かに有効な手段だ。それで？」

この先はどうする？」

帰ってきたのは、まるで状況を理解していない間の抜けた言葉と動作。

まるで演説か活劇のように、ぐるりと身体を回して言い放った彼

の顔は、何を考えているのか、誰にも分かりはしなかった。

「……………」

刹那の硬直。

嵐の前の静けさを彷彿とさせるその僅かな静寂を前にして、緋高はゆっくりと両手を広げる。まるで自身の死すらも楽しいかのような、コワれたピエロの笑顔を浮かべて。

「さあ、宴の始まりだ」

どこからか、一匹の化物が、鳴いた。

闇に響き、大気を震わせる獣そのままの音は、果たして。目の前の粹がった人間風情への侮蔑か。それとも、自身を奮い立たせるための虚勢か。

どちらにせよこれで 群れが、動く。

「……………」

無音。

鳴き声も、威勢も、足音さえも聞かせはしない。

何一つ相手に感じさせない静寂の中、無慈悲な殺意だけをぎらつかせた瞬速の刃が緋高に降り注ぐ。幾重も幾十も幾百も積み重なった凶刃が上下左右縦横無尽に吸い込まれるように一点へと狙いを定めて放たれる。

瞬きをする間さえもなく。

一撃一撃が必殺の威力を持つ禍鏡の牙、その全てが、一様に炸裂した。

緋高の居た、その空間に。

「所詮、端役か」

声が出た。

降り注いだ刃の、遙か後方で。 気だるげな表情のまま佇む、小さな人間から。

……………雨が降る。

びちゃびちゃと。

びちゃびちゃと。

消えた命の余韻を残し、耳に粘つく音を立て、首の無くなった亡骸達へと。

紅色の、雨が降る。

そして。

彼が、嗤う。

先ほどまで彼が居た場所から今いる場所まで、その直線上に居た全ての禍鏡から首がもぎ取られ、無残にも雨となる噴水を上げ続ける光景を前にして。

生暖かい血に染まりながら、まるで臆することもなく、残った獲物に殺意を向けるわけでもない。その人間は、ただただ楽しそうに、嗤う。

あまりにおぞましく、あまりに凄惨なその光景に、彼以外の全ての生き物が恐怖という感情に全身を染め上げられる。

化け物だからなんだというのか。そんなものは、理由になんかなりはしない。

命を陵辱するものに恐怖を覚えないことなど　ない。

「くく、くくく、どうしたよ？　俺を殺したいんだろう？　喰りたいんだろう？　四肢をもいで内臓を引き裂いて骨を砕いて血を啜りたいんだろう？」

手に持っていた禍鏡の首を掲げて楽しそうに口ずさんだ彼の言葉の、なんと狂っていることが。

彼はそのまま、手に掴んでいた禍鏡の首を、今自分を見ている全ての生き物に見せ付けるような動作で地面に落としたりした。

無残にもひしゃげ、もはや原型さえなくなったそれが粘着質な音を響かせて地面に触れると同時に、彼の足が持ち上がり勢いよく残った頭蓋を踏み砕く。

「さあ、喰らおうじゃないか？ 化け物よ」

赤染めの暗闇の中、悪趣味なスタートピストルを響かせて満面の狂喜を浮かべたのは、何だ？

取るに足らない人間だったはずの、禍鏡にとつてただの餌でしかなかったはずのそれは、それ自身が化け物と呼んだ存在よりも、遙かに

降り注ぐ赤い血の中で閃光のように煌く紅い眼が、哀れにも生き残り恐怖に固まる化け物を、容赦なく、蹂躪する。

「ッ！？ ッ」

あるものは顔面を掴まれた瞬間に圧碎され、

「びっBRRR……」

またあるものは悲鳴を上げている最中に肺に位置する器官そのものが吹き飛ばされ、ただ空気の漏れる音と血反吐を死ぬまで口から垂れ流す。

だがやはり圧倒的に多いのは、一定時間毎に発動する先のような無音のギロチンに、反応する間もなく首を撥ねられて息絶えるものだった。

気が狂いそうな血臭と赤色を空へと注ぐ亡骸の数は、百など遙か昔に超えている。

「」

相対する禍鏡には、戦意などもはや無いに等しかった。

彼らはただ、逃げる。

一瞬先の死に怯えるよりも、まるで勝ち目のない戦いに身を投じるでも、仲間の逃げる時間を稼ぐことも。考えうる行動の一切を忘れてしまったかのように、一心不乱に我先にと逃げ帰る。

かつて自分たちの生まれた、その残骸へ。

「はっ！ 今更親へと命乞いか？」

我関せずとも言いたげに、自分のすぐ隣を無防備に通り過ぎて行こうとした禍鏡を撫でるような掌の一閃であっさり六等分すると、緋高が嘲るように吐き棄てた。

本能のままに母体へと群がる禍鏡を前に、興を削がれるでもなく、腹を立てるでもなく、彼は呟く。

「ようやく、ゆっくり眠れそうだ」

湧き上がっているのは、喜び。

笑みの形を貼り付けて、死の臭いを撒き散らし、踊りはまだ、終わらない。

「……なんなのよ……なんで、こんな」

尚も繰り広げられる血の狂宴に、呆然とした表情でそう呟いたのは、那凧。

隣にいる高原も、既に意識は平静を保つどころか空気に吞まれ、身動きさえ取れなくなってしまっていた。

無理も無い。

突然現れた仲間だと思っていた人間が、誰よりも敵に思えるような惨劇と地獄を作り出しているなど、一体何の間違いだ。

逃げ惑う化け物の足を、腕を、首を、人間が笑いながら玩具のように跳ね飛ばす光景を見て、精神が揺れない方がどうかしている。

「おい……なんだよ、こりゃあ」

「酷い……」

それは、ようやく仲間の下へと辿り着いた者達も同じだった。

那凧達がへたり込んでいる場所の反対側。女王の残骸の後方からようやく援軍に来た轟と御国の二人も、突然眼に入りこんできた地獄に目を奪われて立ち止まる。

「……っ!? 那凧!! 高原!!」

少しの間呆然と固まっていた轟だったが、どうやら惨劇の一部しか見ていない分意識へのダメージは少なかったようだ。

視界の隅でへたりこむ那凧と高原を見て僅かに正気を取り戻し、強張った顔のまま二人に駆け寄って行く。当然その後ろには、彼の声ではっと我に返った御国も続いた。

「虎さん、さなちゃん」

どこか上の空で二人の姿を認識した那凧を見て、やってきた二人

は改めて状況の異常さを思い知った。

「那凧、いった」

言葉の途中で耳に叩き込まれたその一際高い断末魔に振り向くと、挽肉を握りつぶしたような肉々しい破裂音を響かせて、また一匹禍鏡がひしゃげて息絶える。

四人が、息を呑んだ。

いったいどれ程の握力があれば、いや、それ以前に、どうすればこつも簡単にあの化け物共を弄べると言うのか。

まるで映画のシーンでも見ているような現実感の無さと、それを覆すリアルな血生臭さに、援護どころか誰一人声を出すことさえ叶わない。

どれだけ、そうしていただろう。

どれだけ、時間が経っただろう。

気がつけば、雨は止んでいた。

いや、雨だけではない。逃げていたはずの禍鏡の波も、断末魔

も……緋嵩さえも。

「な、え？」

いつの間にか、溢れ出る狂気に飲まれて呆けてしまった那凧達を置き去りにして、惨劇の代わりに張り詰めた沈黙が場に訪れていた。完全に傍観者となった四人が、訳も分からずきよときよとと緋嵩と禍鏡の間に視線を行き来させる。

音が無い。

動きも無い。

ただ、緊張だけは、解けていない。

「……………」

無言のまま、緋嵩は警戒を解いた様子も見せず、ただ静かに目を閉じていた。

一見すれば棒立ちのように見えるが、纏う雰囲気は那凧たちと戦

あの時何が鳴いたのかも、その瞬間に何が起こったのかも。
すべてを見逃して、だから 顔を上げた瞬間、彼女達は狂
うのだ。

「ひっ
」

目を裂けんばかりに見開き、畏怖に体を震わせて、それでも彼ら
は魅入られずにはいられない。

人が認知できる限界を超えているからこそ、壊れずにはいられな
い。

ヒトは決して、神を認識できはしないのだから

キヨウランノウタゲ ｝ b a t t l e、
「 3

ああ疲れた……

今回の『キヨウランノウタゲ』は一気に書き上げました。

やっぱりばとるは勢いが大事ですものね。

というわけで、まだまだ行きますいっちゃんいます。

「チツ、どつりで。瘡に触るわけだ」

それを目の前にして、臆するどころか忌々しげにそう吐き捨てたのは、依然として棒立ちを保っている緋嵩だ。

那凧達四人が息をする事さえも忘れて見入っているのに対して、彼だけは、随分と思考に余裕があるように見受けられた。

果たしてそれは、単に彼がこういった状況に場慣れしている故か。

「このところの騒ぎの原因は、貴様だったというわけか」

それとも、

「なあ、ククリヒメ」

射殺さんばかりに相手を睨み付ける、彼の殺意故か。

どちらにせよ、彼がククリヒメと呼んだ目の前の存在に微塵も遅れをとっていないことは確かだ。

くすくす、くすくすくす

異形が、微笑む。

外見は禍鏡よりもよほど人間に近い。女王の残骸に座る彼女の四肢も、顔も、人間のそれだ。薄く纏った濃紺の着物から除く褐色の肌は艶かしく、容姿は秀麗。腰ほどもある白髪を重力のままに垂らし、手の甲で口元を隠して笑っている姿は化物には程遠く、それどころか、まるで一枚の絵画のような魅力を持って見る者全てを釘付ける。

だが、違う。

これは人間とは違う。

心臓を鷲掴みにされるような威圧感だとか、神秘的な雰囲気だというような些細な問題ではない。

これは、違うのだ。何かが決定的に、人間という存在の括りか

ら外れている。

故に、異形。

久しいのう、赤眼。 こうして見えるのは、いつ以来ぞ？

心底愉快そうに笑みを零す彼女の華やかで荘厳な気配も、血と臓物と化け物がひしめく場の中心では戦慄と狂気以外何も生み出しはしない。

「……」

緋嵩は答えない。 赤眼という呼びかけにも、尋常ならざるこの変化についても。

彼は、最初に彼女に語りかけてからというものの、どういうわけか一切を問わずに立ち尽くしていた。

ただその目にだけ、絶えず鋭い光を宿しながら。

くすくす、なんじゃ、しばらく見ぬうちに随分と寡黙になったではないか。

彼の視線に気付きながらも、いや、それすらも可笑しいのか、ククリヒメは尚も楽しそうに語り続けた。

それとも、ここが気に食わぬか？

ゆつくりと、撫で回すように、景色に沿って腕を伝わせるククリヒメ。

何気ない様子で足元に跪く禍鏡たちを睥睨する彼女が、突然くつと、口の端を持ち上げた。

光が、舞う。

ゆらゆら、さらさらと。 まるで雪が下から立ち昇るかのように、

小さな純白の光が空へ空へと登っていく。

発生源は、禍鏡そのもの。

まるで紐が解けるように、次から次へと禍鏡が光に分解されて消えてゆく。

淡い螢火は元の人外の異形とは似ても似つかぬほどに儂く、美し

だと言つのに、

「……」

笑い声こそ止めたものの、緋嵩の手はまだ顔を覆つたままであり、何よりその口は声を出していた時よりも尚深く、三日月のようにはっきりと割れていた。

「貴様は、奴で八無い」

……なんじゃと？

彼の口から出た台詞に、ついにククリヒメから余裕の色が消えた。刹那の戸惑いは、次の瞬間には絶対零度の眼光となつて緋嵩を射抜く。

だが、冷徹な目で見下ろされると知りながらも彼の言葉は止まらない。むしろより滑らかに、侮辱の言葉を紡ぎだす。

「くくつ、本物の奴が、あんな薄汚い喰い方なぞするものか。成り損ないが偉そうに」

ありつたけの侮蔑と嘲笑を込めたような彼の言葉は、ついに神の逆鱗に触れた。

貴様……！！

「誰に口を聞いている、小娘」

大気が、震えた。

音が響くなどという生易しいものではない。まるで空間そのものが脈動したかのような振動は、一瞬にしてククリヒメの表情を凍らせる。

彼女は、気づいていなかったのだ。自分がとうに、目の前の男の逆鱗に触れるところか剥ぎ取ってしまったということに。

おそらくはこの場にいる誰も理解してはいまい。

時を追うごとに崩れていったシニカルな笑みも、深みを増していった紅い瞳も、感情の高ぶりも、全て力量差が見せる一方的な蹂躪に酔っているようにしか彼女達には見えていなかったのだ。

彼女達は、知る。 彼が何を警戒していたのか、何と戦っていたのか 彼が、何なのか。

「少し力を蓄えタ程度で欠片風情が本物気取りとは笑わせる。 貴様程度、我一人デ十分だ」

割れる。

今の今まで、持ち得る理性を総動員させて押しとどめていた本能が、ついに出口を見つけて騒ぎ出す。

出せ、出せ、出せ、と。

殺せ、喰らえ、引き摺り下ろせ、と。

目の前の存在は何だ？ 神とは？ ククリヒメ？ いや、それより

(ヨルハ、ダレノモノダツタ?)

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオ!!!!!!!!!!!!!!!」

燃える。

手が燃える、足が燃える、胸が燃える、頭が燃える。

「ガ、ア、ア、ア、ア、ア!!!」

まるで火のように、まるで闇のように、精神を莫大な熱量が駆け巡り全身を止めど無い深淵が覆い尽くす。

溢れるのは、腐色の死気。

!!!

振り上げられる腕。

緋膏の突然の変化に、ククリヒメは感じた本能のままに必殺の威力をもって対応した。

彼女の腕が下ろされた時にはもう、緋膏の姿など跡形もない。

例え欠片と言われようと、力を蓄えた彼女は禍鏡など足元にも及びはしないのだ。 事実彼の居た場所には今、無残なクレーター

だけが残り、そして、

「ソノ薄汚イ血八、ドコへ流ソウカ」

自分の頭蓋へと振り下ろされた彼のモノの腕を、ようやく払い退けられる。

くうっ!?

驚愕と恐怖に、思わずククリヒメの口から悲鳴が上がった。

自身が腕を振るったと同時に脳天目掛けて叩きつけられて来た爪を、辛うじて空いていたもう一方の腕で防いだものの。あと数秒でも先に振るった腕の切り返しが遅ければ、恐らくは受け止めた方の腕は引きちぎられていただろう。

未だ痺れの残る腕を信じられないと言いたげな目で一瞥しながらも、手ごたえの無かった迎撃の感触をすぐに思い出し勢いよく怪物の逃げたであろう方向に視線を合わせる。

居た。

漆黒の甲殻に全身を染め上げて、血のような目だけをぎらつかせて、かつて彼女の持ち得る記憶のどこにも存在しなかった怪物が、獲物を前に歓喜を吼える。

紅王鬼

震える唇で呟いたのは、かつて赤眼と呼ばれた異形の真の名。

欠片である自分は知らない、しかしこの記憶のオリジナルは間違いないく知っているはずの、怪物。第八階層の主。

「ク、クク、良イゾ。欠片トイエドモ楽シマセテクレソウダ」

まるで闇に浮かんだ三日月そのものの口で狂った笑みを浮かべながら、怪物がさも愉快そうに嘲笑った。

額から突き出した漆黒の角以外は顔面にさして変化は見られないというのに、もはやそれは人間のものとは思えないほどに、醜悪で、凶暴で、おぞましい。

新しい玩具を品定めする真正正銘の怪物に、ククリヒメが目を剥

いて激昂する。

な、めるなあっっ！！ 地獄の狗如きがあああ！！！！
地が爆ぜる。

突如として幾十の隆起した大地が、ククリヒメを中心にしまるで花のように次々に跳ね上がっていく。

一瞬にして針山のようになった地にはしかし、既に鬼の姿は無い。踏みしめる地が奪われた場合、行くべき場所はただ一つ。

驕りが過ぎたな、鬼！！

空中で自分に向かって突撃してくる怪物を捉え、ククリヒメが晒う。よく見れば彼女の周囲の所々には、光を不自然に屈折させている景色の境目が見て取れるではないか。

その正体は、彼女の手から伸びる糸。

景色が切られていたのは、直径一ミリにも満たない肉眼ではまず捉えることが出来ないであろう極細の糸が、まるで蜘蛛の巣のように彼女へ至る道のすべてを遮断していたが故に起こりえた現象だった。

つまり先の地面の隆起は、単にこの糸を張り巡らした地点におびき寄せるための布石に過ぎなかったということなのだろう。

ククリヒメの目に、明らかな喜色が浮かぶ。

ククリヒメとは元来、縁結びや仲裁など何かを括り取り持つことに長けている神である。それは例え神同士と言えども例外ではなく、かつては最上級の神々の仲を取り持ったと言われる逸話さえあったほどだ。

それだけを聞けば、決して荒事向きの神とは言えないだろう。だが、しかし。

こと戦闘において、彼女の性質は思わぬ攻撃性を発揮する。

括りという概念が、文字通り何かを絡めとるといふ物質的な意味合いへと変わるのだ。それはひとたび絡め捕られれば、何者であろうと切断されるまで逃れること叶わない必殺の罠。

無様に千切れるがよい！

弾丸のようにまんまと網に向かつてくる鬼を見て、勝利を確信したククリヒメが薙ぐように腕を振るって糸を標的へと走らせた。

「ガ、アアッ!!!」

押し寄せる糸を前に微塵の躊躇も無く突き進んでいた鬼が吼えた瞬間。

彼の全身を絡めとる筈だった糸の全てが、閃光に吞まれ、消えた。そして鬼も。

なっ!??

突然全身を襲った思わぬ衝撃に、鬼の所在を追うどころかその場に踏み留まることさえも叶わずに声だけを残してククリヒメが後方へと吹き飛ばされた。

隆起した岩の固まりに勢いよく背中から叩きつけられ、それでも謎の衝撃によつて生み出された勢いは留まらずに次々と轟音と共に岩を散らせて彼女の体を更に後ろの岩へと叩き付けていく。

まるで砲弾のように五つほどの石柱を砕き折ると、ようやくククリヒメの体が瓦礫と共に地に落ちた。

数秒後、後を追うようにして砕けた岩の破片が次々と地面に落ちる中で、またも閃光が散る。

キ、サマあ!!!

「ドウシタ欠片! ソノ程度デハ『ククリヒメ』ノ名ガ泣クゾ!!!」
刹那、ククリヒメの怒号と鬼の挑発が辺りに響いた。

崩れ落ちる瓦礫の中で、閃光が散つては弾き飛ばされる二つの影。一方は瓦礫の中で尚も岩を砕き地を削り、新たな粉塵と瓦礫を生み出し続けている。

対して。

もう一方は最初に触れるものを砕きこそすれ、そのまま後方へと第二、第三の瓦礫を生み出すような事はない。それどころか、まるで跳弾のように反射して次の攻撃にそのまま勢いを利用さえしているではないか。

「ククツツサア、サアサアサア!!! 防イデ見セ口!!!!!!!」

体勢を立て直し、再び向かってくる影に、縦横無尽に襲い掛かる鬼が何度目かの捕縛を試みる。

ぐうっ!?

また、同じ。

実は閃光の正体は、ククリヒメの糸と紅王鬼の爪が触れたことで起こっている現象だった。

自身を絡み取ろうとする糸そのものに対しての直接攻撃。この上ない威力を持った二つの凶器であるが故に、その衝突は大気をたわませ空間に波紋を作り出す。

空間自体を歪ませる程の衝撃は当然の如く場に吸収しきれぬような代物ではない。彼らの接触により生み出した地の歪み、大気の圧縮、至る所で空間の許容量を超えたあらゆる力場は、束の間の歪みを見せた後、しかしそれ以上の力を持って元の状態へと戻される。世界は綻びを認めない。なぜなら、空間が裂けることは即ち、その次元の概念が崩れるに等しいからだ。

だから世界は、過剰な衝突の結果を破壊とはしない。空間を歪ませ、次元を破壊するほどの力場の発生は、それ以上の真逆の力場をもって元のあるべき姿へと戻されるのだ。発生源を、その媒介として。

それは世界からすれば、ほんの僅かで些細な修正。だが当人達からすればそれは、打ち込んだ力が数倍になって跳ね返ってきている事に他ならない。

結果、二人の体は真後ろへと弾き飛ばされる。打ち込んだときの数倍の加速を与えられて。

何度目かの衝撃に自慢の糸は軽々と引き千切られ、抗う術もなく四度の爆破と衝突を繰り返して無様に着地するククリヒメ。

これまで地に付いては即座に迎撃を繰り返してきた彼女だったが、今回は同じようにはいかなかったらしい。立ち上がるうとした途端、遂に蓄積されたダメージに彼女の体が耐え切れず、崩れるように膝を落としてしまう。

「ナンダ、モウ終ワリカ」

真上から響いてきた声に顔を上げれば、

あ、あ

そこには、鬼が居る。

闇と静寂に包まれた廃墟にそびえる瓦礫の山の頂で、何よりも穢れた光が彼女を捉えて放さない。

なぜじゃ、なぜ、妾の糸が、なぜ効かぬ

曲がりなりにも、神の一部。

絶対的な誇りがあった。例え本体ではなくても、幾多の禍鏡を喰らうことでオリジナルの域に至れると信じていた　だが。

ならばなぜ、今自分は無様に地に這い蹲り、目の前のアレをこんなにも畏怖してしまっているのだろうか。

戸惑いと、絶望と。

様々な感情をない交ぜにしたような表情で呻くように問いかける。

「貴様八喰ライ過ギタノサ、余計ナ不純物ドモヲ」

左手に糸の残滓をたなびかせて、あっけなくそう言った鬼。

その言葉に、ククリヒメが、愕然と目を見開いた。

まさか!?

「ヨウヤク気付イタカ、出来損ナイ。欠片ノ分際デアレダケノ魔ヲ浄化シキレルト、本気デ思ツテイタノ力？」

紅王鬼の言葉を否定するかのように、ククリヒメが両の袖を振るって糸を出す。　が、どれだけ力を込めて振るっても、出るのは布の擦れる音が響くのみ。

何も起こりはしない。

「無駄ダ、浄化ノシキレテイナイ今ノザマデハナ」

くつくつと喉奥で嘲笑う紅王鬼を、軋むほどに歯を噛み締めて睨み付けるククリヒメ。

彼女の目に映し出されている殺意と敵意、そして。　恐怖を眺めながら、鬼が芝居めいた動きで左腕を上げて爪を見せ付けるように掌を開いた。

「サア、貴様ヲ守ツテケレル糸ハ、モウ無イゾ？」

細めた瞳に、鋭い齒の立ち並ぶ口からは舌なめずりが漏れる。糸が無くなった今、もうその凶刃を防ぐ術は、無い。

目の前の獲物を、ありつたけの暴力で侵したくて鬨りたくて殺したくて。興奮と悦楽に思考が埋め尽くされた鬼が、狂っていた。

「クク、ククク、クカカカカカツッ！」

げたげた、げらげらと夜空を埋め尽くす哄笑は、或いはこれこそが彼の本来在るべき姿とでも言いたげに辺り一面に響き渡る。

狂え

それを聞く

狂え

全ての者の

狂え

思考を

狂え

埋め尽くしながら

狂え

あああああああああああああああ！！！！

溢れる恐怖に耐え切れず、ククリヒメが吼えた。

目を閉じて耳を覆い、うづくまる様に眼前の光景を否定する彼女

の姿こそ、血に沈む哀れな生贄に相応しい。

だが、精神を焼き切られるような感情の波は、果たして。彼女
さえも知らない結末を生む。

「ッ!?!」

初めて、鬼が目を剥いた。

疾風の如く彼が飛び退った後の瓦礫を細い線が埋め尽くし這いずり回り、あつという間に覆い隠してしまう。

彼女の全身から突然炸裂するように溢れ出た大量の糸が、今、全てを呑み込みと次々に辺りを埋め尽くしていた。

いや、違う。よく見れば、それは糸ではなく、

ああ、あ、あああああああ!!!!!!

髪の毛。

地に座り込む彼女を中心に、まるで絵の具をこぼしているかのようにあっけなく空間を塗りつぶしていく白色の奔流が瞬く間に瓦礫の山を一色へと染め上げた。

「髪結イ……ッ!?! 随分ト上等ナ手品ヲツ!!!!!!」

広がり続ける髪の毛の遙か後方で、方膝と左手を地面に落として着地した紅王鬼が忌々しげに吐き捨てる。

触れるもの全てを呑み込みながら留まることを知らない波の広がりを前にして、鬼が体制をそのままに右手を掲げた。今や指全体が爪のようになったその硬質な凶器を眼光鋭く持ち上げ、構える。

仕損じることなど無いと言いたげな程に無防備で、ただただ振り下ろす瞬間だけを考えられた構え。目を相手にだけ注ぎ、肌で気配を感じ、耳で風を読み、ただただ必殺の瞬間を脳裏に浮かべながら、彼は待つ。

二十……十五……十……

迫る白の平原など気にも留めず、全神経をククリヒメに

「!?!」

見えてしまった。

視界の端。削ぎ落とした風景の一部を。

暗闇と、瓦礫と……そして、馬鹿みたいにへたり込んで死を待つ、
哀れな生贄たちを。

「ア、の馬鹿共ガ　　!!!」
覚めていた意識が急速に鈍るのを感じながら、緋嵩が吼えた。
構えた腕を振り下ろし、地面に根付かせていた手足をあらん限りの
力で弾かせる。

間に合うかなど考えない、ククリヒメの事さえも脳内から外して
反射的に飛び出していった。
「ッ、ッ!!!」

瓦礫を砕き地を削りながら、漆黒の弾丸と化した緋嵩の体が地面
を奔る。

彼の行動を見るどころか、眼前に死が迫っていることさえ露程も
理解できずに呆然と固まったまま視線を漂わす人間に、容赦なくク
クリヒメの髪は伸びてゆく。

三……二……一……
「が、アアアアああ　　!!!!!!」
咆哮、虚しく。

彼の体の僅か数十センチ先で那風の顔にククリヒメの髪の毛が接
し、
「　　!!!」
影が覆う。

「……え？」
その瞬間、彼女の口から出た音は、ひどく間の抜けたものだった。
だが、そうなくても仕方がない。ククリヒメが出てきてからと
いうもの、那風達は皆一様に、無様な醜態を晒していたのだから。
理解ができない。何も感じない。何も見えない。

光景が現実ではなく、まるでどこか遠くの物語のように右から左
へと滑り落ちていく。

現れた異形の圧倒的な存在感に意識の全てを砕き潰されて、物言わぬ石像のようにただただ呆然と風景の一部と化していた。

故に、頬に触れた生の感触という現実のピースを繋ぎ合わせるその時まで、彼女は眼前の光景を理解できなかった。

「が、あぐ、ツ!!」

「ひっ!?!」

喉奥が引き攣れて、甲高い音が漏れる。

目の前に広がる、場違いに美しくおぞましい糸の群れに。そして、

「なぜ、まだ逃げテおらんのダ、この馬鹿共は…… ツッ!」

自分の鼻先に触れたそれを引き裂いた代わりに、雁字搦めにされた化物に。

「がアツ!?!」

ぎちり、と。化物を絡め取っている糸が一層食い込んでいく度に、その口から悲鳴と血が吐き出されていく。

頬を打つ血の感触と、弱々しい愚痴の響き。

あまりにいつも通りで、でもあまりに現実離れし過ぎていて。

訪れた混乱はしかし、確かな思考として彼女達の脳を稼働させる。

「そ、総一っ!!」

「遅いわ……馬鹿者」

那凧の声を皮切りに、高原、御国、轟と、次々に意思の瞬きは伝達していった。

「緋、嵩? …… 緋嵩!!? つくそ! 待つてる、今!!」

「止めるツ!!!!」

豪腕を振り上げる轟に、鬼の口から絞るような静止が掛かる。

普段とは比較にならないその気迫が、瞬時に全員の背筋を振るわせて言葉の続きへと意識を向けさせた。

「触れるな。これは、先刻の粗末な糸とは、比べ物にならん。

曲がりなりにも、神そのもの、直接触れても、取り込まれる、のが、関の山、だ」

苦笑交じりに彼が放った台詞は、外見とは程遠いほどに、緋嵩そのものだった。

だからだろうか。

彼の言葉は思った以上に、彼らの脳裏に抵抗無く、すんなりと染み込んでいった。

「じゃあ、どうするのよ？」

鬼は思った以上に緋嵩で、だからこそ冷静になって、那凧が問う。
「逃げろ」

彼女達の平静を是と受け取った鬼はそう言つと、凶悪な相貌のままだというのに、どこか穏やかさを匂わせる苦笑を浮かべていた。

「この場合は、我が抑える。何、一人ならまだ、なんとかなるだろう。貴様らは玉響を使って、早々に出ろ。ヤツ相手では、どうにもならん」

やはり、そうだ。

だから。

「……」

うなだれる四人。

彼女達に気づかれないよう、鬼が奥歯を噛み締めた。

少なくとも今だけは、全身を握り潰されていく苦痛など微塵も見せないように。強く、強く。

那凧が震える拳を握り、轟が肩を震わせていた。

無限に広がり続ける白と、遠くで唸りを上げるものさえも忘れてしまったかのように。

軋む体を引き絞り、悲鳴と血反吐を呑み込んで笑みの形を貼り付けながら、

「行け、貴様らでは足手まと」

「ふ、ざ、けんなあああああ！……！！」

「なっ　！？」

鬼が、固まった。

那凧が吼える。強く、それまでのふがいなさを一気に吐き出す

「おおおおおおおおお！！！！」

「あああああああああ！！！！」

糸は動かない。

緋嵩に巻きついたそれらは微塵の揺らぎも見せず 訪れる全ての衝撃を、ダイレクトに受け続けている。

御国の遮断と、高原からのありったけの銃撃。

そう。 緋嵩以外の対象に絡む余力をなくす程度の、ほんの僅かな負担のために。

一本一本が意思を持つかのような正確な捕獲力と柔軟性を持つはずの糸は今、動かないのではなく、動けないのだ。

「く、ははっ」

小さく、しかし確かに。

痛みさえも忘れ呆けていた緋嵩がふつと顔を落とし、笑みを漏らした。

救われたように。 悟られないように……どこか、泣きそうな顔で。

「……………！！」

糸が軋む。

固められていた緋嵩の手足が、擦れるとも食い込むとも取れない駆動音を弾かせながら尚も体に糸を食い込ませていく。

終わらない。

「……………っ、っっ！！」

歪みも。

「……………！！」

銃声も。

「おらおらおらおらあああ!!」

「こ、のおおおおおお!!」

打撃も。そして、抵抗も。

「オオオオオオオオオオオオ!!!」

牙を剥き出して獣を連想させる裂帛の咆哮の中、至る所で限界を越えた衝撃が駆け巡った。

走る。

喉からは血が、外殻からは亀裂が、過剰な出力を求められた全身からは悲鳴が。そして糸からは、繊維の千切れる鈍い音が。

「! やった!」

那風の顔が綻ぶ。

最初は、少しずつ。ほつれるように切れていった糸はしかし、すぐに束の裂ける連続音に変わった。

きゃあああああああああああ!?!?

自身の一部を力任せに剥ぎ取られていく痛みにくくりヒメから絶叫が上がる。始めこそ僅かだったそれは、今や止まりよりの無い奔流となつて容赦なく彼女を襲い続けていく。

痛み、苦しみ、否定、声、自分、敵。

彼女の脳内を、おびただしい情報の波が駆け巡っていった。

苦痛は死への恐怖へと変わり、そして。

生への執着は、再び彼女に感情と思考を取り戻させる。

はあ、はあ、はあ……おのれっ!!

まるで糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちたくくりヒメが、呻くように歯の間から怨嗟を漏らした。

額に珠のような汗を浮かばせて未だ激痛の抜け切らない様子の彼女は僅かに顔を上げると、遙か前方を睨み付ける。

浮かんでいるのは、色濃い憔悴と、それ以上の殺意。

誰に向けているかは、言うまでも無い。

「フウ……フウ……フウ……ッ！」

全身をヒビ割らせ息を荒げながらも尚、両の足で立ち獲物を捉え牙を剥き出し続ける鬼の姿が、その瞳に映し出されていた。

彼女が意識を取り戻すのに合わせて、周りを埋め尽くしていたはずの白い絨毯は既に霧のように消滅していた。しかし、だからといって緋嵩が優勢と言うわけでもない。

彼もまた、ククリヒメの髪結いに相当痛めつけられていたのだから。

体を覆う外殻はもはやいつ崩れてもおかしく無いほどのヒビに覆われ、力を失ったようにだらりと垂れ下げられた左腕に至っては既に使い物にならないだろう。

両者の間に、束の間の静寂が流れる。

構えていると言うにはどちらもあまりにお粗末な格好だということに。

誰一人として、微動だにしなかった。動くどころか息することさえも恐ろしく。

ろす

静かに、ククリヒメの唇が動いた。

ゆっくりと、だが、穏やかさとはまるで無縁の、黒く、重々しい響きを以って。

殺してやる、貴様は、必ず、必ず、必ず、必ず！！

それは、まるで呪詛。

地の底から湧いてくるかのような怨嗟の声が、耳の奥で粘ついて脳裏に染みこんで離れない。

「……ッ！！」「……ッ！！」

緋嵩を含める五人が、一斉に身を強張らせた。

ククリヒメの言葉に合わせるかのように、空間の彼方此方からガラスの割れるような甲高い破碎音が木霊したからだ。

至る所から響き渡る音とただならぬ雰囲気、緋嵩の後ろから次

々に動揺の声が上がる。

「…………ちつ、その手があったか」
ただ一人。

絶えずククリヒメだけに焦点を合わせていた緋嵩だけが、苦笑交じりに舌打ちした。

殺してやる、殺してやる、殺してやる

ぶつけられる言葉は止まず、殺意は微塵も揺らがない。

しかし、ククリヒメの姿だけが、ぼんやりと霞むように薄れていった。

たった数秒の出来事。

濃密な気配だけを残して、あれだけ目をぎらつかせていたククリヒメの姿は、もうどこにも、ありはしなかった。

暗闇と星空と人工の光が、まるで何事も無かったかのように夜の公園を彩りながら。

ゆらゆら、ゆらゆらと。

穏やかに光る。

「た、たすかっ…………た？」

口火を切ったのは、御国。

僅かな光と虫達の声の中で、緊張と恐怖とそれ以外の感情のあらゆる糸が切れかかったような震え声が、場に落とされた。

返事は無い。

他の三人も似たような状態で、戸惑いと希望に絶るような表情のまま、ゆっくりと辺りを確認していたのだから。

「は、はは」

乾いた笑い声を残し、腰が抜けたとばかりに高原がべしやりと地面に尻餅をつく。

「終わった…………」

緊張と混乱と血生臭い惨劇の連続をようやく終えて、一気に四人の肩の力が抜けた。

まだ問題が解決したわけでも、実際には何が起こっていたのかも

はつきりとは分かっていない。だがそれでも。

今、生きている。

それだけで、もう十分だった。

「なんかもう、なんなのよほんと」

尋ねるといふより、現在の状況そのものへの愚痴に近い台詞をこぼしながら、那風が緩んだ苦笑を浮かべる。

各々生還の余韻に浸って腑抜けた顔をしている三人も、同じように苦笑で返した。

互いに互いの生還を喜びつつ、穏やかな時間が流れる。

「ま、とりあえず全員生きてて良かった、ってやつだ」

「同感だね」

地面にしゃがみこんだ轟と高原の会話を聞きながら、那風がはたと何かに気づいた。

「あれ？」

ぐるぐると周りを見回すと、程なくしてそれは見つかった。

「ちよつと総一、何まだ一人でかつこつけてんのよ」

先刻から同じ位置、同じ格好で佇む人在らざる仲間を、那風が軽口と共に軽くはたく。

「……え？」

何かが、彼女の頬を打つ。

それが何なのか判断する間もなく、目の前の仲間が、ぐらりと揺れた。

受身をとろうとさえせず、かつて比類なき力を誇った筈の化物が、実に無防備に、地面へと倒れ伏したのだった。

ピクリとも動かない足元の彼を見て、ようやく彼女は頬を伝うぬめった液体が何か気づく。

「い、」

自分達にとって見慣れていたはずの、何よりも紅い赤。

外殻が剥げ、いたるところから流れ出る、赤。

よく見れば自分の服も、足元も、倒れる瞬間に彼から噴き出たそ

れに染められていて

「いやああああああ！ 総一 つつ！！」
弾かれたように、彼女が叫ぶ。

「緋嵩！！」

「緋嵩さん！！」

へたり込んでいた面々も那風の悲鳴と地面に横たわる緋嵩の姿に
気付くと、急いで駆け寄って来た。

率直に言って、緋嵩はひどい有様だった。

全身からは出血が止まらず、こと左腕に至っては裂傷と捻られた
跡でくつついているのが不思議なくらいである。

「どうしよう血が止まらないっつ！！」

本当なら衣服を裂いて布を作るなり出来そうなものだが、気を抜
いていた最中に突然起こった出来事ゆえにそんなことさえも分から
ず、那風はただ傷口を素手で押さえることしか出来なかった。

「轟、君ならっ」

「だめだ、範囲が広すぎる！ それに俺の『纏い』は前にこれで防
がれてるからな、やっても効くかどうか。 くそっ、」

「と、とりあえずお店まで運びましょう」

「それじゃあ間に合わない！」

「じゃあどうしたら……」

思った以上に深刻な状態に、後から駆けつけた三人もどうにも出
来ずにうなだれる。

「総一っ、総一！ 起きなさいよ、ねえ！！ まだなんか隠してる
んでしょ、こんな傷すぐに直せるんでしょ！ 総一っ！！！！」

どれだけ呼びかけても、答えは返ってこない。

尚も広がり続ける血溜まりの中で、那風の声だけが無情に響き渡
る。

「っ！！」

既に息をしているかどうかさえ分からないまま、それでも傷を押
さえ続ける那風を見て、御国が同じように緋嵩の傷口を押さえだし

た。

「こうしてても、何も始まらない。轟」

「ああ」

高原が服を脱ぎ、轟は両手に力を込めて共に止血の準備に掛かる。まだ、諦めるわけにはいかなかった。少なくとも、たった一人でも諦めていない限り。

何もしないなど、ありえない。

「まったく、だから言ったのに。本当、馬鹿なんだから」

その時だった。

後ろから、ひどく呆れたような女の声が響いて来たのは。

予期せぬ方向からいきなり落とされた声に、四人が反射的に顔を向ける。

「手、貸してあげましょうか？」

銀髪の女が、そこに居た。

アラザルモノたち ｝Pandemonium｝「3・2・1」(後書き)

ストック全て放出してしまいました、あはは。

次から新章なのですが………次回は来年ですかね、これは(苦笑)
デハでは皆様、よいお年を(^| ^)ノ

(感想などいただけると、作者泣いて喜びます)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1675/>

カオスポット ~ chaosing pot ~

2010年12月25日22時41分発行